

---

# **竜の目のクエスト 【少年漫画的王道ファンタジー小説】**

猫田犬次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜の目のかエスト 【少年漫画的王道ファンタジー小説】

### 【データ】

2021Z

### 【作者名】

猫田犬次郎

### 【あらすじ】

勇者の息子であり王子である少年は、旅に出て、恋をして  
魔王になる。

## プロローグ 殺害（前書き）

旧題は「ドラゴスクエスト」というパチモンみたいなタイトルでしたが、ちゃんとしたタイトルに変えました。

ヒロインの名前を「リイラ」、主人公の姉の名前を「ベラ」に変えました。

アルカディアで読みたい人はこちら

<http://www.main-net.bbs/sst/sst.php?act=dump&cate=original&all=21231&np;n=0&amp;count=1>

縦書きで読みたい人はこちら

<http://pdfnovels.net/no021n/main.pdf>

ピクシブで読みたい人はこちら

<http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=65145>

## プロローグ 殺害

> . i 1 1 5 2 1 — 1 6 3 6 <

### プロローグ 殺害

闇夜。

そこは世界の果てだつた。乾いた風が、何もない荒野を駆ける。

……  
はあ……はあ……

早足で進む男がいた。

……  
はあ……はあ……

小高い丘に砂埃が立つ。

……  
はあ……はあ……

興奮、動搖、焦燥、不安、恐怖。それらが順繰りに男を追い回す。  
くそっ！くそっ！どうしてこんなことをする羽目に！王は  
本当に呪いを恐れているのか？わからない。だがおれは恐ろしい  
さ。こんな赤ん坊も殺せないんだから。くそっ！震えるんだよ手  
が。このガキめ、今にも呪いをかけてきそうな目でおれを見やがる。  
まったく、ガキでもやっぱりあのライオス王の血だ。どんな力があ  
るかわかりやしない。ああ忌々しい！

松明を持つた男の腕の中には、まだ乳離したかどうかというほど  
の子供がいた。一歳過ぎといったところだろう。毛布に包まれて眠  
つている。

とある王の元に 予知の一族 の者がやつて来たのが、全てのき

つかけだつた。

「それは本当か」

煌びやかな王宮の一角で、ある男が座つたままで言つた。訝しげな表情を浮かべるが、動搖する様子はない。

彼の白髪混じりの長髪は、金や銀の刺繡を多くあしらつた華美な服装に品良く垂れていた。肩幅はあるものの、そのぶん長身で全体の印象としては細身の体つきである。しかしその気品ある容姿に反し、黒く光る目だけは異質だった。よくある鋭い目などではない。重いのだ。力を持つて威圧するような目なのである。

彼こそが勇者王ライオス。若くして世界の国々を口の力によって統一した男である。もう十年近く戦いの場に出向いていないが、その日は今もなお強さを物語る。

ライオス王と目が合い、予知の一族の者はすかさず顔を伏せた。王の目の重さに耐えられなかつたのだ。この豪奢でいきすぎた装飾にも思える王宮でさえ、王の目にひれ伏しているかの如く大人しく感じる。彼は王の目を見ず、それでも震えてしまふ声で告げた。

「……間違いありません。王の「」子息はいざれ王を……」

王の息子は王を殺す。

それが予知された未来であつた。

予知の報告自体は珍しくない。必ず当たるため、予知の一族の者は予知が成功する度に報告しに来ていたのだ。

ただ、予知する内容を恣意的に選ぶことは出来ない。それに、予知された未来を変えることも出来ない。どんなに対策をしようと、死ぬと言われた者は死に、来ると言われた嵐は必ず来てしまう。出来るのは予知された事故や災害、紛争などに最善の対応を取ることだけである。

しかし、それでも被害を最小限に出来るので王は予知の一族の力を非常に重宝し、要職でも貴族でもないが予知の一族の者なら誰であろうと、報告のための謁見が許されていた。

その予知が、今回は王の死を示したのだ。

「お前たちでも、それは絶対に変えられないのか？」

王の腹から出る低い声が、男に響き、顔を上げさせた。王の皿の重圧が再びのしかかる。

「は、はい、申し訳ござりません」

彼は額を床に付けて謝っていた。意識したことではなく、それは半ば本能が取らせたポーズだった。

「ならば変えよう……」

王は静かに言った。

「で、出来ません！」

彼は再び告げたが、王は意に介さずに続けた。

「お前たちではない……この私が！　変えてみせようではないか！　王宮全てが振動するが如く、力強い声が響いた。調度品の輝きすら、萎縮したように見えた。

「エディたちをここへ」

そう言つて連れてこられたのは、栗色の髪に凜とした皿つきの五歳ほどの少年だった。第一王子のエディである。

「エディ、お前はとてもいい子だ。お前が私を殺すなんて到底思えないよ……」

立ち上がった王はエディの頭に手を乗せ、優しくなでた。エディも微笑んだ。

「だが――」

次の瞬間、王の手はエディを虫のように叩き潰した。王の王たるゆえんが、一瞬垣間見えた。エディの笑顔はもうそこにはなく、残つたのは残骸と血だまりだけだった。しかし王の手には血の一滴さえも付いていない。

「未来を変えるためには仕方ない。愛していた……愛していたが、必要な代償だ」

王は決断に少しも迷わなかつたといつのこと、慈悲深い眼差しをしていた。

「さて、これで可能性は半分……」

そう言つて王は乳母に抱かれた黒髪の第一王子のせつへ田をやつた。

「お、お待ちください！」

叫んだのは乳母ではなく、臣下の一人だつた。声はうねうずり、怯えた様子であつた。

「こ、ここで殺してしまつてはどんな呪いをかけられるかわかりません！　お、王のためにも遠くの地でやるべきでしょ！」

その進言はどう聞いても王の命ではなく、自分の命を呪いから守りたいがためであつた。だが王はそれも一理あると思つたらしかつた。

「確かに……」ヒで殺すとして、それでも予知が実現するとしたら呪いしかなさそうだな」

臣下の男はほつとした表情になつた。しかし、王は間を置かずに言つ。

「ならば王御から最も遠い地で殺して来い……お前が」途端に蒼白な顔になつた臣下の男は力なく答えた。

「……はい」

呆然と立つ男に王は質量でもありそつた声を放つた。

「今すぐだ！」

男は返事が叫びかわらない声を上げ、慌てて乳母から第一王子をひつたくつて出て行つた。

しばらくすると王は側近を呼び寄せた。

「あいつを監視しろ。遂行を確認したら殺せ」

歯切れの良い返事とともに側近の男も出て行つた。

王は再び座ると、落ち着いた様子で言つた。

「これで、未来を変えられたとは思わないか」まるで声の重さが背中にのしかかるように感じた。予知の一族の者は何をしても予知を変えられないということを知つていたが、思つた。

「のHなら変えてしまふかもしれない。」

気付けばかすれた声で答えていた。

「……はい」

そうして今、最果ての荒野を臣下の男が歩いている。

男はそこで子供を殺すはずだった。しかし、出来なかつた。胸に剣を突き立てようとした時、男は子供の目を見てしまつたのだ。

射抜くような目。

男はそれだけで気圧された。その瞬間男はやはり呪いを恐れたのだ。呪いだけではない。王の目には程遠いが、圧倒的な力の差を見せ付けられたような気さえした。

男は自分で殺すことを諦め、最果ての崖から落とすことになった。これなら直接手を下さずに殺せる。それに、少しでも遠い方がいいじゃないか。そう自分に言い聞かせた。

馬を繋いでおける場所から崖まではしばらく歩かなければならなかつた。

はあ……はあ……

砂と岩ばかりの地面で歩きにくいが、男を疲れさせるのは精神的な圧迫であった。もう既に呪われているのではないか。そんな考えもよぎる。

最果ての崖に着くと、そこは暴風が吹きすさび、一面の砂嵐だつた。常に「ひづり」と風が鳴り、崖の近くだと十歩前は見えない。ここが世界の果て……向こう側には何もないのだろうか。

そう思つて崖に向ひて田を凝らして見ても、やはり闇と砂嵐の先には何も見えない。

崖の作る氣流と荒野の砂によつて、最果ての崖には常に砂嵐が舞つていると聞く。おそらく眞間でも見えないのだろう。

男は足元に転がる石を蹴飛ばした。が、いつまで経つても風の音しか聞こえなかつた。崖の下は虚無で底なしと言われるが、本当

なのかもしない。

松明を地面に突き立てる、男は安らかに眠る子供の毛布をはいだ。何かに引っかかるて助かってしまわぬように、子供は裸にされていた。

子供を抱えると男はすぐさま大きく前へ投げ出した。男には躊躇う余裕すらもなかつた。

崖を落ちてゆく子供と目が合つた。起き抜けのぼんやりとした目が、段々ときつい光をたたえ始める。

悪寒が全身を駆け巡り、男は背を向けた。そのまましばらく息を潜めた。そして深呼吸をしてから再び崖の方を見ると、子供はもういない。

「……やつた。やつた！ なんともない！ やつた！」

男はやり遂げたのを確信すると、すぐに松明を手に取り馬を繋いでおいた場所へ走つていった。

## 第一章 出会い 1（前書き）

ヒロインの名前を「リイラ」、主人公の姉の名前を「ベラ」に変えました。

第一章 始まり

1

荷馬車が立てた砂埃は風に消え、剣を佩いた冒険者たちがそぞろに通りを歩く。そこは宿場の村であり、中心部の大通りには宿屋が多く立ち並んでいた。

大通りから何本か外れた、冒険者より地元の者が多く歩く通りで、怒声が響いた。

「待ちやがれ！」

三十台半ばで瘦せぎすの店主が怒って果物屋の店先に出ると、十四、五歳に見える少年がひらりと向かいの肉屋のひさしに乗っかった。黒髪に凛とした黒い瞳。紺色のシャツに黒いズボンの裾を膝下までたくし上げている。

「やなこつた」

少年はリンク口を齧りながら不敵に笑うと、シャツの裾をひらつかせ、軽やかに飛び跳ねて次々と屋根を渡つて消えていった。

「つたぐ、悪ガキめ……」

立ち去った店主は頭を搔いた。

「ど、どうしたんですか？」

店主へ声を掛けたのは、肩までの黒髪にブラウスを着た素朴そうな少女だった。年恰好は先ほどの少年とあまり変わらない。宿屋の娘、リイラである。

リイラは逃げていった少年の尋常じゃない身のこなしを目撃し、店主が何か深刻な被害を受けたのかと思った。そうしてリイラは少

し躊躇したものの、思い切って店主に話しかけたのだった。

「いや実はね、たつた今ドラゴスの奴が来たんだが……」

そう言って振り向いた店主は驚いたような顔をして口<sup>ヒ</sup>もつた。

この人も……

リイラと初めて接する者は皆そういう反応で、その度にリイラは悲しくなるのだった。

それでもか弱い少女でしかない彼女の姿を見て、大抵すぐに気を使つてわざとらしいほど氣さくに話してくれる。

この店主もそうだった。先ほどの反応を誤魔化すように笑顔になつた。

「ああ、君が噂のリイラちゃんか。よく来てくれた。さつきのはねえ、『ドラゴス』っていう悪ガキが来たんだ。したらこんなガラクタなんか置いてリングを何個も持つていっちまたんだよ」

店主の手には何やら金属製の筒が握られていた。

「『等価交換だ』なんて言いやがるが、こつちはこれが何なのかもわかりやしねえよ。そこで問い合わせてやろうとしたら、あつという間に逃げちまつたのさ。きっとあいつも知らねえんだらう。ありやただのリング泥棒だよ、まったく」

店主は大袈裟に呆れかえつてみせた。

そうやって演技してくれるのはまだ受け入れてもらえないことの裏返しだったが、それでも好意から出た結果であるので、リイラは笑顔で返さなくてはと思つた。

ところが店主には悪いが、深刻な事態かと心配したのに殊のほか滑稽な話だつたせいで、意識的に笑おうとする前に自然と笑顔になつていた。些細な差だが、これには大きな意味があつた。

の人ドラゴスさんつていうんだ……

リイラの胸に灯つたものは、火と呼ぶにはあまりにも優しく、温もりと呼ぶにはあまりにも熱かつた。

その瞬間から、何かが変わつた。強い日差しは自分を勇氣付けてくれているかのようで、乾いた風も背中を押してくれているような

気がした。リイラは初めて、自分がこの世界に立つ一人の人間なんだと感じることが出来た。

空を見上げれば、大きな鷹が旋回をしていた。今まではそれを見て怖がっていたはずなのに、今は違う。青い空に翼を広げ、悠々と舞う姿を気持ち良さそうだと思った。そして羨ましくも思った。

「今日はいいことあるかもっ」

リイラの足取りは軽かつた。

鷹はリイラのいなくなつた後も、ずっと大通りの上をぐるぐると旋回していた。

どれほどの時間が経つたかはわからない。鷹は飽きたのか、描いていた円から外れ、西のほうへ向かつた。

しばらく飛ぶと、そこはもう村の外れだった。あたりは乾燥した砂と岩ばかりの平地で、ところどころに高さ数十メートルほどの長い岩山が立つていて、細い岩山が立つている。

恐らく偶然であろうが、そういう岩山が密集した場所があつた。大小さまざまな岩山が円形に集まり、ちょうど真ん中は何もない砂地になつていて、まるで円形闘技場のようであった。

その自然が作つた円形闘技場では、何人もの子供が遊んでいた。

「我らクエスト団！」

「我らクエスト団！」

十歳を少し過ぎたくらいのやんちゃな少年たちが叫んだ。その鷹は小さな子供なら簡単に仕留めることができる。高い岩山に登つている子供なら多少大きくても突き落として殺すことだって可能だ。狩りの欲望を抱いた鷹は闘技場の上を旋回し、獲物を物色し始めた。

すると、一番高い岩山の上に、リングを齧る少年がいた。しばらく前に大通りで見た少年だ。鷹は猛禽類特有の目で、少年に焦点を

合わせてズームしていった。かなり高い岩山なので落とせば殺せること思つたのだ。

少年はリングゴを食べ終わると寝転んだので、上空の鷹と田が合つた。

狩られる！

そう思つたのは鷹のほうだった。鷹は少年の射抜くような目に気圧され、その場から逃げていった。

「やっぱ射程距離が短いのが難点だよな。威嚇しか出来ねえや」少年は寝転がつたままつぶやいた。次のリングゴに手を出そうとしてあたりを探るが、もう全て食べてしまっていた。

やがてむくりと起き上ると、鷹を追い払つた彼の目は闘技場で遊ぶ少年たちを見ていた。その凛とした目を見れば誰であろうと、彼が少年たちのリーダーだとわかるに違いない。彼こそが竜の目のドラゴスの異名を持つ少年であつた。

ドラゴスがその黒い瞳で見下ろす地面では、主に彼と同じ十四、五歳の少年たちが遊んでいた。無論ドラゴスと同じ悪ガキばかりであり、「遊ぶ」といつても、彼らがやつているのは格闘であつた。そして誰もが魔力を使って戦つている。

魔力は精神の筋力。

そう言われているように、魔力は筋力のようにごく当たり前のものである。鍛えれば強くなるし、元から魔力の強い者もいる。

ただ、筋力と違つて特殊な働きをする。しかも個人によってその働きが違う。ここでもある少年は体を強化し、ある少年は炎を操り、ある少年は岩を浮かせたりしている。

こういった魔力の使い方に体系的なものはない。人々に個体差がありすぎて、同じ「炎を出す」という結果でもそこに至る過程は千差万別だからだ。

その大きすぎる個体差を生んでいるのは何よりも種族の差である。この闘技場でも竜人族や悪魔族など、様々な種族の子供がいる。

しかし、そのほとんどが混血であり、一種族の純粹な血を受け継ぐ者などは世界でも珍しいとされる。大抵は混血が進み種族の外見的特徴がほとんどなく、見た目はただの人間だ。そういう者は大雜把に「混血」と呼ばれる。外見的特徴を残す者は「種あり」と呼ばれるが、その特徴も角が生えていたり尻尾が生えていたりする程度である。逆に混血がかなり進み、もはや種族が特定出来ない者は「雜種」と呼ばれる。

人間族という他の種族とは別系統の少數種族も存在するが、「混血」や「雜種」と区別がつかないため、人々は人間族も他の種族たちも十把一絡げにこう呼ぶ。

### 魔族。

そしてこの世界は魔界と称す。

クエスト団と名乗る魔族の少年たちが戦う闘技場では今、「種あり」で角と尻尾が特徴的な竜人族の少年リムが炎の球を繰り出している。

人々の混血による均質化が進んでいるとはいえ、血の配分が少しでも違えば魔力を使う感覚は別物である。一般的に血が濃いほど魔力が強く、その代わり偏りが大きいとされている。

竜人族の血を多く持つリムも例外ではなかった。竜人族が得意とする炎は非常に強力であったが、それ一辺倒であった。

対する少年はクエスト団一番手、トルガであった。褐色の肌で、年の割に長身である。混血がかなり進んでいて、彼自身ももはや自分のルーツとなる種族を知らない。典型的な「雜種」である。

トルガの魔力にも「雜種」らしい特徴が出ていた。混血が進むほど魔力の作用に偏りがなくなるので、様々なことが出来るようになる。トルガもリムが繰り出す炎の球を氷の壁を作つて防いだり、水で消したり、風で吹き飛ばしたりして防御していた。雑種だけあってかなり多様な技を持っているのだ。トルガも練習のためにあえていろいろな魔力の使い方を試しているようだった。

しかしその反面、強さが足りない。少し時間が経てばどうしても打ち破られてしまう。したがって彼が最終的に炎の球を防ぐのは拳である。

トルガが最も得意とするのは武術であった。魔力を腕の筋肉に込めてパワーを増幅させ、拳にも魔力を込め強化する。そういうふた魔力の使い方を武術に組み込んで戦うのがトルガの戦闘スタイルであり、雑種がその力を最も発揮できる戦闘スタイルである。雑種は血の配分こそ混沌としているが、体の構造は均質化しているので、武術のような体系化された体の使い方がかなり有効となるのだ。

つまり練習用の多様な魔力による防御が打ち破られてからが、トルガの実力である。

トルガは向かってくる炎の球を次々と拳で殴り、かき消してゆく。見る見るうちに距離を詰め、リムの横つ腹に一撃を食らわした。もちろん手加減はしているように見えた。

「うう……」

リムは声を出さずに苦しみ、その場にへたり込んだ。

「こつちは避けないつて制約なんだからもつと攻めて来いよ」

トルガは物足りなそうだった。

「……無理……だつて」

リムはしぼり出すような声で言つた。

リムだつて強いほうなのだが、トルガとでは実力に差がありすぎた。トルガは今日、全勝勝ち抜き中であった。

「おいでラゴス！ 次はお前が來い！」

トルガは岩山を見上げて叫んだ。ドラゴスはかなり高いところにいたので、それをいいことに聞こえない振りをした。さりげなくあさつての方向を眺める。

「ティカムー やるー」

代わりにトルガの前へやつて来たのはまだ十歳にもならないティカムーだった。手には棒切れを持っている。本人としては大真面目にやる気らしい。

「」の少年は皆に おチビのティカムー と呼ばれる通り、まだ幼すぎる。クエスト団には十歳過ぎの子も何人もいるが、さすがに十歳にもならない子を少々荒っぽいクエスト団に入れることは出来ない。だがいつも勝手に付いて来てしまってるので、結局クエスト団の誰かがお守りする羽目になつていて。

「こらこら危ないから来ちや駄目だつて。おいロツカ！ ちゃんと見てろつて言つただろ！」

トルガにそう言われて振り向いたのは鳥人族ちょうじんの血を持つ おしゃべりロツカ。岩場で誰かと話しこんでいて、ティカムーが闘技場に降りていくのに気が付かなかつたようだ。

「え？ なに？」

「だからティカムーだよ！」

「あれ、いつの間に！ へへ、わりいわりい」

さすが口と足がはやいと言われるロツカ。自慢の俊足で駆け巡り、ささつとティカムーを連れ戻した。

ロツカは鳥人族の血を引くが、それでも「混血」なので見た目は人間であった。そういう風に自分のルーツとなる種族を知っているが姿は「」く普通というのが魔族おいて最も一般的な「混血」というやつだ。「種あり」であるリムのように特徴的な者は少数派だ。

ただ、角だと羽だと尻尾とかいう要素は間違いなくモテる。クエスト団の中では若干ヘタレであるリムも、村の少女たちには密かな人気がある。

「リム、もう一回やるか？」

「いや無理、おなか痛い」

リムは嫌そうな顔をして日陰に逃げていった。トルガはまだまだ物足りなそうだった。最近のトルガは体の急成長もあって格段に強くなっていたのだ。

トルガはロツカのほうに目を向けるが、おしゃべりに夢中で戦つてくれないようだ。そんなロツカではあるが、格闘においてはトルガに次ぐ実力を持つ。

ドラゴスは再び寝転がった。

「おーい、ドラゴス！ 降りて来いよー！」

だがトルガの呼びかけはやみそうになく、仕方なくドラゴスは寝転がつたまま手を挙げて答えた。そして起き上がるのも面倒なので岩山の淵で寝返りをうつと、体は宙に投げ出された。そのままどんどんと速度を上げて落下していったが、ドラゴスは空中で姿勢を少し整え、ふわりと着地した。黒髪が揺れただけで、何とも涼しい顔をしている。

「やるか」

「しつかし、それどうやるんだ？」

トルガが疑問に思うのも無理もなかつた。いくら魔力を込めて強度を増すことが出来るとはいえ、それでは高い所から着地しても地面に大穴を開けるだけである。

「だからいつも言つている通り、なんか体の周りにたくさん魔力を纏まとうう感じだつてば」

「いやいやいつも説明があやふや過ぎるんだよ」

トルガにはまず魔力を「纏う」という感覚がわからぬようであつた。当然である。「よく一般的な感覚だと、魔力は「込める」ものなのだ。だからドラゴスが眞面目に説明しても誰も理解してくれない。

ドラゴスは同年代と比べるとやや背が高いが、目の前に立つトルガと比べると明らかに体格差があつた。トルガは実に強そうな見目をしている。

伸びをして体をほぐし、ドラゴスは紺色のシャツを脱いだ。砂で汚さないようにするためだ。するとその背中にある彼の特徴が露わになつた。

道具屋を営むドラゴスの家は竜人族であり、父親は立派な角と羽と尻尾を持つかなり濃い「種あり」であるが、ドラゴスにおいては何もない。しかし、ドラゴスには人に竜人族だと思わせる点が二つあるのだ。

一つはその背中である。彼の背中には大きな傷跡があった。それは左右に広がる翼の名残にも見え、いつか生えてきそうな雰囲気さえある。

そしてもう一つは目である。その射抜くような目は生粹の竜人族より竜のような目であったのだ。だからいつしか自然と 竜の目 のドラゴス という二つ名が彼に付いて回った。

ドラゴスはまっすぐに立つと、その 竜の目 で見据えた。

「トルガ、魔力なしでやろうぜ」

「勝てると思つてゐるのか？」

「そのうちね」

ドラゴスは不敵に笑う。

魔力無しの格闘ではいつもトルガが勝つていた。やはり武術の適性はトルガに分があり、それ以上に体格差があった。ドラゴスの身体能力も高い方だったが、トルガに比べればパワーもスピードも劣つてしまつたのだ。

勝負が始まつてみると、しばらくは善戦するものの、やはり段々とトルガに押されていった。

ここだといふところで右の拳を繰り出すが、トルガにかわされ、代わりに強烈な一撃を腹に食らつてしまつた。トルガの突き上げるような拳によつて体が一瞬浮き、仰向けになつて倒れた。

「くつそ、手加減しろよ……」

今日もトルガに負けてしまつたのだ。

「だつたら魔力使えつて」

ドラゴスが魔力なしで戦いたがるのには理由があつた。普通に魔力を使つたら勝負にならないのだ。魔力を使つた戦いでは、ドラゴスは一度たりともトルガに負けたことがない。まぐれすら起こらないのだ。

「剣持てよ」

ドラゴスは起き上がつて背中に付いた砂を払いながら、促した。  
「よし来た」

トルガは嬉々として岩場に立て掛けた。自分の長剣を取つてきました。やはり格上の相手と戦うのは楽しいようだ。反対にドラゴスは少しつまらなく感じ、呟いた。

「勝てると思つてゐるのか？」

「ああ、そのうちな」

ドラゴスはティカムーの持つていた棒切れを借りた。ティカムーは自分の「愛剣」を取られて泣きそうになつたが、適当に言いくるめて後はロッシカに押し付けた。

それはちょっとした木の枝でしかなかつたが、ドラゴスにとつては武器が何であろうとあまり関係はない。負けることはあり得ないのだ。

「さあ来いよ」

ドラゴスは構えた。トルガも中途半端じや太刀打ち出来ないのを重々承知していく、すかさず全力で斬りかかった。

トルガは剣に魔力を込めて強化している。おまけに腕力だつて相当だ。したがつてその一撃は凄まじい威力を持つてゐるはずだつた。ところがドラゴスはそれを難なく左手で受け止めた。

「くそ、これでも駄目か」

トルガは悔しがつた。またしてもトルガの剣はドラゴスに届かないのだ。

届かない。

そう、届いていないのである。普通は魔力を込めて皮膚を強化するものだが、ドラゴスの場合は違う。魔力を纏つて魔力自体を硬くして防いでいるのだ。それにより、斬つても突いても剣がドラゴスの肌に触れる事はない。

纏つた魔力を自在に操ることは、ドラゴスにとつては難しいことではない。いつも「イメージするだけ」と言つてゐるが、やはり誰もわかつてくれない。だがドラゴス自身も他に同じことが出来る者に出会つたことがないのでその魔力が何なのかよくわからず、それ以上の説明が出来ずにいる。

トルガの剣を左手で受けたドラゴスは、右手に持った棒切れで突いた。トルガは瞬時に下がり、紙一重で回避した。

たとえ棒切れでもドラゴスが持つともはや棒切れではない。普通は魔力でいくら棒切れを強化してもたかが知れているが、ドラゴスは棒切れを鋼のように強化した魔力で覆っている。だから覆う媒体が棒切れだらうと何だらうと関係ない。ドラゴスが持てば何だつて鋼の剣になる。もしトルガが目に魔力を集中させれば、うつすらとドラゴスの纏う魔力が見えるだろう。

下がつて距離をとつたトルガに対し、ドラゴスは棒切れの先端を向け、炎の矢を放つた。

ドラゴスの魔力は特殊であるが、かなり汎用性がある。纏つた魔力を自由に変化させられるので、イメージしやすいことなら大体出来るのだ。したがつて炎による攻撃は竜人族の家であるせいもあって得意だった。

トルガが次々と繰り出される炎の矢をくぐり抜けて前に出ようとした瞬間、ドラゴスは棒切れをその喉元に突きつけた。鋼のように硬い魔力がトルガの肌に触れていた。

炎の矢で動きを誘導したのだ。それに、身体的なスピードはトルガが上でも、魔力を使つた瞬発力ではドラゴスが遙かに上回つていた。これも説明しても理解してもらえないが、筋力の強化に加え、一方で纏つた魔力を瞬間に膨張させ、その反対側で収縮させると瞬時に移動出来るのだ。さらに剣と相手を予め紐状の魔力で結んでおいて一気に収縮せると、その瞬間移動と同時に正確な攻撃が出来る。トルガは魔力のそんな器用な使い方なんて信じられないと言うが、ドラゴスからするとイメージ出来れば出来ることなのだ。

しかしドラゴスの魔力がいくら汎用性があるとはいって、イメージしにくいことは出来ない。目に見えるような作用でないと、たとえ低レベルなものでも出来ない。魔力を変化させるには、炎なら炎をイメージすればいいし、氷なら氷をイメージすればいい。しかし、他人を治癒する魔力なんていうのはイメージが出来ない。だから、

自分の傷を治すのは患部に魔力を込めて治癒力を強化すれば出来るが、他人の傷を治すのはトルガに何度も教えてもらつても出来るようにならなかつた。普通、魔力の扱いに長けた者であれば少しくらいは出来るはずなのに、妙なことにドラゴスは全く出来ないのだ。

「くそ、また負けた！　どうやつたら勝てるんだよ……あれ、血が出てる」

トルガの首筋からわずかだが血が垂れていた。

「おい、まさか刃を付けてたのかよ」

「しようがないだろ、尖つてない剣なんて想像しにくいんだからさ」  
トルガは自分も刃の付いた剣を、しかも強化して使つていたことを考えてか、それ以上は文句を言わなかつた。しかしその間にもトルガの首からは赤々とした血が流れ出た。

「よし待つてろ、今治してやるから」

そう言つてトルガの切り傷に手をかざしてみるものの、何も起こらなかつた。むしろ集中するほど密度の高まつた魔力が傷口をぐりぐりと押してしまう。

「痛い痛い！　自分でやるよ！」

「おつかしいなあ。どうすりやいいんだよ」

「こり、ぐうつと力入れる感じだよ」

「力入れたら魔力使えないだろ」

「いや力入れなきや魔力使えないだろ」

やはりドラゴスの魔力は他の者と根本から違う。もはや魔力ではないのではないかとさえドラゴスは思つのだった。

「なあいいだろ？　一回だけ、一回だけでもさー」「そんなの出来る訳ないだろ！」

ドラゴスに対して鳥人族のロッカがしきりに懇願していた。

「おい頼むよ。お前の姉ちゃんの尻尾、一回だけでいいから触らせ

てくれよ」

ドラゴスは悪ガキたちのリーダー的存在であり有名だったが、姉も炎の美竜女ベラとして有名だった。

今年二十歳のベラはよく焼けた小麦色の肌に、燃えるような赤い髪、そしてちょこんと生えた羽が何とも魅力的だつた。短い尻尾は服に隠れていることが多いが、ベラは背中の小さな羽が服に覆われるのが気持ち悪いらしく、いつも背中を露出する服装を着ていた。スタイルもいい上に、そういうた「種あり」が持つ魅惑のポイントを惜しげもなく露わにしていたので非常にセクシーだと評判だ。そうなると当然十代の少年たちにとっては憧れの的である。

「ベラさんの尻尾、柔らかいんだろうなあ。そこで尻尾の裏は白、それも真っ白に決まってる！ なあお前見たことあるんだろ？ そこんどこどうなんだよ」

「そんなの知らねえよ！」

そういうつたロツカの興味も思春期の男子としては当然のことであった。

「スカートの下からチラッと覗いたことがあるんだけどさあ、あの尻尾は太くて短いタイプだろ？ 工口い、工口すぎる！」

「お前何見てんだよ！ ……確かに太くて短いけどさ」

ロツカと違い、ドラゴスは今までそんなことを考えたこともなかつた。しかし、思い出してみればベラの尻尾は工口いような気もした。

「いいなあ、やっぱり家の中では隠さないんだろうなあ。見放題だよな。それにしてもあのタイプはたまらん！ お前もそう思うだろ？」

「姉貴のなんか見ても何とも思わねえよ」

「お、お前まさか細長派か！ 細くて長い悪魔系が好きなのか？ 竜人族のクセに！」

「ば、馬鹿、そんなことねえよ！」

ついむきになってしまった。言われてみて初めて気が付いたが、

確かにドラゴスが「かわいい女の子」というのを想像すると、大抵小柄で悪魔系の尻尾を持つ子だった。

「図星だな！ 一族の裏切り者め！ ベラさんは俺がもういっせー！」

「鳥人族のお前は関係ないだろ！」

「うるせえ！ お前なんかブスな小悪魔に引っかかるつまえ！」

ロッカは捨てゼリフとともに帰つていった。日も傾き始めたため、他の者も帰りつつあつた。

そこは村の中心部と、村の外れにあるドラゴスの家との中間地点にあるので、クエスト団の連中は竜人闘技場と呼んでいた。

クエスト団と名乗つているものの、小さな村では特にクエスト依頼なんかはなく、いつも竜人闘技場で格闘に明け暮れている。そもそも村の外れにたむろしているので、困つている人を助けるような機会すらない。しかも、クエスト団は悪ガキの集まりで、村の中心部に行つても人を困らせる類の連中である。

だが、クエストを請け負う賞金稼ぎとして冒険の旅に出るというのは魔界の少年たちが一度は見る夢であつた。ドラゴスだってそうだ。いつかは冒険を始めてみたいと思っている。

しかし、家のことが優先である。それは親孝行であるとか、一族のことを思つてゐるということではない。何よりも恩義だった。

「馬鹿野郎っ！」

帰宅早々、ドラゴスはげん骨を食らつた。道具屋の店主である父、ダグルはその巨体を揺らして何やら怒つてゐる。

「あの金属製の筒を勝手に持ち出すんじやねえ！ おり、早く出せ！」

ドラゴスは一瞬何のことかわからなかつたが、そつといえれば脇過ぎまでそれを持ち歩いていたのを思い出した。が、その後は……

「いや、実は、果物屋に……」

「果物屋に、何だ」

「あげちゃつ……た」

「馬鹿野郎っ！」

本日一度目のげん骨だ。

「あれは 断絶の谷 で拾つた大切なもんなんだよー。」

「でも何なんかわからないんじゃ」

「いや体積の割にやたらと重いしきつとただの金属じゃねえ。まあ、何なんかわからないが」

「だつたら別にいらなんじや」

「馬鹿野郎っ！」

三度目。

「谷で拾つたもんは何だつて俺の宝だ！ 今すぐ返してもうひとついい！」

ドラゴスは蹴飛ばされて家を出た。

とはいえたぶらで訪ねるのはまずい。こんな時に限つて適当に言った捨てゼリフなんかを覚えているのだ。

『等価交換だ』

そんなことを言つておいてタダで返してもうのは格好悪すぎる。どうせ果物屋も迷惑そうだつたしすぐに返してくれるだろ？ が、ドラゴスには妙なプライドがあつた。

ここは実用的なものあげるのがいいだろ？ 田が暮れる前に行けばそれでスマーズに、そしてスマートに解決するはずだと思った。ドラゴスは母屋の裏にある蔵へ行き、薄暗い中でちょうどいい物がないか物色し始めた。腐つても道具屋の蔵だ。何かあるだろ？ とドラゴスは考えた。

「あんたまた殴られたの」

姉のベラが蔵の戸口に寄りかかつて立つていた。

「三回もね」

おそらく先ほどの話も聞いていたのだろう。というか元からでも馬鹿でかいダグルの声で怒鳴られたのだから聞こえないほうがおか

しい。

今まで意識したことはないが、そういうえばロッカの妄想の通り、ベラは家にいるときは尻尾を隠していなかつた。部屋着用のショートパンツを履いていて、ローライズだからなのか知らないが、腰の下のほうから太くて短い尻尾が出ている。

「行かなくていいの？」

「えつ、ああ、手ぶらじや格好悪いし、何か交換するものを探してるんだよ」

「ふうん。それより今日は鶏の豚肉炒めに牛ステーキだから、早く帰つてきなさいよ」

ドラゴスも肉は大好きだが我が家の中にはいつも不満がある。「たまにはサッパリしたもん食わせてくれよ」「だーめ。竜人族が肉食わないでどうする！」

「いや俺竜人族と関係ないし……」

突然、沈黙に支配された。薄闇が急に重くなつた気がした。しまつた……

ドラゴスは言つべきでないことをつい口走つてしまつたのだ。ベラは睨むような目をしていたが、悲しそうでもあつた。そして勢いよくドラゴスに歩み寄ると、肩を掴んで壁に押し付けた。

「本気なの？ 本氣で言つてるの？」

ベラの瞳がドラゴスの深いところに突き刺さる。ドラゴスは何も言わずに目を逸らした。

「そりや確かに血は繋がつてないよ。でも私は同じ竜人の家族だと思つてゐる。あんたは私の本当の、たつた一人の、大好きな弟なんだよ？」

そこまで言われてから目を合わせると、涙が滲みそうになつた。しかしここで泣いてしまうのは格好悪く、何より恥ずかしい。プライドもある。何とか堪えるが、代わりに顔をゆがめてしまう。すると急にベラは軽薄な笑みを浮かべた。

「それでもあなたが他人だつて言つなら、こんなことしたつていいわよね」

ベラはそう言つて体を押し付けてきた。発達のいい柔らかな乳房の重みを感じた。互いに多くの部分が触れ合つ。

そして片耳をくすぐる吐息ばかりの声が届く。

「尻尾、触つてもいいんだよ？」さつきから見てたの知つてるんだから。ほり……」

ベラは勝手にドライゴスの手を取つて、尻尾に置いた。

「柔らかいでしょ？ 熱いでしょ？ でもね、裏側はもっと柔らかくともっと熱いんだよ」

指先には強い弾力のある柔らかさとともに、ベラの熱がじわっと伝わってきた。

「ほりどんどん熱くなつて來た……裏側、触つていいのよ？ あんたも興奮してきたでしょ？」

吐息が首筋をなでる。鼓動が高鳴り、ベラの強い鼓動も柔らかな胸の向こうに感じた。

危うい流れだったが、ドライゴスはそりでよつやく姉の思いを受け取つた。

「ば、ばか！ 自分の姉に興奮するかよ！」

姉の肩を掴んで突き放した。

「あそ。じゃあ早く帰つときなさいよ」

そう言つと姉は素つ気なく戻を出て行つた。

今更言つても聞こえやしないが、ドライゴスは言わざるを得なかつた。

「…………ありがとう」

それにしても……

くそつ！ 今「姉にしどくにはもつたといないくらい魅力的だつたな」とか思つちゃつた俺の馬鹿野郎つ！ 一体何考えてんだ馬鹿野郎つ！ せつかくいい場面だつたのに馬鹿野郎つ！

ドライゴスは気を紛らわすためにも猛烈な勢いで物色を再開した。

しばらく物色したのちにドラゴスが選んだのは短剣だった。ただの道具屋だが武器も扱っていたのでこういうものはたくさんあった。その短剣は細身で黒い鞘、金具は金メッキだった。ドラゴスはなかなか悪くないデザインだと思った。

だが何よりも同じものが何本もあつたのが決め手だ。それならば一本くらい持つていっても問題ないだろうとドラゴスは考えたのだ。果物屋だし、短剣なら果物ナイフとしてでも使えるだろう。それにしては大きすぎる気もするが、メロンだとか大きい果物専用にすればいいじゃないか。そう思った。

蔵から出ると、外は朱に染まり始めていた。ドラゴスは早足で歩いた。このままだと日が暮れてしまいそうだつた。

ドラゴスの家は西の外れで、村の中心部からは少し遠い。  
この村 자체も魔界の大地では最西端の村だ。だから「はしむら端村」などと呼ばれているが、ちゃんとした名前はない。それほど辺鄙な村であつた。

村のさらに西には ラグレー山脈 が南北に大地を走る。非常に高い山が連なるうえに魔物も多く、よほど強い者でない限り越えてゆくことは出来ない。

また、ラグレー山脈 の尾根は大抵竜の縄張りであり、それも越えられない理由の一つだ。竜というのは魔族一般の人々からすると恐ろしく強い。

魔界において野生の竜を見たことのある者は少ない。大都市に住んでいれば見世物としても存在しているし、竜を連れた騎士を見ることもある。しかし、そうでない魔界の一般人は竜という生き物すら見たことがないのだ。

「竜の目」などと言われるドラゴスであるが、実は彼も竜を見た

ことがない。それどころか竜人族ですらなかつた。

ドラゴスが「発見」されたのは、ラグレー山脈のまたさらにも西にある、断絶の谷であつた。見つけたのは竜人族の道具屋、ダグルだ。

ダグルは屈強な竜人族であり、血も濃い。つまり、限りなく竜に近く、非常に強いのだ。したがつて小さめの竜ならば簡単に倒すことが出来る。そんな商人は他におらず、彼はラグレー山脈を越えてゆける唯一の商人であつた。だから山脈の向こう側で手に入れた物を高値で売ることが出来た。

さらに、山脈を越える冒険者も滅多にいないというものあつた。山脈を境にして向こう側は乾燥地帯となつていた。そしてそのまま西に行くにしたがつて何もない荒野となり、そこで行き止まりだ。大地を分かつ断絶の谷があるのだ。

谷のこちら側から谷底に下りるのは簡単であるが、向こう側には渡れない。見上げても上が見えないほどの崖がそそり立つている。しかも、谷には生物が皆無であるために草の一本すらない。何かを探してもたまに落ちている人工物くらいしか見つからない。

つまり、山脈の向こうは何もないうえに行き止まりなのだ。だから冒険者も尾根の手前側にはよく行くが、向こう側には無理を今まで行こうとしないのだ。まだ未知の土地であるなら行く価値もあるかもしぬないが、何もない断絶の谷があるということはある程度知れている。用があるとしたら、人工物を拾いに行く物好きであり屈強な道具屋くらいのものなのだ。

ただ、魔界一般にはほとんど知られていないことだが、ダグルは何度も断絶の崖に行くことで、ある事実を知つていた。

谷の向こうに別の世界がある。

ダグルが谷で拾うものは、魔界の文化圏とは明らかに異なるものであったのだ。だから「珍品」としてよく売れたが、それが何なんか理解出来ない一品も少なくなかつた。

この世界が「魔界」という風に何かと区別されて呼ばれているこ

とからもわかるように、古代には他の世界もあつたという。民間伝承に過ぎないが、人間族は古の時代に他の世界から来たという俗説めいた話だつてある。ダグルはその「他の世界」が 断絶の谷 の向こうにあるのだと確信していた。

そう確信するのにはいくつか理由がある。一つは谷の向こうから落ちてきたと見られる人工物が見つかることだが、ダグルはまさに落ちてくる瞬間を見たことがあるのだ。しかも一度きりではないし、同じ場所でも次の機会に行つたときにはまた違う何かが落ちていることもよくある。つまり現在もなお、谷の向こうには文明が存在してたまに誰かが何かを落としていくのだ。

そしてもう一つは、断絶の谷 には何らかの結界が張られているといふことだ。それも生物を殺し、谷の両側の行き来を阻むような強力なものだ。魔力の弱い者ならすぐに死んでしまうだろう。ダグルほどの強さがあつても谷底は数日間の探索が限度だ。体調を崩すこともしばしばあり、ダグルでも谷底で一週間生き延びる自信はない。

そういう結界を張る何かが、谷のこちら側にあるように見えるかつた。こちら側はただ荒野が広がるだけの土地なのだ。向こう側がどうなっているのかわからないが、向こう側の誰かがやつていることのように思えた。

だがダグルが他の世界を確信した最たるもののは他にある。それは、ドラゴスの発見である。

明け方の出来事だつた。

こちら側からは谷底に下りられるといつても丸一日はかかるため、一旦下りてしまえばダグルは谷底で寝泊りしていた。昨晩は疲れてすぐに寝てしまつたため、その日はやたらと早く起きてしまい、夜明け前から探索を始めていた。

岩と砂の乾燥地帯なので、日が出ないうちはかなり冷えた。もつ

とも、深い谷底なので田中もそれほど暖かくはならないが、夜間との寒暖差はかなりあった。

夜が明けていないので光もまったく差さない。ダグルは魔力の炎であたりを照らしつつ、暖を取った。

めぼしい物を見つけられないまま岩場を歩いていると、不意に一筋の光が射し込んできた。夜が明けたのだった。

光の筋が一つ二つと次第に増してくると、ダグルは炎を消した。しばらく歩いたので体も温まっていた。

そして平たく大きな一枚岩を一條の光が照らした時、異様な光景を田の当たりにした。

竜だ、竜がいる！

竜が左右に大きな翼を広げて仰向けになっている。ダグルは咄嗟にそう思った。

しかしそく見てみると、そうではない。子供だった。それも一歳くらいの赤ん坊だ。翼に見えたのは大量の血しぶきだった。

慌てて駆け寄ると、意識はないがまだ生きているようだった。起こしてみると背中の肉が裂けていた。ダグルの魔力では簡易的な治療しか出来ないが、ひたすらそれを繰り返して何とか傷口を塞ぎ、応急処置を施した。

その後不要な荷物を捨てて急ぎ、半日で谷から脱出し、介抱した。迅速な行動の甲斐があつてか赤ん坊は翌日には目を開けた。ダグルはその目を見た時、再び「竜だ」と思ったのだった。そしてその場で名前を付けた。

ドラゴスはどう見ても谷の向こう側の高い崖から落ちてきたようだった。それにもかかわらず助かったのは、あの特殊な魔力のおかげだろう。背中の怪我は魔力で衝撃を吸収しきれずに地面と激突して出来たのか、それとも体から一度に大量の魔力を放出したせいで内側から肉が破れて出来たものなのか。真相はわからない。だがど

ちらにしろ、落ちてゆく過程であれほどの魔力に目覚めなかつたら死んでいただうし、落とされたことでの魔力を得たのだろう。ドラゴスの魔力は現在でも異常なほど防御に特化しており、その時の出来事が無関係だとは思えないのだ。

落ちてきたドラゴスはまだ物心も付いていない赤ん坊であり、また服も着ていなかつたので、どのような経緯だつたのかは一切わからぬ。ただ、ドラゴスの存在自体は、崖の向こうに人の住む世界があるということの十分すぎる証拠であつたのだ。

ダグルはそれら全ての情報をドラゴスに伝えてあつた。そのうえで本人が自分の道を決めればいいと思った。息子として育ててきたが、家に縛られる必要はないとダグルは考えたのだ。

しかし 断絶の谷 行くことだけは禁じた。結界は得体が知れず、危険すぎるからだ。

それにダグル自身も谷へ行く度に命を削られている感覚があつたのだ。それを話すと「じゃあなんで行くんだよ」なんてドラゴスは言つていたが、その時は「一度宝を見つけちまつたらやめられない」と冗談めかして返した。結局ダグルは毎年行き続けていた。

それは本人の言葉通りに「期待」からだつたのかもしれないし、拾得物を高値で売つて家族を養うという「義務感」からだつたのかもしれない。

しかしひょつとすると、道具屋の主人でしかない彼も、異世界への「夢」を抱いていたのかもしれない。

リイラがこの村へやつて来たのは一週間ほど前のことだった。

生活していくためのあてもなかつたが、奥さんに先立たれたらばかりでちょうど人手も不足していた宿屋のマルクが面倒を見てくれることになった。

リイラ自身も「何でもする」と言つていたし、マルクも悪魔族なのにやたらお人よしなのですんなりと話は進んだ。

それでもやはり突然この村に現れたリイラのことはすぐに噂となって広まつた。そういうた外見的特徴はないにも関わらず、リイラのことを化け物や異形の獣であるかのように思つてしまつもの多かつた。

小さな村であるぶん、そういう未知の存在を恐れる感情も大きいのだ。特にリイラの事情、というより、たとえ見た目が同じでもリイラが得体の知れない存在であるという「事実」は人々を怖れされるのに十分であつた。

だが直接してしまえば、そのうちにただの少女でしかないとわかる。しかもとても素直でいい子だ。だから事情がどうであれ、何度も接すればきっと受け入れてもらえるはずだ。

そうマルクは考え、なるべくいろいろなお使いを頼み、より多く村人と接する機会を作つていた。

その中に、緊急の用ではないが道具屋でお鍋のふたを買つてくるというのがあつた。道具屋に顔を見せるために何でもいいから買うものを指定しなければ、というマルクの意図が見え透いていて、リイラは感謝の気持ちで一杯になるのだった。

リイラはその道具屋へ向かい、村の外れの一本道を歩いていた。

影は長く伸び、空も雲の地面も橙色に染まつてた。日が暮れる頃には帰るようになっていたので、急がねばならない。

「」一帯は乾燥した荒野で、長細い小さな岩山がぽつりぽつりと立っている風景が印象的だった。リイラはその岩山と岩山の狭間に夕日が落ち、影が少しづつ伸びていくのを横目に見ながら歩いていた。

するとすぐ近くの岩陰に一人の少年がいた。一人ともリイラよりもいくつか年上の十七、八歳に見えた。あまり素行の良い感じには見えず、リイラは絡まれたら嫌だな、と思つた。

「お、お前、リイラだろ？」

やはり村で噂になつてゐるリイラなので話しかけられてしまった。声を掛けたのは一人のうち背が高く骨ばつた体格の少年で、彼の高圧的な態度がリイラには恐かつた。

「……はい」

リイラは平静を装つて答えたつもりだったが、声音からは恐怖の色が滲む。

「うわ、本物だ！」

少年たちは新しいおもちゃを見つけたかのようだった。一人して顔を見合わせ、きっとどんな風に遊ぼうか考えているのだろう、顔がにやつていている。

「異世界から来たってほんとか？」

二人のうち背の低いほうが聞いた。低い、といつてもリイラと同じくらいの身長である。年の割には小柄かもしけないが、その筋肉質で男性的な体つきはリイラとの力関係では遙かに優位に立つ。

「……ええ、はい」

リイラは恐る恐る答えた。リイラが突然異世界から飛ばされて来たという噂が本当だと知ると、人々はその反応でいつだつて彼女を悲しませる。

「マジかよ！」

「化け物じやねえか！」

少年たちの目は好奇心に輝いているが、それは「人」ではなく「物」に対する時の目だ。

その乾いた視線にリイラはぞつとする。冷たいなどという温度すら存在しないのだ。この一週間でやっと手に入れ始めた「人」としての存在が、脆くも崩れ去る。

人として生きていいい。

異世界でその許しを得るまで、どれだけの悲しみが彼女を襲ったことか。生きた人間だと思われること、それだけでいいのに、難しかった。

異世界人。誰かがそう呼んだ瞬間から、人々にとつて彼女は化け物、もしくは動くおもちゃでしかなかったのだ。

もし宿屋のマルクがいなかつたら。リイラはそう思うだけで心が曇る。

「すげえ、人にそっくりだよ」

「よく出来てんなあこれ」

「……」

少年たちはリイラを棒で突付いてみたりして観察した。最初から素手で触ろうとはしないのだ。そして自分たちが見ているのと同じように、リイラも自分たちを見ているという考えは全くない。リイラにだつて「心」がある。そんな当たり前のことでも、そう簡単にはわかつてもられない。

次第に慣れてきた少年たちは、今度は指先でリイラの肩を突付いてみたり、軽く突き飛ばしてみたりする。

「やめてください……」

そう言つても少年たちは、ちゃんと反応するんだな、くらいの情報でしかない。むしろそれは少年たちの嗜虐的な欲望を刺激するのだった。

「痛いです……ごめんなさい……」

叩く。つねる。リイラが反応すること自体が面白いのだ。そうして「人と同じかもしない」ということを感じ始めると、ある一定

の山を越え、好奇心が底なしに膨れ上がる。といつても、少年たちにとつては「人と同じかもしない『何か』」でしかない。

背の高いほうがリイラの腕を掴み、岩の陰へ強引に引っ張ついた。だが少年にとっては人を掴むのではなく、物を掴むのと同じようにしただけであり、殊更荒く扱つたつもりもない。

「脱げよ。服の中も人と同じなんだろ？」

少年はリイラのブラウスを引っ張り上げる。裾がだらしなく垂れた。

「……ごめんなさい」

リイラは顔を伏せながら必死に謝ることしか出来ない。

「脱げつつってんだよ、ほら！」

今度は頬を叩かれた。身体的な痛みなどどうでもいい。衝撃が壊すのは心だ。

「こりゃ俺が脱がした方が早いぜ」

もう一方の少年が胸を驚掴みにしてリイラを前に押し付けた。後頭部を岩に打ち付けられ、胸が圧迫されて息がつましく出来ない。

「うはっ、やわらけえ！」

乳房をもみしだいした少年はブラウスを無理やりに引っ張つた。ボタンがいくつか弾け飛び、隙間から下着が覗く。

「待て、俺もそれやりてえ！」

必死に抵抗してみても、すぐに押さえつけられてしまった。リイラには抗う力などないのだ。気付けば涙が出ていたが、それも少年たちを楽しませる一つの装置でしかなかつた。

もう何もかも諦めてしまおうかと思った。きっと心を捨てればつらがない。「物」にならうか。

それでもまだ「人」でありたいと思った。だから最後に、願いを叫んだ。

「……助けて！」

荒野に虚しく響くだけかもしれない。それでも叫んだ。

「誰か助けてください！」

岩場に願いが反響する。

「そのクエスト、乗つた！」

リイラは声のした方を見上げた。田の前の細い岩山の上に、夕焼けを背にした人影があった。

「我こそは 竜の目のドラゴス！」

リイラに絡んでいた二人の少年も啞然として見上げていた。  
もしかして昼間の……

「竜の目……」

「まさか……」

ドラゴスが飛び降り、ふわりと着地すると、一人の顔はみるみるうちに青ざめた。

「や、やばい、本物だ！」

そしてドラゴスが腰に下げた短剣を見たのだろう。

「殺される……」

二人とも顔を見合させて状況を確認しているようだった。

「おい一人とも……」

ドラゴスは案外暢気な口調だったが、少年たちは怯えきっていた。  
「うわあ、『めんなさいっ！』

「人殺し！」

ドラゴスの言葉も待たず、背を向けて逃げ出だしていった。

「いや、ちがつ……あつ、これが」

ドラゴスは自分の短剣に気付いて笑った。リイラはこの滑稽な一連の出来事がまるで他人事であるかのように、クスリと笑った。しかし、振り向いたドラゴスと目が合うと、彼が自分を助けるために行動してくれたことに気付き、慌てて駆け寄った。

「あの、ありがとうございます！」

リイラは深々と頭を下げる。

「お陰で助かりました。本当にありがとうございます！」

何度頭を下げても足りないと思つた。

「『助けて』って言つたろ？ クエストの依頼があつたんならクエ

スト団としては当然の行いだ」

リイラとは対照的にドラゴスは落ち着いた口調だった。

「クエスト?」

「ああそうだ。誰かの願いを叶える、それがクエストだ!」

ドラゴスは胸を張つて言い、笑つて見せた。しかし「クエスト」と聞いて不安になつた。

「でも私に払える報酬なんて……」

「いいのいいの、俺だつて岩に登つて遅れ……いや偶然あの岩に登つてただけだしさ」

「でも……」

「それよりどうして棒で突付かれたりしてたんだ? 普通の絡まれ方じゃないよなあ」

ひやりと心に冷たいものが差し込んだ。この人もさつきの少年たちと同じように振舞うようになるのかと不安になつた。

リイラは言うべきか迷つた。

「あ、まさかお前、異世界人のリイラとか  
やはりこの人も……」

しかしリイラは隠せるように思えなかつた。

「……はい」

また始まるのだろう。リイラは悲しくなつた。

珍しいことではないのだ。よくあることなのだ。この人が他の人間と同じだろうと悲しむことではない。リイラは自分に言い聞かせた。

しかし、ドラゴスの見せた反応はリイラにとって初めての経験だつた。

「うおっ、本当か!」

驚いたドラゴスはまず、両手でリイラの手を握つた。

「あつたかい!」

そしてリイラの額に自分の額を付けた。

「同じだ! ジャあそんな薄着じゃ寒いだろ、大丈夫? 昼は暑く

ても夕方から急に冷えて来るんだよ、ここいらは。もしかして異世界つて夜もあつたかいのか？ どんなところなんだ？ どうやって来たの？ どうすれば行ける？

ドラゴスが感じているのと同じように、握った手から、寄せた額から、リイラもドラゴスの暖かさを感じた。しかしそこにはそれ以上の意味があつた。ドラゴスが自らと同じ存在として接してくれることが何より暖かく、嬉しかつた。

ドラゴスの温もりが触れた肌から染み込んでいくようだ、それが体の奥へと達すると、胸の中で何かがはじけた。

抑えようとしても、抑えようとしても、涙がためどなく溢れた。「え、あれ？ 僕まさにこと言つた？」「めん！ よくわかんないけど」「めん！」

リイラは首を振るが、言葉にならない。

訳もわからず謝りながら、ドラゴスはもう一度手をぎゅっと握つた。しかしリイラはそうされると余計に涙が出てしまうのだった。もう我慢しなくていいのかもしれない。そう思つたりもつ、声をあげて泣いていた。

……つらかつた。今まで本当につらかつた……

その場にへたり込み、赤ん坊のように大泣きを始めてしまつた。困惑してとりあえず頭をなでるドラゴスに対し、甘えるのを抑えられなかつた。

そうしてみるとリイラは、ドラゴスと自分との境界がなくなつていくような不思議な感覚になつていつた。

ようやく泣き止んで話せるようになった頃には赤々としていた夕日が地平線に隠れ、薄暗くなり始めていた。時折肌をなでる風にリイラは鳥肌を立てた。

「ほら、寒いだろ？ これでも羽織れよ

ドラゴス、だつてシャツ一枚なのに、ボタンを外し始めた。

「だ、大丈夫です！」

リイラは慌てて断つた。

「ほんとに？」

「わ、私熱がりですからっ！」

ドラゴスは何度も心配してくれたが、リイラはその都度、平氣だと言つた。

ブラウスのボタンを上まで留めていても胸のところの一箇がなくなつていて、風が吹くとやはり少し寒気がした。ドラゴスもそれを見て心配してくれているのだろう。

しかし、平氣だと言つたのは嘘ではなかつた。リイラはなぜか次第に体が熱くなり始めていた。

「どうしてこんなとこ一人で歩いてたんだ？　俺が言つのもなんだが、ここらは悪ガキたちも多いし」

ドラゴスがリイラの田を見て話す間じゅう、リイラの体温が上がり続ける。

「あ、あの、ど、道具屋さんに行こうとしてたんですね」「おまけにちゃんと喋れていない。リイラは体調が悪いのかもしけないとthought。

「道具屋？　うちだよそれ！　なんだ早く言つてくれよ。じゃ行こうぜ俺んち」

ドラゴスはリイラの背中を押し、すぐに道具屋に向かおうとした。背中が熱くなつた。

「い、いえ、今日はいいんです！　田も暮れちゃつたしつ」

「そつか。じゃあ泊まつてく？」

「と、とま、泊まらなくていいですっ。か、帰るですし、なんか体調悪いです！」

「ああ確かに様子おかしいもんな。どれどれ」

ドラゴスはまた額同士をくつつけた。

「うわ、すごく熱いじゃん。大丈夫？」

鼻先が触れそうな距離で、ドラゴスはリイラの目を覗き込んだ。リイラは何も答えられず、体から火が出てしまうかのように感じた。

この人の持つ異世界のウイルスがなんかにやられてこるのだろうか。リイラは思った。

特に目が猛毒なのかもしない。異世界ならあり得る。この人の目で見られるどりにも参ってしまうのに、こんな近くで目が合つたらきっともう死んでしまう……

頭がぼつぼつとし始め、何度も問い合わせるドラゴスに返事を返せなかつた。

「おい、どうした！ 宿屋マルクさんのことだら？ すぐ」に送る。「

ドラゴスはふらふらのリイラを抱きかかえた。

リイラはさらに参ってしまい、やっとのことで一言発した。

「……もうダメ」

リイラはドラゴスの腕の中で目をつぶっていた。ドラゴスの目の猛毒にやられないようにするためでもあつたが、それ以外にも理由があつた。

単純に目を開けると恐いのだ。ドラゴスの移動速度が異常なほど速く、そして一歩ごとに高く空を飛んでいる。普通に歩くときの百歩分を優に超えるほどの距離を飛んでいるというのに、着地はふわりとしていて衝撃は全くない。リイラはまだ魔力についてよく知らないが、おそらく魔力を使っているのだと思った。

しっかりと首に手を回して掴まっているし、ドラゴスにもちゃんと抱えてもらっているので落ちることはないだろうが、それでも恐かった。

そうして目を閉じたのだが、リイラの熱は不思議と収まつていった。そして五分も経たないうちに元気になっていた。

やつぱりあの目が毒なのかな。目を合わせなければ異世界ウイルスも効かないのかも……

しかし今更元気だとは言ひづらい状況だったので、リイラは黙つてじつとしていた。

今度はむしろ、心地良くなつてきていた。リイラにはドラゴスと触れる部分から温もりが伝わり、それがたまらなく気持ちいい。この人は解毒作用もあるのかなあ、なんだか癒されてる。ああ、気持ちいい。ずっとこうしてみたい……

リイラはまだ当分着かないで欲しいと願つた。もしその願いを口に出せば、ドラゴスは叶えてくれるかもしれない。そんな期待が頭をよぎつた。

「着いたぜ」

「はやつ！」

つい驚いて目を開けてしまった。行きは歩いて三十分以上かかつたというのに帰りは正味五分で着いてしまったのだ。

宿屋は大通りから一本入った人通りの少ないところにあり、建物も三階建てだが横幅が狭く、こぢんまりとしている。

やはり果物屋の時のように街中は屋根の上を渡つてここまで来たのだろうか。リイラは周囲を見回しながら思った。

「少しは元気になつたみたいだな」

抱えられたリイラは首に手を回していくので、声に振り向いたら至近距離でドラゴスの目を見てしまった。

「は、はいつ」

せつかく良くなつていたのに、これで再び熱がぶり返した。しかもドラゴスと触れている部分が多く、そこからも急激に熱を発し始める。くすぶつっていたものが一気に発火する。

恐ろしや異世界ウイルス！ リイラは急いで目を閉じた。

「あれ？ なんか熱くなつてきた」

抱いたまま密着部分が多いのでドラゴスもすぐに気が付いたようだった。

リイラの再びの病変に表情を険しくしたドラゴスは、また額を寄せた。鼻先が微かに触れ合つた。

「やっぱ熱あるな……それに脈がおかしい！」

ドラゴスは緊迫した様子でそう言つと、ぐつと抱き寄せてリイラの胸に耳を押し付けた。リイラは圧迫された乳房が燃えるような猛毒に冒されていると感じた。

「相当速い！」

爆発しそうな動悸がしていて、リイラは意識が飛びそうになつた。死の不安が怒濤のように押し寄せる。

「はあ……はあ……」

息も絶え絶えになつていた。

「だめ……だめ……」

自分でも何を口走つているのかわからなかつた。

「…………しんじやう…………」

「大丈夫だ！ 助かるつて！」

ドラゴスは勢いよく宿屋の扉を開け、大声でマルクを呼んだ。その切迫した声の様子を聞いてか、おつとりした性格のマルクも大慌てでやってきた。

「マルクさん！ リイラが！」

ドラゴスが簡単に説明すると、マルクはずんぐりとした体をせわしなく動かして奥の一室に通した。そこはベッドと机の他に小さな箪笥があるだけのリイラの部屋だった。

ドラゴスがベッドに降ろして寝かせると、リイラは段々と落ち着いていった。

「いやあ、ありがとう。ドラゴス君

「ま、クエスト団だからな！」

ドラゴスはそう言って誇らしげに笑つてみせた。

そしてドラゴスは別の部屋に案内され、マルクはリイラの看病を続けた。

ドラゴスが泊まつていいくと言つたので、案内されたのは一階の二室だった。こちらもベッドと机があるだけの小さな部屋だった。

「すぐに用意できる夕食はトマトスープとパンしかないけど、それじゃ竜人族を満足させられないかな？」

「平気平気。俺さつぱりしたものが食べたかったんだ」

姉が夕食を作つて待つてているはずだったが、ドラゴスはリイラが心配なので仕方なかつた。それに随分と魔力を消耗していくあの移動方法はもう出来そうになく、帰るとしても歩いて帰らねばならなかつた。

「じゃあもう少ししたら運んでくるよ」

マルクが部屋を出ると、ドラゴスはベッドに仰向けになつた。

それまで夢中だつたので感じなかつたが、ドラゴスの疲労が限界に近かつた。全力で魔力を使いながらこれほどの距離を移動したのは初めてだつたのだ。

体の周りに大量の魔力を纏い、踏み込んだ足を蹴りだす瞬間、下方で圧縮した魔力を急激に膨張させて高く飛ぶ。そして着地の時は衝撃を吸收させながら魔力を圧縮する。この一つを一步ごとに繰り返すことにより速く、飛ぶように走れるのだ。

今まででは短距離でしか使っていなかつたのでわからなかつたのだが、問題もあつた。

スピードの調節が難しく、加速し続けてしまうのだ。一歩ごとに歩幅は大きくなり、消費する魔力も多くなる。そのうちろくに制御出来なくなるわ大量に魔力を消費するわで、止まる時に必要な相当量の魔力も残つていて危うかつた。最後は無我夢中で宿屋前に止まつたが、ドラゴスの魔力はもう完全に絞り出されたという感じだつた。

鍛えなきやな。ドラゴスは痛感した。将来のためにはこれじや駄目なのだ。

大の字になつたまま、ドラゴスはまどろんでいた。

それからどれほどの時間が経つたかはわからないが、しばらくするとマルクが夕食を持ってきた。言っていた通りパンとスープの質素な食事だったが、疲労したドラゴスの食欲を刺激するのに十分に魅力的だった。

トマトスープから立ち上る香りが鼻に入ると唾液が出て、パンの香ばしさに胃は期待の声を鳴らす。ドラゴスはマルクが部屋を去る前にぺろりと平らげてしまった。

「ありやりや。やっぱり足りないかい？」

「まあね」

「こりゃ申し訳ないねえ。しばらく後になるかもしねないが、きつとまた何か持つてくれるよ」

そう言つて部屋を出ようとしたら、ドラゴスは引き止めた。

「リイラはどうなんだ？」

「ああもう大丈夫だよ。横になつたらすぐに寛くなつた」それを聞いて安堵した。ドラゴスも女の子があんな風に悶えているのが初めて見たので、相当に慌てていたのだ。

「一体何が原因で」

「リイラから今日あつた出来事を詳しく聞いたが、ふふ、こりゃまあ一種の心労だね。大したことじやないわ」

「心労……俺なんかしたかな」

「いや君は悪くないよ。むしろこれからも会つてやつてくれないかな」

「それくらい構わないけど……そつだ。なりに泊まるの毎回タダにしてくれよ」

「そりや駄目だよ君。まあ、シケにしどくへりなら構わないが」「ちえっ」

「でも今日はタダでいいからさ。それで許しておくれよ」「仕方ねえなあ」

マルクが食器を持つて出て行くと、ドラゴスは再び寝転んだ。量

的には物足りないとはいえる、気分としては腹に何か入ったことで充足していた。そのまま心地よい気分を味わいながら、ドロゴスはまたまどろみに落ちていいくのであった。

リイラはあれほど参っていたのが嘘のように元気になっていたが、それでも不安そうな顔でベッドに腰掛けていた。

「本当にもう大丈夫なんですか？ 魔界の毒とかじやないんですか？」

「毒？」

リイラの言葉にきょとんとしたマルクだったが、意味がわかると大笑いした。

「あつはつはつ、確かに甘酸っぱい毒とも言えるかもね。でも大丈夫、害はないさ」

「本当ですか？」

しかしリイラのほうは至つて真剣であった。異世界に飛ばされたせいでやたらと疑心暗鬼になっているのだ。先ほどまでの異常な様子も、半分は「命の危険が迫っているかもしれない」という不安がもたらした自己暗示が原因であった。

「でも、死んだりすることは絶対にないが、またさっきのようになることもあるだろうね」

「そしたらどうすればいいんですか？」

リイラはメモにでも取りそうな必死さで聞いた。

「どうもしなくていい

「え？」

「どうもしなくていいんだよ。逃げたりもしない。そのままで、そのまま向き合うんだ。そうすればだんだん良くなつてくるはずさ」「は、はい……」

少し拍子抜けしたが、従順なリイラは心に銘記しておいた。

そのまま向き合つ……か。

「それじゃ、リイラも元気になつたことだし、ドラゴス君のお腹を満たす方法を考えようか」

「はいっ」

リイラは張り切つて立ち上がると、とろけそうな笑みを浮かべて台所へ向かつていった。

「……こりやとんだ猛毒だ」

「え？ 何か言いました？」

振り返つたリイラに何でもないと言い、マルクも後を追つた。マルクは内心驚いていた。リイラがこんな笑い方をする子だとは知らなかつたのだ。人と話す時は笑顔を作るものの、どちらかと言えば暗い子で、今まで自然と笑みがこぼれることなどなかつた。よかつた……全部ドラゴス君のおかげだらうな。マルクはドラゴスに感謝しつつ、安堵した。

リイラが大皿を持つて部屋に入ると、ドラゴスは眠つていた。しかしそれでも匂いを嗅ぎ取つたのか、何やらつぶやいてから勢い良く跳ね起きた。

「テコテコ！」

「きやつ」

驚いたリイラは持つていた大皿を危うく落としそうになつた。

「危ないですよう」

リイラは冗談めかして咎めるような顔を向けた。会つてからそれほど経つていないのに、不思議と壁を感じなかつた。

「わりいわりい。それ テコテコ だろ？」

「はい。揚げたてです」

テコテコ とは、たれに漬け込んだじやがいもを油で揚げたものである。ドラゴスのすむ魔界の西部地方でポピュラーな料理だ。

「うへん、香ばしい匂い。たれは ギャムジャン か  
ええ。ギャムジャン をベースにした甘辛味です」

ギャムジャン というのは大豆を発酵させて作る液状の調味料のことである。塩気だけではなくコクを感じさせる濃厚なうまみが特徴であり、それをベースに甘いたれや辛いたれなど、多彩なたれを作ることが出来る。

この ギャムジャン を使ったたれ料理は西部地方特有の料理であり、魔界中の酒場ではいつだってこんな冗談が飛び交う。「そいつが西部出身だつてことは田をつぶつていてもわかる。なぜならギャムジャンだれの香りがするからね」

このことからもわかるように、ギャムジャン は西部に住む者にとっては幼少から親しんだ「ソウルフード」なのである。そしてその中でも特に愛されているのがギャムジャンだれの テコテコ 、通称「ギャムテコ」である。西部では揚げたてのギャムテコを前にして手を出さずにいられるものなどいない。

ドラゴスも「多分に洩れないよ」で、早速立ち上がりリイラが持った皿からつまみ食いをしていく。

少しもじもじしてから、リイラが言った。

「……マルクさんから、ここで食べるよ」と言われたんですね

「お前こんなに食べんのか

「ち、違います。ほとんどドラゴスさんの分ですよ。だ、だか

ら……」

リイラは顔が赤くなつた。また熱が出そうだった。

……でも、向き合つた。

「だから、一緒に食べませんか？」

「何言つてんだ。俺はもう食べてゐるぞ」

そういえばドラゴスはさつきからむしゃむしゃとトロトロを食べていたのだった。

「あ、それもそうですね……ふふ」

リイラは自然と笑い、少し樂になつた気がした。

まだあの日は毒だけじゃ、きっと良くなるわ。

ドラゴスの部屋にはベッドの他に小さな机と椅子が一つあるだけだった。ドラゴスはその小さな机をベッドの近くに置き、リイラに皿を置かせた。そして椅子を引き、座らせてくれた。

「さ、食べよひせ」

「はいっ」

リイラはなぜだか幸福を感じていた。きっと毒に耐性が付いたおかげでドラゴスの癒し効果をより強く感じ取ることが出来るようになったからだ、などとリイラ自身は思っていた。彼女が「恋」なんてものを見るのはもう少し後のこじだった。

「体のほうは大丈夫なのか?」

ドラゴスがここへ来たのもリイラの体調が原因だったの、そういうのも当然だった。

「はい。あそこまでしてもらひながらこんなにすぐ元気になっちゃうなんて恥ずかしいですけど……」

リイラはそう言い、はにかんだ。しかしそこで気付いたようだった。

「あつ、『ごめんなさい』わざわざ運んでもらつたりしたのに私まだお礼言つてませんでした。『ごめんなさい』本当にありがとうございます!」

リイラはしきりに謝罪とお礼を繰り返した。

「いじつてそんなのは……」

困惑気味のドラゴスはそれよりも、体調を崩す彼女の心配をするあまり、やたらと体を触つたりしていたのが今になつて恥ずかしくなってきた。

……俺、夢中だったからよく覚えてないけど、脈拍調べるとき当たり前のように胸とか触つてたような……

「今日はドラゴスさんに助けてもらつてばかりです。ドラゴスさんは知らないでしようが最初は果物屋さんの時です」

……胸、結構あつたかも……持ち上げたとき軽かつたな……壊れ

そうな小さい肩……

「ドラゴスさん、リンク盗みましたよね？」

「えっ？」

ドラゴスは聞き返した。先ほどからリイラの言葉を全く聞いていなかつたのだ。

「あっ、ごめんなさい！ そんなつもりじゃないんですよ！ 交換……でしたよね？ ドラゴスさんが泥棒したみたいな言い方してすみませんっ！」

泣きそうになりながら謝る言葉の断片から、先ほどリイラが話していた内容を推測した。そしてドラゴスは果物屋に用があったのを思い出した。

しかし涙目のリイラを田の前にしたら、やつそんないとぱぢりでもいいように思えた。

「たくさん恩があるのに私……本当に」「めんなさい……」

リイラは声も小さくなり、しゅんとして俯いてしまった。

どうも悪いことをしてしまったような気になつたドラゴスはリイラの肩を強く掴み、顔を上げさせた。

「そんなことで謝るなつて。俺は氣にしてないんだしね」

「は、ほんとですか？」

リイラは涙を滲ませた瞳で、上田のままドラゴスをまつすぐに見つめた。かえつてドラゴスの方が狼狽してしまつた。

「う、うん、本当だつて。そ、それにリンクは……盗んだ！ ああそうだ、俺は盗んだんだ！ 適当な捨て台詞を吐きながらねー。」

「……ふふつ」

笑顔を取り戻してくれたようだつた。

「だから氣を落とすなよ。明るくじこづせつ」

「はいっ」

リイラは心から嬉しそうに笑つた。

ドラゴスはそれを見て胸に暖かいものが広がつたように感じた。でもなんだかじぎまきしてしまつ。

「あれ？ 何の話だっけ」

「えっと、果物屋さんの時の話です。不気味な異世界人っていう噂が広まってるせいで私と初めて接する時、みんな気味悪がって距離を置くんです。それで、親しく接してくれてもみんな大袈裟な演技なんです。果物屋さんの時もそうでした。みんな悪気がある訳じゃないってわかつてるので、私は笑顔を絶やさないようにしてたんですけど、だけど、今思えば少し無理してました」

リイラの表情はドラゴスからもらつた笑顔を失わないように保つていたが、話しながら次第に影が射していった。しかし、急に明るくなつて言った。

「でも、ドラゴスさんがリンクゴを……盗んだ話を聞いて私、自然に笑つたんです。大したことじやないと思つかもしませんが、私にとつては大事件なんですね」

さつきからリイラのまぶしい笑顔を何度も見ていたドラゴスには意外だつた。

「私、違う世界にいた時は中学生……って言つてもわからないですよね、えつと……とにかくどこにでもいるような十四歳の地味な女子だつたんです。それが、帰り道を一人で歩いていたら突然足元に穴が開いてこの世界の荒野に落ちちゃつたんです。そこからは地獄でした。一晩さまよつてこの村にたどり着いて生き延びましたが、村の人にとって私は不気味な異世界人でしかなくて、ずっと人として生きることが出来ませんでした」

つらかつただろうに……

不意に、頭をすつとなでてあげたくなつた。しかし、そうしていいのかという迷いがあつた。

「マルクさんが私を拾つて親切にしてくれているのには感謝しきれないくらいに感謝しているんですが、それと自然に笑えるようになるのは違うんです。だから、ドラゴスさんの話を聞いて自然に笑つた時、私勝手に『救われた』って思つちゃつたんです」

自分が特に何かした訳ではないので、ドラゴスには実感が沸かな

かつた。

「そういうものかな」

「そういうものですよ」

リイラの笑顔は暖かかった。もじこの笑顔が失われていたのなら、確かに一大事かもしれないと思った。

「それだけじゃありませんよ、私がドラゴスさんに助けられたのは

「へえ、聞きたいね」

「助けた」話ならだいたい検討はついていたが、にやけつつもド

ラゴスはあえて聞いた。

「わかつてゐくせに」

頬を染めたリイラはつまんだテコテコの先でドラゴスを指した。

「さあ知らないね」

ドラゴスはそれを取り上げてしまい、食べた。

「ふふつ、ならお話しましよう」

リイラは芝居がかつた口調で続けた。

「実は、わたくし、悪い人たちに襲われそうになつたのです。そこでわたくしは『助けてください』というクエストを出しました。すると一人の賞金稼ぎ様が現れ、クエストを受けてください、見事にわたくしを助けてくれたのでございます」

そこまで言うとリイラはわざと滑稽なほど恭しい一礼をしてみせた。自分でやつておきながら少し恥ずかしがつてゐるのが見て取れた。

「素敵な賞金稼ぎだ」と

ドラゴスは他人事のように言つてやつた。

「ええ本当に」

リイラが丁寧に手を添えてテコテコを口に差し出してきたので、されがままにドラゴスは食べた。

するとリイラは急に真面目な顔つきになつて言つた。

「いつかきっと報酬を払つつもりです」

「だからこらないつて」

「

「いえ、きつちつお礼がしたいんです。でも財産なんてこれっぽっちもないから、私……体で払います！」

「えっ？」

ドラゴスは驚いてしまった。リイラの方はとこりと急に顔を赤く染めて慌てだした。

「あっ、いや、そういう意味じゃなくて、私にはこの身一つしかないんで、ドラゴスさんの頼みなら何でも一生懸命に働いてみせますってことですか！　ドラゴスさんはその権利を受け取ってください」「大したことではないんだけどなあ」

「いいから受け取ってくださいっ」

リイラがあまりにも熱心なので、つい押されてしまつ。

「わかったわかった。その権利、もらつておくん」

「はいっ」

ドラゴスはリイラの口へ強引にテコテコを数本押しつけてやつたが、彼女は何とも嬉しそうにそれをほおばつた。

リイラは皿を細めながらもぐもぐと食べると、一番言いたかったことを言つことにした。

「ドリゴスさんに助けてもらつたのはそれだけじゃありませんよ？」  
ドリゴスがリイラのテコテコを奪つて食べたことをきっかけに、互いの手で食べさせるという妙な流れが出来ていた。リイラは自分が差し出したテコテコをドラゴスが食べるのがなぜだか気持ちいいので、どんどんと供給してくる。ドラゴスはそれをむしゃむしゃと食べながら言った。

「ここまでリイラを運んできたこと？」

「もちろんそれもです。これで三つ目のドリゴスさんの救いですね。でも実はもう一つあるんですね。

「なんがあったっけ？」

ドラゴスはリイラの口にもテコテコを差し出した。リイラは不思議とそのテコテコだけが特別美味しいような気がして、つい目尻が下がる。

「私が噂の異世界人のリイラ だってわかるとみんな私のことを『人じやない何か』として扱うんです。反応はそれぞれ違うけど、根っこにあるのは同じでした」

リイラは笑顔を崩さなかつたが、それでも暗い言い方になつてしまつたと感じた。ここからははつきり言わなくてはと思った。

「でもドラゴスさんはまるつきり違いました。ドラゴスさんは手を握ってくれたんですね！ 額を付けてくれたんですね！ 対等な人として、自分が寒いなら私も寒いんじゃないかつて心配してくれたんですよ！ 暖かかった。嬉しかった。幸せでしたっ！」

興奮気味で頬は真っ赤に染まっていたが、リイラはドラゴスの目をしつかりと見据え、そのまま向き合い続けた。

「そうやってドラゴスさんは何度も私を救つてくれたんですね」

リイラには目の前のドラゴスが輝いて見えた。何度も救つてくれた希望だった。そしてドラゴスをしつかりと見つめ、かみしめるようにして告げた。

「世界で一番、感謝しています」

言葉の重みにドラゴスは少し驚いたようだが、すぐに真剣な眼差しでリイラを見つめ返した。リイラの気持ちが届いたようだつた。そこでドラゴスは思いつめた様子で、口を開いた。

「実は俺も……異世界から来たんだ」

「えっ！ そうなんですか！？ どこの国の人ですか？ 私と同じ日本ですか？」

リイラの心に更なる光が射した。もしかしたら帰れるかもしだい。一緒に、帰れるかもしない。

そう思つて熱心に詰め寄るリイラの顔があまりに近く、ドラゴスは照れたようだつた。それに気が付いたリイラも照れてしまい、二人は顔を背けた。

「お、俺が異世界から來たのは赤ん坊の時だから、リイラの『『日本』つていう国も知らない……俺は赤ん坊の時に 断絶の谷 の向ひ側の世界から落とされた……それで運良く助かつてこちら側

の世界で育つたんだ」

ドラゴスはところどころ詰まりながら語った。しかしその情報はリイラが期待したのとは違った。ドラゴスの言ひ「異世界」はこの世界にある別の場所といつだけなのだ。

「そう……ですか」

リイラは隠したつもりだったが、少し残念そうな表情になっていた。

「でもいつかは、谷の向こうの世界に行つてみたいと思つてゐる。今はまだ行く方法もわからないけど、賞金稼ぎとして旅をして、絶対に行き方を見つけるんだ。だから安心しな、俺がリイラを故郷に帰してやるよ」

ドラゴスはテコテコをリイラへ差し出した。だがリイラはそれを受け取ることが出来なかつた。

「それは無理だと思います」

やはりちゃんと言ひべきだと思つた。意識せず声が冷たくなつていた。

「お前……帰りたくないのか？」

ドラゴスは怪訝そうな顔をして、持つっていたテコテコを置いた。

「やう言つ訳じや……」

「なら俺が帰して……」

「違うんですよ」

抑えて、その声には絶望が滲み出てしまつた。

「違うんです、谷の向こうの世界と、私がいた世界は、繋がつてもいいんですよ。全く別のものなんです。ドラゴスさんがこの世界を旅しても、私のほうの問題はどうにもならないんですよ」声が消え入りそうになるが、何とか言い切つた。だがそれでもドラゴスに諦める様子はない。

「いや何とかするつて！ 帰りたいんだる？ 絶対にお前を帰してやるさ！」

「あなたには関係ないんですよ！」

リイラは強く言い放つた。

手を差し伸べてくれるのが嬉しくて、つい甘えてしまいたくなる。しかし、もう救われすぎている。これ以上はただの負担としてドラゴスにのしかかる。しかも冒険して何の義理もない他人を異世界へ帰すだなんて何年かかるかもわからない。彼の人生をそんなことに使わせてしまう訳にはいかない。今は嘘でも睨んで、突き放すしかない。リイラはそう考えていた。

……でも本当はすがりたい。助けて欲しい。

リイラの目からは大粒の涙がぽろりぽろりとこぼれ落ちるが、それでも必死にきつい目を向け続けた。

「……ドラゴスさんは無関係なんです。だから、ドラゴスさんがそこまでする理由もありません。ドラゴスさんは自分のために、谷に向ひつの世界を指してください。私は、この世界では誰とも無関係な私は、自分で何とかするしかないんです……」

リイラは顔を伏せ、涙を懸命に抑えようとした。

ドラゴスも少し怒ったような口調になっていた。

「一人で旅にでも出て帰り方を見つけるつもりかよ

「……はい、それしか……」

リイラは俯いたまま、拳を固く握りしめた。何とかして自分を保とうとした。

「噂通りだと魔力もないんだろ?」

「でも戦う以外のクエストもあるはずです!」

顔を上げ強い口調で言い、ドラゴスを睨み付けた。だがその声は綻んでいた。ドラゴスもリイラと同じく強い目を返して言った。

「そんなんで本当に帰れると思ってるのか? 甘すぎるよ。その程度の報酬じゃ情報を集めて旅を続ける資金どころか、日々の生活すらままたらないだろうね」

リイラの目から、また涙が落ち始めた。頭がぐらぐらして、平衡感覚も失いそうだった。しぼり出す声は細く、震えていた。

「……やっぱり無理ですよね、馬鹿ですよね私。もう一度と帰れな

いんだから、諦めるべきですよね……

でも、それを認めちゃつたら……こんなつらい毎日を無理して生きる意味なんかない気がして……きっといつか帰れるって自分に言い聞かせないと……もう私……死にたくて死にたくて……ダメなんです……」

リイラが今まで保っていたものが崩れた。気付けば声にならない乾いた声で泣いていた。胸の中で膨む絶望に心が潰されていく。死にたい。

異世界に飛ばされてから何度もそう思つたかわからぬ。毎日が苦痛でしかなかった。嫌で嫌で仕方なかつた。何をしてもつらかつた。どうして自分がこんな目に会うのだろうかと、見えない誰かを恨んだ。

夜はいつも泣いた。

朝が来ると憂鬱だつた。

幸せそうに笑う人をずるいと思つた。

笑顔を作るほど虚しくなつた。

人の目が怖かつた。

逃げ道なんかないのに、常に逃げたかった。

そんな感情を全部ひっくるめた思いが　死にたい。

でもいつか帰れると言い聞かせ、必死に隠していた。死にたいと思つていたのに、思つていないことにした。

なのに今現実を見れば、心は「死にたい」と願う。それだけを願う。

「……もう、死にたいよ……」

純粹な思いが、口からこぼれた。

「クエストって何のためにあると思つ?」

しかしドラゴスは落ち着いていた。

「何か問題があつた時、それをわざわざクエストになんかしなくて

も、本来はその問題に関係する人が直接解決すれば済んでしまう。

でもそう上手くはいかないから、依頼人は願いをクエストという形にして、無関係な人の力を借りる。つまりクエストっていうのは無関係な人と人とを繋ぐものなんだ。

リイラ。俺とお前は出会ったときからクエストで結ばれている。だから覚えとけ。たとえ無関係な世界に来てしまっても、俺とはもう、無関係なんかじゃない」

再び胸に灯つた小さな火が、「死にたい」という冷たい思いを勢いよく溶かし始める。溶けたそれは暖かい涙となつて、リイラの目から次から次へと溢れた。とめどなく溢れた。

「リイラ、帰りたいか？」

「……」

返事が出来ない。

「帰りたいか？」

「……」

ただ涙を流すことしか出来ない。ドラゴスの声が次第に強くなる。「帰りたいか」

何とか絞りだして、声のようなものを出す。

「……りたい……」

ドラゴスの怒号のような問い合わせがリイラの胸に響く。

「帰りたいか！」

胸の奥にある願いが、いくつもの膜を突き破つて昇つてくる。また一つ、また一つと突き破る。そして喉元で最後の膜を 突き破る！

「帰りたいです！」

願いは涙声の絶叫となつて響いた。

「私を！ 元の世界に帰してください！ 帰りたいんです！ お願  
いします！」

必死に泣き叫んだ。無様かもしけない。惨めかもしけない。それでもありつけの願いを叫びに変え、吐き出した。届かないかもし

れない。それでも手を伸ばした。

ドラゴスも大きく息を吸うと、ありつたけの声で応えた。

「そのクエスト！ 乗つたあああ！」

そしてリイラの手を強く強く、握る。

ここに一つの物語が、始まつた。

## 第一章 出会い 2（後書き）

ドラゴスクエスト 第一章 完

第二章へ続く……

## 第二章 旅立ち 1（前書き）

ヒロインの名前を「リイラ」、主人公の姉の名前を「ベラ」に変えました。

第二章 旅立ち

1

「 剛剣のトルガ なんて自分で名乗るのは恥ずかしいが、やつぱり通り名っていうのは重要だな。話が早い」

「覚えてもらいやすいし思い出してももらいやすいってことか」

「ああ。あと噂話も案外重要なだ。噂になりやすい通り名なら名も知れて、賞金稼ぎとしての信用も保証されるようになる。なにも人として立派であることを証明する必要はない。クエストの遂行を誤魔化したりしない賞金稼ぎであること証明出来ればいいんだ」

「そんなこと」

「そんなことが意外と難しいんだよ。新参者は特にね。俺は 剛剣のトルガ なんて通り名を付けられたくらいだから噂でも結構強いと評判らしい。そのおかげで初めて行く店でも戦闘系クエストなりすぐに紹介してくれるよ」

「なるほどなあ」

「お前も早く村を出るよ、竜の田のドラゴス」

あれから三年が経つた。

ドラゴスもトルガも今年で十八になる。

トルガは家族と死別したためにしばらくは村のあちこちで仕事をもらって生活していたが、やがて村を出て賞金稼ぎになつた。一年ほど前のことだった。

この村から北東に進むと ザッザル という都市があり、それが最も近い都会だった。そういう都會でないとクエスト依頼は得られ

ないので、トルガはそこでクエストをこなし、賞金を稼いでいた。

しかし近いといつても着くまでに数週間はかかる。おまけに陥し  
い山々を越えなければならない。

トルガはそれでもこの一年で既に二回帰ってきてこれで三度  
目になる。トルガが帰ってくる度に話してくれる賞金稼ぎとしての  
体験談が、ドラゴスには何よりも楽しみだった。

トルガの見た目は三年前と違っている。さらに背が伸び、筋肉も  
付き、大男と呼ばれるほどの体躯をしていた。

剣の腕や魔力の使い方も体に比例して成長しており、まさに 剣  
剣のトルガ の通り名にふさわしい強さであった。

対するドラゴスも成長していた。身長こそ平均よりやや高い程度  
だが、引き締まった体にはしなやかな筋肉が付き、何よりその精悍  
な顔付きに成長を見て取れる。もちろん 竜の目 と呼ばれるその  
目は健在で、いつそう強い光をたたえるようになっている。

二人は今、久々に剣を交えようとしていた。

過去二回トルガが帰ってきた時は、勝負をしなかった。したがつ  
てほぼ一年ぶりとなる。

長剣を構えるトルガの姿は、ドラゴスには以前と変わりないよう  
に見えた。

だがドラゴスは変わっていた。ドラゴスはこの一年、体より魔力  
を重点的に鍛えたので、その効果はかなり出ていた。

纏う魔力の質が上がっているのだ。ドラゴスが戦闘態勢にはいる  
と、全身を覆う高密度の魔力がうつすらとオーラのように見え始めた。  
これにはトルガも驚いたようだつた。これがドラゴスが身につ  
けた、今までよりも一段階上の魔力なのだ。

ドラゴスは試したことがあるのだが、この状態の魔力はリイラで  
もぼんやりと見える。だからトルガが魔力で視力を強化していなく  
ても見えたのだ。仮にもし警戒して視力強化を行っていたとしても、  
ドラゴスの纏う魔力の鮮明さに驚くだろう。

そして昔は棒きれだつたのが、今は短剣になつてゐる。これは藏に何本もあつた短剣だ。

実は三年前に果物屋で金属製の筒と交換しても「いつために持つていつた剣、そのものである。

三年前にリイラを助けて宿屋に泊まつた日の翌日、ドラゴスは果物屋へ行つたのだ。すると金属製の筒はやはりガラクタでしかないためにすぐ返してもらえた。一方ドラゴスも短剣を果物屋に受け取つてもらつてあくまで「交換」とするため、その実用性を説き、短剣を抜いて見せたところ、なんと刃がなかつた。刀身があるだけである。短剣は武器ではなく、ただの工芸品だったのだ。

ドラゴスが道理でいい「デザインな訳だ、と感心していると、果物屋に「結局ガラクタじゃねえか!」と怒られ、追い返されてしまった。

仕方なく金属製の筒とともに短剣を持ち帰り、蔵に戻しておくことにした。

すると帰り道にリイラと出会い、「その短剣似合つてますね。あの時ドラゴスさんがこの短剣を携えて現れた時、私が『かつこいい!』って思つちゃいました」などと言わてしまつたので、ドラゴスはそのまま短剣を持ち続けるようになつたのだった。

その短剣は工芸品であるため、もちろん戦闘には適さない。サーベルタイプの刀身は細く、恐らく鋼ではなくただの真鍮しんちゅうだろう。だが握りやすい。ドラゴスにはそれで十分だつた。むしろ立派な棒きれという感覺で使えた。そしてあまり長くないのも良かつた。ドラゴスは魔力を纏い操るが、体から距離があると上手く魔力を操れない。つまり、長剣だと先端までちゃんと硬質な魔力を覆うこと出来ないのである。

その点、この短剣は先端まできちんと魔力で覆うことが出来る。しかもそれは今や鋼より遙かに硬い魔力なので、刃がないことや刀身の材質は問題ではないのだ。

覆う魔力がより硬くなつたのは、成長したドラゴスの魔力が強く

なつたこともあるが、イメージしやすくなつたこともある。

棒きれを覆う鋼の剣をイメージするより、剣にそれをイメージする方が楽なのだ。たとえば、ドラゴスは手刀に魔力で刃を付けることは出来るが、手の先に見えない刀身を付けたりすることは出来ない。体から離れているうえに、イメージしにくいからだ。密度の薄い軟らかい剣なら可能だが、そんものは戦闘には使えない。

このように体に近いこととイメージしやすいことの一いつの条件を満たしているため、この短剣は非常に強力な武器となつた。

だがこの剣が相当な強さを持っていることはトルガも三年前から知つてゐる。だから警戒しているはずだ。今までこの短剣で何度もトルガの剣を折つてやつたのだ。迂闊に出て今や商売道具である立派な長剣を折る訳にもいかないだろう。

ドラゴスは様子を見ていた。が、ここはあえて何もしないことに決めた。この可視化された魔力の防御力を試してみたかったのだ。

当然村の悪ガキどもで試してはいる。その結果は 竜人のリムが繰り出す炎も寄せ付けないし、おしゃべりロッカ の俊足を活かしたなどの技でも触れさせないという素晴らしいものであつた。しかし、彼らの攻撃など以前から効かなかつた。ドラゴスはそれよりもっと強い、トルガの鍛え上げられた筋力と魔力で繰り出される一撃で試したかつた。ドラゴスはそのために、この防御の技が完成するまであえてトルガとの対戦は避けていたのだ。

ドラゴスは心を静め、技が正常に働くこと祈つた。

トルガは剣を折られたくないだろうから、こちらが剣で受ける余裕のないような攻撃を仕掛けるだろう。すなわち、体めがけて一閃、である。かつての防御法でも一度だつて破れなかつたのだから、全力でやつてくれるはずだ。

両者は睨み合つたままだつた。トルガはやはり相當に警戒しているのだ。なのでドラゴスはあえて全身に力を入れた。あまり脱力しているとかえつて隙がなくなるからだ。力んでいればきっとトルガは隙を見出してくれる。ドラゴスはそう踏んだ。

すると閃光の如き一撃がドラゴスを襲つた。凄まじい速度だつた。ドラゴスがそれを頭で理解した時には、既に攻撃を食らつていた。

ギンツ！

気づけばそんな音が響き、トルガの長剣は折れて宙に飛んだ。折れた刀身が地面に突き刺さり、ザクッ、と音を立てるまで、トルガは呆然としていた。ドラゴスはその一連の流れを悠然と見ているだけだった。

「新技、絶対防衛だ。イメージを込めてあるがまだ何も変化させていない超高密度の魔力を予め纏うことで、敵の攻撃が触れると自動的に硬くなるようにしてある。まあ、そう作動するようになるまでは一年以上かかるけどね」

「お前……それ早く言えよ……」

トルガはがっくりと肩を落とした。

「この剣、結構いいやつなんだぞ……高いんだぞ……これを手に入れるためにいくつのクエストをやつたと思ってるんだ……」

トルガは悲しみに暮れている。

「ああ、そりや悪かつたな……それより俺の新技の感想を……」「新技か……ああ。自動的に防衛だなんて、そんなのありかよ……」「いや大変だつたんだよあれ習得すんの。この一年、クエスト団の連中に俺を見つけたら不意打ちするように言い付けてたけど、やつと最近習得したんだ」

「無茶苦茶な……」

ドラゴスも自分でも無茶苦茶だとは思うが、どうとうトルガの剣すら自動的に防げるようになったのでやつた甲斐はあつたと思った。「そんなことより俺の剣どうしてくれんだよ。商売道具だぞ?」悲しみが收まりつつあるトルガは次第に怒り始めている。

「仕方ない、この最強の短剣を」

「いらぬえよ！ 刀もないおもちゃだろそれ！」

「わかつたわかつた、あとでうちにあるやつあげるから！」

「まともなやつあんのかよ」

トルガは不満そうだった。

「なんだその顔は！ うちは確かにしょぼい道具屋だけど立派な剣だつて何本もあるわ！」

「はいはい、じゃあそれで我慢するよ」

「おすすめはだな、黒い鞘の細身の短剣で

「だからそれおもちやだろ！」

「でも何本もあるんだぜ？」

「数の問題じゃねえよ！」

トルガは深くため息をついた。

「ああ？ もつべん言つてみな！」

「ドライゴスの姉ベラは、今年で二十三の今が最も旬の美人とは思えない剣幕で怒鳴った。

「だからろくな剣がないんだって」

「ドライゴスは用事があると言つたので、トルガは一人で道具屋へ行き、ベラに事情を説明した。

するとベラは豪胆にも好きなのを持つてけと言つたが、「ろくな剣がない」というのが剣の類を一通り見てトルガの出した結論だった。

「うちの商品にケチ付けるたあどうこう了見だ！ そんな風に育てた覚えはないぞ！」

「あんたがいつ俺を育てたんだよ！」

「知ってるんだから、年頃の男の子はみんな私のお世話に」

「あーあー！ はいはい『めんなさい』『めんなさい』。どれも素敵な剣ですね」

「顔が全然嬉しそうじゃない」

ベラは不満げにトルガを睨むがそれすら色氣を含む。

トルガはため息についてから言った。

「最後に剣仕入れたのいつだよ」

「ううん、覚えてないね」

「最後に剣の手入れしたのは」

「さあ、記憶にないね」

「これには呆れた。

「そんなんだから状態の悪い剣しかないんだよ」

「……確かに」

ベラは納得したようで、トルガは彼女の説教の回避に成功した。トルガは今までにベラの理不尽な説教を何度も聞かされたかわからぬ。しかも大抵最後はベラの炎の魔力を駆使した体罰で締める。混血とはいえ竜人族の血が濃いベラの炎は強力で、食らつた方はたまたもんじやない。

しかし村を出て一年になるトルガには、それすらもちょっとびり懐かしい気がしないでもない。

「だけど磨けばいい剣だってあるかもしれないよ。それに剣以外の武器でも使えるのが絶対あるって」

トルガは懐疑的だったが、とりあえず頼んでみた。

「いいのがあるんだつたら見てみたいし、持つてくれよ」

「任せな！」

ベラは自信満々に奥へ行くと、丸くて取っ手の付いた金属製のものを持つてきた。

「この盾なんか似合つと思つぞ」

「なるほど、盾にしてはずいぶん軽いな……ってこれお鍋のふたじやねえか！」

「……ばれた？」

「そりやばれるだろ！ それに『似合つ』ってなんだよ！」

「いやあ、なぜだか出しておいた方がいい気がしてね。でも次こそはちゃんとしたの持つてくるさ」

ベラは再び奥へ行くと、今度は長い獲物を持ってきた。

「背の高いトルガならこの長槍を使いこなせるのではなかろうか」

「ほつ、長いな。槍先は付いてないがこの重量感……物干し竿つ！」

「ふざけんな！ 何が『なかろうか』だ、本当は生活雑貨売りつけ

たいだけだろ！」

「……ばれた？」

「当たり前だ！ もはや武器ですらないんだし……とりあえずこの長剣もらっていくよ」

トルガは折れてしまつた剣とほぼ同じ大きさの剣を手に取つた。

「あいよ。ツケとく」

「タダじやないのかよ！」

「はは、[冗談だつて。それじゃ弟をよろしく頼むよ]

「まったく、あんたが言つと[冗談に聞こえねえよ。じゃ、またいつか]

トルガは店を後にした。

ベラが店番をしていたのは偶然ではない。道具屋の店主は今、彼女なのだ。

ダグルは一年前のある日、瀕死の状態で帰つてきた。断絶の谷へ行つていたのだった。ダグルは外傷がある訳でもなく、それが結界によるものだという的是明白だった。

ダグルは帰つてくるなり倒れ込んだ。幸いにもベラとドラゴスが在宅していたため、すぐに介抱することが出来た。だがしばらくは意識が戻らなかつた。

数日の後に、ダグルは意識を取り戻した。そして元気のない声でやはり結界のせいであることを説明した。それからドラゴスがいつか谷の向こう側へ行きたくなつても、結界があるうちは谷を通らずに行くように言つた。ドラゴスはそんな話は後でいいと言つたが、ダグルは強いて話そつとしたのだった。

その後ダグルはあまり元気にはならなかつた。特別体調を崩すようなことはなかつたが、日を追つごとに衰弱していく。

ダグルはベッドから出て歩くことだつて少しなら出来たし、しゃ

べることも出来た。だがドラゴスには巨体だったはずの父が次第に小さく見え始めたことが、悲しかつた。

結局ふた月の間徐々に弱り続けたダグルはそのまま静かに息を引き取つた。なんの悲劇も苦しみもなく、ダグルは消えてゆくようになんだのだ。

不思議だ。変だ。落ち着かない。

ドラゴスはそんな心境だつた。悲しみとは違う感覺だつた。

ドラゴスがそれを「喪失感」だと知るのは、もっと多くのものを失い、そして奪つてからだつた。

ダグルがいなくなると、ベラが道具屋を継いだ。ただ、ダグルのように谷で品物を拾つて高値で売るなどということは出来ないので、従来のようにのんびりと店を構えることは出来なくなつた。

なのでベラは村と西部の主要都市を行つたり来たりの半分行商に近いやり方を始めた。

元来活潑で口も体も（気も）めっぽう強いせいもあり、かなり稼いでいた。行商はベラの性に合つたやり方だつたのだ。しかし、一年の半分くらいは村を出ているので、その間はドラゴスが店番をしなければならなかつた。

ベラはそこを気にしていた。ダグルが懸念していたように、やはり家がドラゴスを縛り付けているのだ。

ドラゴス本人は不満など一度も口にしたことはない。気に病む様子もない。だがドラゴスが冒険に出たがつているのは誰が見ても明白だつた。トルガが賞金稼ぎとなつてからはそれがより顕著となつていた。

ドラゴスはトルガと別れた後、あるものを買いに行つていた。実は少し離れた地域である「リーゼ」という町のガキ大将に喧嘩を売

られていたのだ。

もし近隣の地域の者なら、ドラゴスに喧嘩を売るなどというのはありえない。それが自殺行為だというのが、ドラゴスが十代前半だった頃から知れている。ましてや今年で十八のドラゴスに挑むなど、誰もが想像すらしない。

だが不幸にも喧嘩を売つてきたガキ大将の町にはドラゴスの評判もあまり届かなかつたのだろう。そんな長距離を行き来をするのは大抵大人であるからそれは仕方ない。不幸なガキ大将は「ドラゴスという悪ガキが強い」程度の曖昧な情報に条件反射のように喧嘩を売つてしまつたのだ。

とはいゝ、やはり少し離れた地域ゆえ、日時を指定して決闘を申し込まれた訳でもない。ただ言づてで挑発されただけなのだ。

ガキ大将には、さらに不幸な点があつた。昔ならそんな曖昧な喧嘩の売り方ではドラゴスは見向きもしなかつただろう。何より行くのが面倒だ。

ところが今のドラゴスは違う。二年前に自分の移動能力に限界を感じ、なおかつ可能性も感じたドラゴスは、あの一歩ずつ飛びながら走る移動法を極めつつあつた。

つまり、ドラゴスの喧嘩の買い付け範囲は格段に広がつていた。それに加え、まださらにはガキ大将に不幸な点があつた。

今はベラが帰つてきているのだ。つまり、店番をする必要がなく、ドラゴスは基本的にすることがない。暇なのだ。そんな暇つぶしを探している時期に届いた挑発だったので、ドラゴスは嬉々として食いついた。

そのガキ大将のいるリーゼという町までの道は普通の人が三日かかる道だが、ドラゴスが本気を出せば一時間で走れる。いやむしろ速度が上がつてくると「飛ぶ」と言つた方が適切な様相となる。少しばかり手を抜きながら、ドラゴスは一時間半でリーゼに到着した。

ぶらぶら歩いていると、早速現地の悪ガキ一人に見つかった。だ

が向こうにはドラゴスのことなど知らず、ただ絡んできただけだった。

「す、すみませんでした……」

詳細を書くまでもなく不良少年どもはこてんぱんにやられた。  
「で、ここのガキ大将のベルベルだかゼルゼルだかそんな感じの奴はどこだよ」

ドラゴスは悪ガキたちに案内をさせた。

連れてこられた場所は、郊外の廃屋だった。平屋で大きな屋敷だが、穴だらけでボロボロだ。

「いかにも不良の溜まり場って感じだな。ここにいんのか？」

悪ガキは無言で頷く。心なしか余裕が見え始めている。ゲルゲルとやらはそんなに強いのだろうか。ドラゴスは少し期待した。

大きな声を出して呼ぶのも面倒なので、ドラゴスはちょっと新技を試してみることにした。

拳に鋼鉄の魔力を纏いつつ、それを瞬時に膨張させる。魔力の膨張速度は今や爆発に近く、ドラゴス自身も爆発をイメージしている。その技は今まで岩だとか樹木だとかに対しても使ったことがない。好きに壊していい建物などそうそう巡り会えないのだ。したがつてボロボロとはいえ、建物に対してどれくらいの威力を發揮するのかを知る滅多にない機会だった。

玄関前に立つたまま呼ぶことも入ることもせず、拳にぐっと力を込めるドラゴスを見て悪ガキの一人は訝しがり、一人はまた殴られるのかと思い、身をすくめた。

ドラゴスは大きく振りかぶったところで一瞬、躊躇した。

……いや、ほどほどにしといった方がいいかな？ ま、いつか。

吹き飛べ！

扉に拳が触れる直前に爆発を作動させると、轟音とともに廃屋の左半分が吹き飛んだ。岩をも碎く技を廃屋に使ったのだから当然の

結果であつた。しかしドラゴスは全て吹き飛ばすつもりだったのでやや不満だった。

まだ制御が難しいな……

屋根や壁が吹き飛んだ左側には十数人が呆然と立っていた。残された右側にも奥に何人か固まっているのが見えた。その中心にはソファーに腰掛け偉そうにしている男がいた。

彼はドラゴスをギロリと睨んだが、それでも余裕を見せ、座ったまま出てこようとしている。取り巻きはドラゴスの方へ急いで接近してきた。

ドラゴスは面倒なので、もう一度新技を試すこととした。今度は炎の技だ。

ドラゴスの魔力は体から離れると制御できなくなる。たとえ高密度の魔力でも拡散してしまうのだ。だから炎を扱うのが得意なドラゴスでも、遠距離では炎の攻撃も拡散して威力が弱まる。しかし、それが利点となる場合もある。

ドラゴスの中には青白く光る、豆粒ほどの球があった。それをドラゴスが投げると、みるみるうちに真っ赤に燃え盛る大きな炎となつた。

焼き尽くせ！

拡散した炎は瞬く間に廃屋の全域に火をつけた。遠距離では攻撃力はないが、自然に拡散するため広範囲に攻撃できるのだ。

余裕ぶつていたら突然放火されてしまったので、たむろしていた悪ガキたちとともにガキ大将と見られる男も咳き込みながら燃える廃屋を出る。

「お前がデルデルか！」

「『ベルゼル』だ！」

男はなかなか体格が良く、少し強そうだった。そしてよく見ると二十代後半に見えた。

「お前、いい年してまだガキ大将なんかやってんのかよ」

「つるせえ！ お前だってそこそこ年いってるだろうが！」

「俺は十代だからぎりぎり大丈夫だ」

「俺だつてまだ二十一だ！」

「なんだ、見た目より若いじゃ ないか。老け顔だな」

「ああん？ ぶつ殺してやる！」

ベルゼルがそう叫ぶと、ドラゴスに近い連中から次々と殴りかかってきた。しかし、皆ドラゴスに触れられない。軟らかい何かにふわりと拳が止められてしまう。

「おい、何をやつてる！ 早く叩きのめしてやれ！」

真っ先にかかつてきた連中が何も出来ないのでベルゼルが怒鳴った。

「なんだ、 ふわふわ防御 も破れないのか。じゃあこれはもつと無理だな」

絶対防御！

今度はドラゴスを殴った者が次々と拳を押さえ悶絶している。ふわりとしていて強く殴ってもなかなか触れないでの、皆全力で殴り始めていたが、それが急に鋼の硬度になつたのだ。拳の方が碎かれる。

さすがにもう田に見えるオーラがドラゴスを覆つてるので警戒し、彼らは距離を置いて様子を見始めた。時折剣で斬りかかってくる者もいるが、ただ剣が折れるだけだった。

「もういい！」

痺れを切らしたベルゼルが直接出てきた。

「おつ、 やるのかビルビル」

「だから『ベルゼル』だ！」

ベルゼルは取り巻きに持つてこさせた大きな剣を、ぶんと振り回してから地面に突き立てた。

様子からすると剣での戦いが得意なようだ。よくいの「混血」ではなく、「雑種」なのだろう。

「ふん！ どんな魔力を使ってるのかわからないが、どうやら守るしかがないようだな。腰に下げるちゃつちい剣を抜いてみな。

俺が相手してやる

「その必要はないね。これじゃ上手く手加減できないんだよ」

「けつ！ふざけた野郎だ。そんなら遠慮なくぶつた斬つてやらあ  
ベルゼルはドラゴスとの距離を詰め、一気に斬り下ろしたが、ド  
ラゴスは軽やかにかわし、距離をとつた。

……遅いな。でもなかなかのパワーだ。

地面が大きく割れ、周囲の連中にも「さすが」と声に出す者が何  
人もいた。

ま、それでもトルガの足元にも及ばないが……

ベルゼルの次の攻撃に対し、ドラゴスは回避をしなかつた。ただ  
左手をかざした。

ぶおん、と音を立てて繰り出されるベルゼルの剣が、ドラゴスの  
左手の前でふわりと止まった。さらにドラゴスは鋼鉄の魔力で左手  
ごと剣を固定した。

「あ、あれ？ う、動かん！」

「わりい、やっぱ剣使つわ

「おい、や、やめろ！」

ドラゴスは抜刀とともに斬り、その流れのまま納刀した。根元か  
ら折られた刀身が地面に落ちた。

ベルゼルはほっとした表情を見せたが、すぐさま顔付きを変えて  
ドラゴスの顔面めがけて拳を繰り出した。

「それで勝ったつもりかよ！」

ベルゼルの一撃は正確にドラゴスの顔面を捉えていた。が、しか  
し、拳はドラゴスの目の前でふわりと止まっていた。

「それで勝ったつもりか？」

ベルゼルの顔が真っ青になつたときはもう既に遅かつた。ドラゴ  
スの拳がみぞおちを突き上げ、ベルゼルは宙に浮いた。

……やべ、忘れてた。

手加減グローブ！

ドラゴスは拳を軟らかい魔力で覆つた。これで思い切り殴つても

殺してしまつ」とはないはずだ。

「おりやおりやおりやおりやあ！」

宙に浮いたベルゼルは猛烈なラッシュを食らい続け、未だ地面に足が着かない。

「どりやあ！」

ドラゴスは最後に渾身の一撃を放つた。ベルゼルは大きく飛ばされ、地面にぐしゃりと落ちた。

とはいへ、手加減グローブによってパンチの衝撃はかなり緩和されているので致命傷を与えてはいない。が、最初の一撃はついうつかり手加減なしで殴つてしまつたため、ベルゼルは完全に伸びていた。

「まあ死にやしないだろ」

ドラゴスが残つた取り巻きたちを見回すと、彼らはベルゼルをほつたらかしにして我先にと逃げていった。

その中に一人、腰を抜かして逃げ遅れた少年がいた。短く刈つた金髪に大きな碧眼を持つ。他の者より少し幼く、十四、五歳といったところだった。

少年も一人だけ残されてしまつたのに気付いたようだつた。

「ひえええ！」

ドラゴスが近寄るとますます足が立たなくなつた。声も出なくなつて顎を上下させるばかりだ。

「お前、残れ」

ドラゴスがきつこつきでそう命じると、少年は失神してしまつた。

燃え続けた廃屋はすっかり焼けてしまい、真っ黒な炭の集まりとなつていた。風が吹くと灰が舞い、ドラゴスは咳き込んだ。

「知らない村でこれは少しやりすぎたかもしねない」

廃屋に見えたが廃屋とは限らないし、他に誰か所有者がいたらどうしようかななどとドラゴスは思った。

だが今更そんなことを考えてもしょうがないので、今この状況をどうにかしようとした。

ドラゴスの近くにいる者は一人とも眠っている。昏倒しているベルゼルと失神した少年だ。

とりあえず死にそうにも見えるベルゼルが無事か確かめてみるとした。

いでよ水！

ベルゼルの顔にばしゃ、と水を落とした。だが反応はない。

「もう一丁！」

今度はかなり多めに水をぶつかけてみると、ベルゼルは目を覚ました。

「ふはあ！ 溺れる！」

ベルゼルは地面で手足をばたばた動かし、もがいていた。

「あれ？ 地面だ」

状況を把握してむくりと起き上がった。

「あっ、お前！」

「よつ、無事みたいだな。えつと……たかし！」

「『ベルゼル』だ！ 誰だよ『たかし』って！」

「はい無事です」

いつの間にか少年も目を覚ましていた。

「お前かよ！ 顔は知つてたけど名前は初めて聞いたよ」

「へえ、お前も『たかし』なのか

「はい」

「『も』じゃねえよ！」

「なんでたかしはたかし2号の下つ端なんかやつてんだ？」

「それは……あの……」

少年は俯いて気まずそうにしていた。

「おい当たり前のように『たかし2号』とか呼んでんじゃねえよ

「つるせえ！」

もう無事が確認出来たので、たかし2号を殴つて眠らせた。案外元気そうなのでそれくらい問題ない。

「あ、あの、弟子にしてください！」

「え？」

少年の顔は真剣だった。

「僕も強くなりたいんです！だからベルゼルさんたちの仲間に入ってもらつて鍛えてもらつてたんです」

「そんなこと言われてもなあ」

ドラゴスは困惑した。対照的に少年は目を輝かせてくる。

「さつきの戦いす」かつたです。あんなに強いベルゼルさんを簡単にやつつけちゃうなんて。強いつて噂の『ドラゴス』さんですよね？」

「なんだ、知つてゐのか。ならわかるだろ。俺はここいらで『端村』はじむらって言われてる西の外れの村に住んでるんだ。ここから遠いし弟子にするなんて無理だね」

「そ、そんなあ……」

少年はひどく氣を落としたようだつた。

「お前、年は？」

「今年で十六です」

しかし十六にしては小柄で、年齢よりかなり幼く見える。

「混血か？」

「……いえ、雑種です」

「剣は使えるか？」

「あまり……」

ドラゴスは告げていいものかと悩んだが、やはりここはまつきりと言つべきだと思つた。

「この言つちや悪いが、諦めた方がいい。特殊な魔力のない雑種で小柄じゃそうそう強くなれない。剣術が天才的であるとか、特別な要素がないと難しい。無理に身を危険にさらす必要はない。平穀に

暮らせ」

ドラゴスが諭すと、反論もせず、少年は悔し涙を流した。きっと少年も半分わかつていたことなのだろう。

根性はありそなんだけどな。

ドラゴスもそう思うだけに、少年が強くなれないという現実が悔しかつた。

急に救いたくなつた。

無力であることの悔しさなんか、最初から強かつたドラゴスにはわからない。だがその分、自分の無力さに抗おうとする者を見ると、何としても救いたいと思うのだ。

少年は運命に勝てない。絶対に勝てない。しかしそれでも立ち向かおうとしたのだ。その強さに惹かれたのかもしれない。いや、きっと羨ましいのだろう。自分にはない力を持つものが。ドラゴスは思った。

「わかつた。話せ。なんで強くなりたいのか、話せ」

少年は途端に明るい顔になつた。

「勘違いするなよ。まずは話を聞くだけだ」

「はいっ！ ありがとうございます！」

すると少年はもじもじし始めた。

「あ、あの……実は、さつき嘘付きました……『めんなさい』……」

「ん？」

「僕、『たかし』じゃありません。話に入りたくて、つい……。本当は『チトク』っていう名前です」

「なんだそんなことか」

不意にドラゴスは「たかし」という名前がどんな記憶から引き出された名前なのかを思い出した。

ドラゴスが小さい頃、ある変わった冒險者と出会つたのだ。ラグレー山脈に近いので村にも冒險者といふのは常に滞在している。村の中心部には宿屋が何軒も立ち並び、村は宿場の街としても機能しているのだ。

だがその冒険者はよくいはる冒険者と違うのだ。普通はラグレー山脈に向かい冒険に出る。尾根の向こうは何もないが、手前には豊かな自然が広がり、冒険者にとっては魅力的であるのだ。しかし、彼の冒険の対象は村だった。彼いわく魔界を旅すること自体が楽しくて仕方ないと言う。しかも「危険だから」という理由で近いのにラグレー山脈には入らなかつた。いい年した大人だが、魔物にも全く勝てないらしい。彼は村を探索しながらしばらく滞在し、ドラゴスの家である道具屋で生活雑貨を大量に買うと他の村へ行つてしまつた。

ただの変わつた冒険者でしかないし、交わした会話も少ない。だがドラゴスに強い印象を与え、影響も及ぼした。

少年であつたドラゴスはその時始めて、旅そのものを目的とするという概念を知つたのだ。魔界では何かのために旅をするというのが普通なだけに、ある意味衝撃的だつた。他の村人にとっては奇異な冒険者だつたが、ドラゴスには思想家のよつた位置付けで記憶された。ドラゴスに旅への憧れを植えつけたのだ。

彼の名前が変わつていたのも、大して関わりがないのによく覚えている理由だつた。彼の名は「たかし」。聞き慣れない響きだつた。ドラゴスが自分の出自を知つてからは、もしかして彼は異世界からの旅人だつたのかもしれないとも思うようになつていた。

彼は今頃どうしているのか。ひょっとするとリイラが帰る手がかりが……

そこまで考えてドラゴスは歯痒く思つた。リイラにあんな大見得を切つておいて三年も何も出来なかつた。事情はあるにせよそれを乗り越えられない自分が憎かつた。

やはり出来るなら、この少年の力にならう。自分が少年の「強さ」にならう。ドラゴスは決めた。

「『チトク』か……それにしても『たかし』は変な奴だつたな」「へ？」

「いや、なんでもない。チトク、名前を偽つたことはどうでもいい

から、お前が力を欲しがる理由を話してくれよ

ドラゴスに促されると、チトクは暗い顔になつて話し始めた。

この集落やドラゴスの村を含む西部地方の南の一帯は、ジャンベリムという貴族の領地である。領内は小さな村ばかりであるが、かなり広大な土地を持つているのだ。

ジャンベリムはよく出来た人物であった。領民を大事にし、村と村を結ぶ道を馬車で通れるよう整備するなど、何かと地域のことを考えてくれている。ドラゴスの住む村がラグレー山脈へ向かうための宿場町としてやつていけるのも、そこに至る道をジャンベリムが整備してくれているお陰である。

だがその反面、家庭を疎かにしていたようだ。広大な領地に点々と散らばる集落を暇さえあれば訪問するため、たまにしか家に帰らないのだ。その結果、彼の一人息子は立派な駄目人間となつた。

駄目息子はドスドルマという名で、領民にもよく知れている。それは、ジャンベリムが端正な顔立ちなのにドスドルマがひどく不細工であるからではなく、ドスドルマが領内の村々でしおつちゅう悪さをするからである。今年で三十になるといつのに、領民の物を勝手に取つたりすることは日常茶飯事だ。

ドスドルマは顔が悪く魔力も弱く、おまけに品もないのに貴族社会の女性には相手にされない。だから立場の弱い領民の女の子にしばしばちょっかいを出す。これが一番厄介なのだ。

ドスドルマだって一応貴族なので、お金を出せば寄つてくる女はたくさんいる。しかし、そんな行動力のあり、タフは女には手を出さない。魔力の弱いことがコンプレックスで、自分より弱そうな、大人しい子、もしくは少し幼い子ばかりを狙うのだ。また、そういう子なら何かされても誰にも言えずに入るために、父親のジャンベリムに報告されてしまうこともない。

とはいって、ドスドルマの悪行はジャンベリムの耳に入ることも多い。だから一応咎めはするものの甘く、それだけでは駄目息子は改心せず、結局被害はなくならない。

ドスドルマがあまり長い間領民に憑さを働けば、当然ジャンベリムが大急ぎで駆けつける。したがつてドスドルマが一つの集落で好き勝手に出来るのはせいぜい数日である。しかし、女の子を泣かせるには一晩で十分だつた。

チトクの姉、テナもドスドルマに田を付けられた一人であつたが、連れ去られる時に運良く解放されたといつ。

だが安心は出来ない。ドスドルマの好みであるのは確実なのだ。理由はわからないが解放されたのも運が良かつただけだろう。チトクはそう語る。

「だから僕、強くなりたいんです！ そうすれば姉ちゃんを守れるし、賞金稼ぎになれば都會で暮らすことだって出来るんです！」

そう思つてたんですけど、でも、僕じゃ無理なんですよね……」

チトクはがつくりと肩を落としていた。

無理ではないし、俺がお前の姉ちゃんを守つてやる。そうドラゴスも言つてやりたいが、どうすればいいのかわからなかつた。

やはりドスドルマを一発シメてやるしかないのだろうかとドラゴスは思つたが、領主の息子に對してそんなことをしたら余計に事態が悪化する恐れがあつた。個人的な恨みをぶつけそれを領民全てに関わる問題に發展させてしまつ訳にはいかない。ドラゴスには解決の糸口が掴めなかつた。

「ドスドルマに關しちゃ俺も參つてるぜ」

ベルゼルも沈痛な面持ちで言つた。

「いつの間に目を覚ましたんだ、ええと……た……たしか『2号』！」

「『2号』しか残つてねえじゃねえか！ それを言つなら『たかし2号』だろ！ いや俺は『ベルゼル』だが！ あーもうめんどくせえ、何でもいいよ！」

「2号はそう言つと再び真剣な顔付きになつた。

「……でな、ここには領主の城からそつ遠くもないし、ドスドルマの野郎に彼女を傷つけられたって奴も多いわけよ。ここ最近は特にひどい。でもぶん殴る訳にもいかないのは俺だつてわかつてるが、部下が悩んでるからには何とか助けてやりてえと思つてゐるわ」

2号はやれやれといった風にため息をついた。

「まあ、その部下とやらはお前を置いてみんな逃げたがな」

「なんだつて！？ そういうえば誰もいない！」

2号はあたりを見回して愕然とし、しばらくひづりした後に膝を落とし、地面に手をついた。

「なんてこつた……俺の人望はこんなものだったのか……いい年して何をやつていたんだ俺は……くそつ、俺はもう誰一人信用出来ねえ……」

すっかり落ち込んでしまつた2号に、ドラゴスは満面の薄っぺらい笑みを向けた。

「そんなことはないぞー！」

「えつ」

「えつ、ちょ……」

困惑するチトクに「いいから呑わせろ」と耳打ちした。  
「お、お前、そんなに俺のことを慕つてくれたのか……」  
2号は心を突き動かされたようだつた。

「当然だろ、お前は強いんだ。チトクも憧れるぞー！」  
ドラゴスはさりげなく持ちかけた。

「ところでさ、お前もさつきの話を聞いてたら？ お前を守つてくれた最も信頼出来る部下が悩んでるみたいだけど、まさか見捨てるなんてこと、ないよな？」

「はは！ そんなことある訳なかろうー。チトク、この2号……ベルゼルが！ お前の姉ちゃんを守つてやる！ お前も鍛えてやるー！」

安心しな！」

「はいっ！ ありうござります！」

「ま、部下を助けるのは当然さ。礼なんか必要ねえよ」

チトクはドラゴスに礼を言いながら何度も頭を下げた。その横で2号は誇らしげに何やら言つてゐるようだった。

無事チトクと2号の仲を取り持ち、調子に乗つて自慢話がくどくなってきた2号が帰つていったのは、もう日が傾いていた頃だつた。やはりここの地域もこの時間帯から急に冷え、肌寒い風が吹いた。強引だが一応は信頼関係を築くことが出来たので、これからは2号がチトクの「強さ」となつてくれるだろう。ドラゴスにあつさりやられたとはいへ、2号だつて強い。それに、同じ雑種同士なので戦い方を教えてもらえるはずだ。2号は馬鹿でも領も悪いので効率は悪いかもしねないが、面倒見の良さがきっとそれを補つてくれる。チトクの問題に対し、一応の解決策を見出せたことでドラゴスは安心した。しかし、完全な解決ではない。チトクの姉テナの心の傷はなかなか癒えないだろうし、なによりドスドルマの脅威が残り続けている。

2号の話の中に気になる点もあった。最近は端村の噂がよく囁かれるという。そのせいでドラゴスはここまで来ることになったのだが、それ以外の人物も噂されてることが気になつた。

美人のベラは当然のごとく知られている。そして異世界から来たリイラもそうだ。

その「異世界から来た」という部分は真相がわからないこととして語られていたが、「魔力がなくて従順。顔も悪くなく胸もそれなりにある」という情報が男たちの中に広まつてゐると言つ。

魔界基準からすれば噂の中の存在でもやはり人気なのはベラである。2号いわく「血が濃くてセクシーなのがそそる」らしい。

だが、リイラに対しても、「血が薄そう感じもたまらない。逆にね、逆に！」と2号は言い、主流ではないにしろニッチなニーズを確実に刺激するようだ。

ドスドスマが好みそなのは明らかにリイラのほうだ。むしろ、まさにリイラのような子を求めているようにも思える。

ドラゴスは不安になつた。端村にドスドスマが来たという話は聞いたことがないが、リイラのことを知つたらわざわざやつてくるかもしれない。何せリイラは魔力が弱いどころか、全くないのだ。この点に関してはこれほどドスドスマのニーズを満たす人材はない。自分に守れるのだろうか。そんな不安もある。いくら強くても、少し離れた地域であるというだけで、ドラゴスにはチトクや姉のテナをちゃんと守ることが出来ないのだ。取り巻く状況が変わればリイラだって守れないかもしない。現にすぐ元の世界へ返してやると言つておきながら、自分の都合が悪いせいで三年もリイラはこの世界にいる。自分の力を発揮すれば、必ずリイラを助けられるという自信はある。しかし、その環境が整わないのである。でもその宿命とも言える状況を自分は変えられない。

くそつ！

ドラゴスは逡巡するばかりであつた。

力の問題ではない。そこに足りないのは 決断だつた。

2号はもう帰つたが、ドラゴスは夕食に招かれていた。チトクはドラゴスの高速移動も知らないので泊まるといふが必要だと思つたらしく、気を利かせたのだ。

もちろんドラゴスは断つてさつと自宅に帰ることも出来たが、厚意を無碍にしたくないと姉のテナの傷を癒してやりたいというのがあり、ご馳走になることにした。2号にはそういう類のケアを期待出来ない分、それが自分の義務であるように感じた。

しかしテナとチトクは一人きりで暮らしていくらしく、あまり裕福でもないだろうからどれくらい厚意に甘えていいものか計りかねた。あまり負担をかけてしまつようなら幾ばくかの金銭を置いていくことも考えた。

テナは服屋で働き、その店舗の一階に住まわせてもらつてゐるという。店主は別に自宅を持つてゐるので、夜になれば店はテナとチトクしかおらず、まるで一軒家を持つてゐるような気分になるとチトクは語る。

しかし、労働自体に田を向けるとテナはただのお針子でしかなく、職場に住み込みで一日中針仕事をしてゐるのだ。チトクが明るく語るほど楽な生活ではないはずだ。

ドラゴスはやや緊張しながら、服屋に着いた。もつすっかり夜になつていた。

そこはリーゼの中心部で、大通りの末端から少し離れたところにぽつんと一階建ての店が立つていた。一階の一口には看板が掲げてある。外から見る限りではドラゴスの想像よりも立派な建物であった。

「ここです。もつ夜なんで僕たちしかいませんし、遠慮せずにどうぞ」

チトクに連れられて中に入ると、中も思つていたより広く、衣類が所狭しと並んでいた。店主ももう帰つたようで、誰もいなかつた。奥には階段があり、そこから一階へ行けるようだつた。

この様子だと一階も広いだろう。そこに一人で住んでいふとなると住居に関しては案外ゆとりのある暮らししなのかもしれない。ドラゴスは思つた。

「こっちです、ドラゴスさん」

やはり階段を登つて一階へ行くようで、登りきると扉があつた。その奥が居住空間となつてゐるのだろう。

ドラゴスはなるべく心を落ち着けるようにした。ここは下手なことをやってテナの心の傷を刺激するようなことがあつてはならない。

だから慎重に振舞わなくてはならないが、かといって壁を作つてもいけない。少しづつでいいから距離を縮め、テナを安心させてやる必要がある。

ドラゴスは唾を飲み込んでいた。やはり緊張してしまつていた。

「ただいまー」

「おかえりっ」

その明るい声は少し幼い感じがして、テナではなさそうだった。チトクの話だとテナは十九である。

中に入つてみると、広い居間の端で縫い物をしていた金髪の少女が一人立ち上がつた。年は十四、五に見える。いやもつと幼いかもしれない。やはりテナではないようだ。

そう思つてドラゴスが部屋を見回すと、恐らく個室へ通じているであろう扉がいくつかあつた。

テナは自室に閉じこもつてゐるのだろうか……

ドラゴスの想像だと薄幸の佳人といった感じの大人しい女性が扉の奥で陰鬱に針仕事をしている。

「姉ちゃん、お客さんだよっ」

だがチトクは明らかに目の前の少女に言つてゐる。

……あ、あれ？

「紹介するね。今日　」

「ストーップつ！　ちょい待つた！　いま当てるからー！」

少女はすばやくドラゴスに近寄り、角度を変えながら「うーん」と言つて一生懸命に観察した。

「ふむふむ。わかつちゃつた、わかつちゃつたよお姉さん。きみ、噂のドラゴスなんだね？」

ドラゴスの胸辺りまでしか背がない少女はほぼ真上を見上げるようにして、その青い目を畳ませてきた。

「あ、ああ」

やや狼狽氣味に答えると、にっこり笑つて言つた。

「よしきた！　今日はたんとお食べ！」

少女はガツツポーズをした後、居間の隅に床つて縫い物やら何やらを片付け始めた。

チトクのほうを見るとこいつしているだけで何の説明もない。

「えつと……テナ?」

四つん這いになつて道具類を仕舞つている少女は、背を向けたまま顔だけ振り向いて言った。

「そだよー

な、なんか想像してたのと違うー。

「おーしょ、片付け終わりーと

立ち上がるとドラゴスに近づき、手を差し出した。

「わたし、テナ。よろしくー」

テナは無邪気に笑う。

「お、おー、よろしくー」

完全にテナのペースに飲まれているのでドラゴスは握手をしたものの、これからどう振る舞えばいいのか全くわからなかつた。

握ったテナの手はとても小さかつた。白い腕もほっそりとしていて、肩回りも華奢だ。そもそも体が全体的に小さく、少女にしか見えない。

この少女が年上だと!?

しかし、チトクの実の姉ならばこいつた容姿でもおかしくはない。ちびっ子にしか見えないチトクだつて十六なのだ。

そうは思うが、この幼さはチトク以上だ。十九にもなつてせいぜい十四、五にしか見えないのだ。声も幼いし、何より顔が幼い。

テナは綺麗な金髪をショートにしていて、それが小さな顔をより小さく見せ、大きな碧眼とのバランスとも相まってかなりの童顔なのだ。

「姉ちゃん、今日ドラゴスさんはあのベルゼルさんに勝つたんだよ。それも余裕で!」

「ほほー、やるねきみ。どれどれ

テナは握手した手を離さないままに引き寄せ、左手の指先でドラ

「ゴスの腕の筋肉をすりつゝとなぞつていった。

「なるほどなるほど」

「一体何が「なるほど」なのか全くわからない。テナもわかつていないのかもしれない。」

今度はなぞつていた指先をドラゴスの顔に向けた。

「いいねいいね、目も『ズザンツ！』って感じだよ」

テナはまだ握つたままの手を自分の顔に近づけた。仰々しく手にキスでもするのかと思つたら、ペロリと舐めてから離した。

訳がわからぬ！

「ならば今日は肉料理だ！」

「どこに決定要因があつた！？」

「じゃ、すぐ買つてくるね！」

なぜか小躍りしそうなほど上機嫌なチトクが言った。

「お財布持つた？」

「持つた！」

チトクは小走りで出て行つた。

「きみ、いま流行だよー？」

テナは再びドラゴスと向き合つと嬉しそうに笑い、細くて器用そつな指でドラゴスの鼻先をちょこんと触ると左右にぐりぐりと押し始めた。

「こ、これと二人っきりだと！？」

ドラゴスはかつてないほどの強敵と対峙している気分になつていた。

そこでドリゴスは気付いた。ドスドルマがテナに目を付けたのは

「大人しそうだから」ではなく、「幼しそうだから」であったのだ。

そして解放された理由もよくわかる。

手に負えない！

ドラゴスはどう接すべきかわからずについた。ドラゴスには目の前にいるテナが幼い少女にしか思えないのに、テナのドラゴスへの接し方が年下の少年を扱うのと同じなのだ。

事実としてはドラゴスが年下なので間違つてはいないのだが、どうも違和感がある。

「なーんもない」の町じや最近は端村が一番の話題だよ。特にきみ有名人。えらいぞー」

「あ、ああ」

テナはまた、にっこり無邪気に笑うが、ドラゴスは全くペースが掴めない。

「そんなに緊張しなくてもいいんだよ?」

「えつ?」

テナの言ひ方は、まるで小さな子を諭すよつだつた。幼い声なのに妙に大人びている。

「きっとチトクにいろいろ聞かされると思つけど、それときみは関係ないよ」

関係ない。

ドラゴスの胸の中で、チクリと刺されるものがあった。

「で、でも」

「ドスドルマは本当に怖かつた……だから後ろを振り向けば確かにつらいよ。だけどね、田の前に楽しいことや面白いことがチラシと見えたなら、そんのはもう関係ない。ただ前に走りたいのさ。お姉さんは嬉しくなっちゃうからねつ!」

テナは頭から飛び込んでドラゴスに体当たりした。不意に胸の辺りに頭突きを食らい、ドラゴスはよろめくとともにテナを支えた。テナもドラゴスの体に腕を回して見上げた。

「だから今夜は……」

吸い込まれそうなほど青い目がドラゴスを捉える。

「宴じやーー」

勝利者の「」とく両腕を突き上げたテナは、居間の一角にある台所へ向かつた。そこで夕食の準備に取り掛かつたようだつた。

鼻歌が次第に大きくなつて声になる。

「にーくーにーくーにくにくにーくー」

「ドラゴスは終始啞然として見ていろしかなかつた。しかし、気分はすつきりとしていた。

……あれ？

元気をもらつたのはドラゴスのほうだつた。

それに気付き、ふう、と息を吐くともう何も気にする」とがなくなつた。自然と笑みがこぼれた。

「よつしゃ！ 僕は結構食うぞおー？」

「構うもんかっ！ どっからでもかかつてきな！」

挑発的な笑みを向けるテナの顔はやはり幼いが、不思議と姉のベラに通じるものがあつた。

やつぱり年上なんだな……

「はつ！ お姉さん飲んじゃうからねつ！」

「へつ！ ちびっ子のクセに…」

買出しのチトクは帰つてこないし、まだ何も始まつてはいない。

でも、気付けば二人してゲラゲラと笑つていた。

そしてしばらく時間が経つた。

ジャーキンをぐびぐびと飲んでテナの喉は大きく上下し、首筋に一筋の汗が這つ。

「つふう、お姉さんにやられじゃ足りないよー チトク、もつと買つてきなー！」

ドラゴスはテナに見えないよう、さつげなくお金を渡し、「いいからこれで」と言つて素面のチトクをこれで何度もかわからぬい買出しに行かせた。

食卓に並ぶのは肉料理と テロテロ と肉料理と酒、酒、酒だった。

テナは料理も器用にこなし、とても美味しかつた。こつてりとした料理ばかりだったが、ベラとは違う多彩な味付けがドラゴスを

飽きもない。テナも料理を褒められるのが嬉しくてもつと作りたがるので、ドラゴスはつい追加をお願いしてしまい、その度にチトクが買出しに走った。

今までリイラの纖細で奥深い味の料理が一番美味しいと思つていたが、テナの元気の出るこいつてりとした料理もそれと双璧を成すほどだった。

毎日テナとリイラに飯作つてもらえたならなあ……  
ついついそんなことを思つてしまふ。

子供みたいな容姿の割に、テナは大酒飲みだった。飲みながらでも追加の料理の手さばきは正確で、ついせつきまで料理を作つては飲んでの繰り返しだつた。その結果テナは相当な量を飲んでいる。テナいわく「普段は飲まないから今日はかなり酔つてる」らしく、さすがにもうだいぶ酔いが回つてきていて、目が据わつている。料理はほとんどなくなつていたが、ドラゴスは満足していたのでもう作らせなかつた。ちょっと危なつかしいというのもある。後は酒を飲むつもりだ。

一人が飲んでいるのは ジャーギン といつて、麦から作つた安価な酒である。微炭酸ですつきりとした味わいだ。

ドラゴスは先ほどまで食べるのが中心で、なおかつドラゴスも酒に強いので、そんなには酔つていなかつた。

それとは対照的に酔つ払い始めているテナは、なぜか精神年齢が幼くなつていいようだつた。酒をあおる姿は相変わらず似合わないが、次第に容姿の中身のギャップが薄れていつた。

「でね、そんな人ぐぎゅーつとして欲しいの。『ぎゅー』じゃないの、『ぐぎゅー』なの。わかる？」

そう話す姿はまさに思春期の女の子だつた。

「うんわかるわかる。だといいね」

適当に返事をしながらも、ドラゴスはこの場を心地よく思つていた。

皿に飯を食い、気の合つ人と飲んで淡く酔つ。そこに幸福を感じ

ない者はいないのだ。

追加の酒を買つてきたチトクが帰つてきてからばかりドラゴスも多く飲んだ。

テナが馬鹿を言えれば大いに笑い、自慢をすれば髪がぐしゃぐしゃになるほど頭をなでてやつた。乐しかった。

チトクも心から樂しんでいるようで、ドラゴスは本当に来て良かったと思つた。この姉弟をこれほど笑顔にして、自分も受け止め切れないほどに笑顔をもらつたのだ。

ありがとう。

誰に言つでもなく、そんな言葉が漏れる夜だつた。

騒がしい夜もいつしか静寂を取り戻していた。

寝ているのか起きているのかわからないが、とりあえず活動停止状態にあるテナを尻目に、ドラゴスとチトクは食器などを持ち付けていた。

「あ、それ僕やりますよ」

「いいつていいくて」

ドラゴスはほろ酔いなのに対し、チトクは素面だった。だがそれでもチトクは上機嫌で、一人の間に温度差が生まれることはなかつた。

「姉ちゃんがあんな甘えてるの初めて見ました」

チトクはどこか安心したような言い方だつた。

「酔うといつもあんな風になるんじやないのか？」

「少しくらいにはなりますが、あんな幼い感じにはなりませんよ。姉ちゃんはいつも必要以上に『お姉さん』のまなんです」

やはり容姿だけではなく、無理に背伸びしている部分もあるから違和感があつたんだろう。ドラゴスは思つた。

「僕たちに両親はいなくて、僕が物心ついた時から姉ちゃんは『お

姉さん』で、親代わりでした。だから姉ちゃんには少女時代がすっぽり抜けちゃってるんです。僕が強ければそつはならなかつたかもしませんが……」

暗い話であるがチトクには嬉しさが勝るよつで、微笑んだ。

「やっぱり姉ちゃんも強くて守ってくれる誰かに甘えたかつたと思うんです。知らないでしょが、姉ちゃんは噂の中のドラゴスさんに憧れてたんですよ？だからドラゴスさんをここに連れてきた時の姉ちゃんの嬉しそうな顔つたら……」

でも姉ちゃんに染み付いた『お姉さん』が、甘えることさせてくれなくて、酔っ払ってからよつやく甘えられるよつになつたんですね。きつと。

だから……今じゃドラゴスさんのことをお兄さんみたいに思つてゐるはずですよ」

確かに飲み始めた時は姉のよつな感覚だつたが、いつしか妹かなんかと話しているよつな気になつっていた。

テナのほうを見ると一応起きているよつで、田をつぶり頭をこくへりこくとさせながらも、「……ふすふす」と謎の言葉をつぶやいている。

ドラゴスに妹はいないが思つた。

仮に妹といつもののがこつこう感じなら……こてほしいな。

一通り片付けると、チトクは奥にあつた扉の一つを開けた。

「ここが寝室です。ドラゴスさんは手前の僕のベットを使ってください。僕と姉ちゃんは奥のベッドで寝ます。一人ともちびなんで平氣ですから」

「そうか、悪いな」

ドラゴスは素直に従つてベッドを占有させてもうひとつした。

テナはまだ座つたままで、声を掛けても「……焼き猫」という謎の返事があつただけだった。仕方ないので抱きかかえてベッドまで運ぶことにした。

「奥のでいいんだろ？」

「はい、すいません」

ドラゴスは身をかがめ、テナをそつとベッドに下ろした。しかし身を起こさうとする、テナがしがみついたままだった。

「ほら、寝るんだよ。だから離しな」

小さな声で諭すが、言つことを聞いてくれない。手で引き剥がそうとする、「……やあだ、やあだ」と駄々をこね、ドラゴスの服をこつそつ強く掴んだ。

「ごめんなさい」

チトクが謝りながら駆け寄ってきた。ビニにかしてくれのかと思いつドラゴスはほつとしたが、チトクはテナの寝るベッドを指差した。

「まだお兄さんに甘えたいみたいなので、やっぱりそつちのベッドで寝てください。」「ごめんなさい」

「ええ！？」

そうしてチトクはそれつきりで、当たり前のように自分のベッドで寝始めた。

しあうがないのでそのままテナの横に寝転んだ。離れようとしてみたら「……だあめ」とぐずり始めた。

これじゃ中身は八歳くらいだろ……

ドラゴスは八歳の妹を抱き寄せ、なだめようと努めた。

とはいって、体は十九歳の女性だった。テナは女性的な特徴が強く出た体ではないが、触れる感触には色気が余りある。

人を抱き枕かなんかだと想いやがつて……

困惑するドラゴスとは裏腹に、テナは安心するのだろうか。ぴつたりと体をつけてくる。

ドラゴスに顔をうずめようとし、首筋からは少し蒸れたテナの匂いがした。ちょうど鎖骨に当たる唇は柔らかく、吐息が熱い。そしてテナの癖なのか、時折少しだけ舐める。

胸なんかほとんどないように見えたのに、押し付けられるそれは弾力がある。腹部が呼吸に合わせて動くのがわかる。足は当然のよ

うにドラゴスに絡めている。内腿のふんわりとした肌触りとその奥にある火が対照的だつた。

ドラゴスはどうしたつて妙な心地になつてしまつ。しかしながらしてこの無駄に色気を発する妹を早く寝かしつけようとするため、ゆっくりと頭をなで始めた。するとテナの呼吸が穏やかになつていくだけでなく、ドラゴス自身も落ち着いていった。

妹にはこんな作用があるのか……

ドラゴスは眠つてしまつまで、ずっとテナの頭をなで続けた。

翌朝、テナは声を張り上げてドラゴスを起こした。

「へい起きなつ！ お姉さん朝ご飯たくさん作っちゃつたよ！」

ただ、中身は十九歳に戻つていた。といつてもやはり、テナは何かがおかしい十九歳であった。

ドラゴスは元気の出る朝食をたらふく食べさせもらつた。ドラゴスが美味しそうに食べるのをとろけそうな笑顔で眺めるテナと曰が合つと、どうしても食べ過ぎてしまうのだ。

昨日今日と食費に関してもドラゴスは多大な負担をかけてしまつた気がしたので、それなりの金額を渡そうとしたが、テナは受け取らなかつた。

「きみが食べるのを見たいだけなのさ！」

テナはそう言つた。ドラゴスが少し無理をして食べていても見透かされていて、「頑張つて食べるきみはかわいかったぞっ」とも言つた。

しかしこのままでは申し訳ないので、店にある服を買つことにした。あんまり熱心に選ぶとテナが今からドラゴス特注のを縫い始めかねないので、あまり関心のないような素振りで適当に選んだ。

それでもかなり喜んでくれて、テナはドラゴスの体のサイズを測つた。次に来た時のためだという。

いい値段で買つてやんなきやな。ドラゴスは思った。

ドラゴスはそこで帰ることにした。

別れ際、チトクは満面の笑みを浮かべ、ドラゴスに感謝を述べた。

テナは泣きじゃくっていた。

「……また来るんだよドラゴス！ でないとお姉さん泣いちゃうよ！」

「もう泣いてるだろ」

「うう……だつて……」

テナは姉から妹に変わっていた。

ドラゴスは別れの言葉を告げ、歩き始めた。

「また一緒に食べようねー！」

次第に遠ざかるドラゴスに対して、テナは人目もばからずに声を張り上げ、大きく手を振り続ける。

「また一緒に寝ようねー！」

ちゃんと覚えてんのかよ！

「またベッドで抱き合つ

「わかつたわかつた！」

慌てて遮った。

「絶対に行くよ！ すぐに行くよ！」

そう誓い、ドラゴスはテナと別れたのだった。

夕暮れ時、ドラゴスは自室でぼんやりしていた。周囲は静かなのに、テナとの騒がしく過ぎした時の空気が頭の中でいつまでも巡っているように感じた。

何だか作り物にも思えた。しかし、記憶を辿ればあの時間は確かに存在していたし、実感もある。目をつぶるとテナとのやり取りについて思い出し笑いをしてしまう。

ドラゴスは昼ごろに帰つてからずつとその調子だった。ぼけっとしながら楽しい時間を思い出しては一人でニヤニヤしているのだ。これじゃダメだ！

ドラゴスは思い立ち、家を出た。向かつた先は宿屋だった。その日はリイラやトルガと一緒に夕飯を食べる予定だつた。

村にはいくつも宿屋があるが、トルガはリイラの働く宿屋に泊まつていた。ドラゴスが強引にそうさせたのだ。それも一番高い部屋を勝手に予約しておいた。トルガ一人なのに四人部屋であつた。

トルガはそれでも結構金があったので問題はなかつた。それに、ドラゴスも単に嫌がらせのつもりでそうした訳ではない。八割方は嫌がらせであつたが、リイラや宿屋の主人マルクのために大口の客、それも大して気を使わなくてもいい客を用意したつもりであつた。そして大きな部屋の方がトルガの部屋で飲み食いしやすいというのもあつた。

そのおかげでトルガの部屋では連日誰かがやつてきて小規模な宴が催されていた。そこで出される料理も宿泊費に含まれてしまうのでドラゴスの計らいは多大な不利益であつたが、トルガも楽しんで

いた。

今日のその宴の一つで、ドラゴスとトルガ、そしてリイラで集まるのだ。

リイラはいつも宿屋にいるので特に呼ぶ必要はなかつたが、ドラゴスは連日の労をねぎらう意味もあつて改めて招待した。その時の料理を作るのも結局リイラで、特別何かが変わる訳ではないが、リイラが喜んでいたのでドラゴスはそうして良かつたと思つた。

ドラゴスが宿屋に着くと、トルガは外出していた。集まるのは夜だつたので、まだ早かつたのだ。

「じゃあ部屋で待つよ

ドラゴスがそう言つと、リイラは止めた。

「だ、駄目ですよ勝手に入つたら」

「いひつていひつて、トルガだし。それにお前は掃除に入つたりしてるんだろう?」

「そりや、まあ……」

「なら俺も臨時お手伝いさんつてことで

結局リイラはドラゴスの押しに勝てず、トルガの部屋に入れた。使つていなべッドが三つもあるので、ドラゴスはその一つに寝転んだ。

「やっぱ広いなー

「四人部屋ですからね……」

早めに来てみたはいいが、別にここに来てもすることななかつた。

「……暇だ。リイラ、今なんか仕事あんの?」

「急ぎの用はないです」

「じゃあこっち来て話そつよ」

起き上がつたドラゴスは隣をぽんと叩いた。

「は、はいっ」

リイラは素直にドラゴスの横に腰掛けたが、すぐ向かいのベッドに座りなおした。顔が赤く、落ち着きがなくなつていた。

リイラのそんな様子を見てみるとドラゴスもざわざわしてしま

うのだった。それに、改めて「話そう」なんて言つてしまつたせいで、かえつて話しにくくなつていた。

向かい合うリイラの姿は三年前とは違つた。髪型は変えていないのに、地味だつた黒髪が今は艶<sup>つや</sup>を持ち、一つの華となつた。背も伸びている。胸もそこそこ大きくなり、体は全体的に女性的な特徴が出ている。そして何より顔に子供っぽさが抜け始め、そのかわり「女」が時折見え隠れする。ドラゴスと同じく、満十七歳であり、今年で十八歳になる。

しかし年齢を聞かれたらリイラは「十七」と答えるが、ドラゴスは「十八」と答えるだろう。魔界では数え年が一般的なのだ。ところがリイラはそれをまだ知らず、自分はドラゴスの一歳下だと思っている。そしてドラゴスを頼りになる年上として、精神的な支えにしている。

ドラゴスのほうも自分が年上だと思つていて、リイラに頼りにされているのを感じている。それどころか、いつか騎士のように救ってくれる憧れの存在としてドラゴスを見ているのもよくわかつていた。

でも、現実は違う。ドラゴスは思ひのだった。

あれほど格好付けて救つてやると言つたのに、救えずにするのだ。リイラにとつては「救つてやる」と言われることがそれ自体が救いだつたのは確かだが、ドラゴスは本気で救うつもりだった。それなのに、まだ冒険の旅にも出でていない。歯痒かった。

ドラゴスが鍛えて強くなるほど、リイラも喜び、ドラゴスを尊敬した。ベラが留守の間はショットチャウドラゴスの家に来て、家事をしてくれた。料理も舌に味が染みるほど食べさせてもらつた。宿屋に行けばいつだつて献身的に世話をしてくれた。

それなのに！

変えられない。力があつても変えられないのだ。

ダグルが死んだからつて恩義が消える訳じやない。一緒に育つた大切な姉に全てを押し付けることも出来やしない。結果、あの家か

ら動けない。

自分は無力じゃない。必ず救つてみせる。

田の前のリイラにそう言いたいのだが、虚しく響くだけのよくな気がして、ずっと出来ずにいる。

三年。

リイラには希望の三年だったかもしない。だが、ドラゴスには屈辱の三年であった。

「ダ、ドラゴスさんっ」

リイラは少し涙ぐんでいるように見えた。

「あのっ、え、遠慮なく言つてくださいっ！」

やはり見透かされているのだろうか。ドラゴスの自責の念がいつも強くなる。

「何が」

しかしそれをリイラに言つても仕がない。リイラが自己嫌悪になるだけだ。

「ほ、ほら、そんな険しい顔してるじゃないですか。やつぱり私失礼なことしたんですか？ あつ、の、飲み物ですか？ 「ごめんなさいっ、お茶も出せずに座っちゃうなんて失礼ですよね、い、今持つてきます！」

なんだ……

慌てて立ち上がるつとあるリイラを、ドラゴスは肩を押さえて止めた。

「そんなんじゃなじって。けよつと考え事をしてただけ。お茶もいらないから」「ここにしてくれよ」

「は、はいっ」

落ち着いて説得をしたのだが、涙田であたふたするリイラと見つめ合つてしまつとドラゴスも動搖し始めた。

リイラの狼狽する姿には匂い立つような魅力があったのだ。その

せいでいつもドラゴスは鼓動が高鳴り、息苦しくなる。もつとも、ドラゴス自身はそれを異世界人のリイラ特有の毒かなんかだと思つていた。

くそつ！ 今日は毒が強いな。心肺機能への負担に加え、胸部中央に違和感が……

ドラゴスはこの得体の知れない毒を警戒はしていたが、死にはしないと思っていた。むしろ毒をもらつた後は体の底から力が湧き上がるようを感じるので、もつと欲しいと思つた。一種の中毒性を持つているのだ。そのせいでいつもリイラに会いたくてたまらなくなり、三日も会わないと胸が苦しくなるのが弊害である。などとドラゴスは考えていた。

さすがにドラゴスもリイラに女性的な魅力があることくらいわかつっていた。三年も一緒にいればあの大きな胸が何かの拍子に軽く触れてしまふこともよくあり、その都度どきつとした。しかし、そういった魅力とは別の、離れている時にこそ強くなる胸の苦しみが何なのか、微塵もわかつていなかつたのだ。

ドラゴスは既にリイラの発する毒にやられているが、もう少し毒を欲しくなつた。

「……さやか」

「えー？ ちょっと、やめてくださいよ！」

リイラは猛烈な勢いで恥らい出す。「さやか」という聞きなれない響きの言葉はリイラが元の世界にいた時の名前だそうで、それを言うとリイラはいつも赤くなる。リイラいわく、こっちの世界での名前を呼ばれるとともに変な感じがするらしい。それに「経験がないことだから」とも言つていた。ドラゴスにはリイラの言う「経験」の意味がわからなかつたし、それを言うときに殊更消え入りそうな声になつた理由もわからない。しかし、からかわれるリイラがもじもじする姿を無性に見たくなり、たまに「さやか」と呼んでみるのだ。

リイラが「さやか」と名乗らないのはマルクへの恩もあつた。リ

イラがこちらの世界へ来た当初は「さやか」と名乗ったが、ただでさえ浮いた存在であるから変わった名前でせらりと浮いてしまうとマルクは考へ、「リイラ」という魔界で違和感のない名を『』えたのだった。リイラはその名を大事にしているのだ。

「さやか、何をやめるんだよ、さやか」

「あのつ……な、名前……や、たや……だ、だめつ、ダメですつ…」

リイラはますます恥ずかしがり、おかしくなつてしまいそうだった。

しかしドラゴスも毒をもうこすぎていた。余裕そうに繕っているが、実際は動悸、息切れ、発熱を必死に隠している。今日はせらりと胸の奥が真空になるような違和感もある。

ぐつ、体が壊れるかもしれないっ！　この辺でやめとかなくては

「はは、冗談だよ。リイラ

「やめてくださいよ、もう」

リイラは頬を真っ赤に染めながら睨むという妙な表情になつた。ドラゴスは微笑んでリイラの頭をすつとなでる。リイラは何も言わず、今度は満足そうに手を細めた。ドラゴスも特に何か言つ詰ではない。三年の月日は言葉を超えたところにあつた。

心地良い気分になつたドラゴスはリイラに告げた。

「もうそろそろ仕事しなきゃならないんだろ？　行つていいよ。俺はしづらびじる寝してるからさ」

「じゃあこののために一生懸命料理しておまか

リイラはやる気に満ちた笑みを見せる。

「期待してるよ。じゃ、行つてらっしゃい」

「行つてきます」

上機嫌のリイラが部屋から出て行くを見届け、じりじりと仰向けになつた。

ああ、しつくづくる……

結局ここに来ても寝転んで一いや一いやして居るのだが、自分の部屋

にいた時と心持ちは随分と違っていた。

翌日、ドラゴスはまたもや暇であった。昼間なのにいつまでもベッドに寝転がり、することと言えば昨晩の宴を思い出してニヤニヤするくらいであつた。

今日は宿屋に行けない。大人数の客が来たとかで、トルガは一人部屋に移ってしまった。ここ数日は村に泊まる人が何故か多く、マルクの宿屋も急に満室になってしまったのでリイラも忙しいという。

……困ったな。

この二年間いつもそうであったが、リイラが忙しくなると途端に退屈を感じ始めてしまうドラゴスであった。

結局一日中だらだらと無為な時間を過ごした。もう夕食の時間だった。

夕飯はベラが作った、肉で肉を食うような献立だった。

ベラの料理が嫌いな訳ではない。濃いめで大雑把な味付けで単調であることは否めないが、その味で育つたドラゴスは、むしろ好きだった。

だが最近のドラゴスには少々つらいものがある。

それはここのこところベラが数が用ごとに家を空け、だいたい年の半分くらいしか家にいないことも大きい。ドラゴスはベラがいない間は自炊していたのだが、料理の得意なリイラに食事の面倒を見てもらうことも多かつた。それどころか家事もやってもらっていた。しかしドラゴスと姉の間にあまり会話がないのはそういう理由ではなかつた。この家では肉をがつついでいる時に会話がなくなるのは必然であったが、二人とも概ね食べ終えつつあるので、この場合は違つた。

二人とも、自分たちの今後について考えてしまっていたのだ。

中途半端な現状をどうするか。それでも今を維持するのか。

互いに会話がないことへの気まずさはあった。しかし、どちらも言つべき言葉が見つからない。いや、決められない。二人の頭の中に渦巻くのは言いたくない言葉ばかりだった。

より深刻に考えていたのはベラのほうで、先に口を開いた。

「トルガのところで食べなくてよかつたの？」

「それは昨日だつたし、今日はうちに食いたかつたからか」

ベラは迷つていた。何を言つべきか、何を言わざるべきかを。

「よくリイラにご飯作らせてるんだってね」

「あいつの料理すごく美味しいんだぜ。この村に来てからどんどん料理上手くなつて今じゃ姉ちゃんとは月とすっぽんだよー。あ、『め

……』

殴られると思ったのだろう。ドラゴスは身を固くした。しかし、ベラは何もしなかった。

ベラの方は全く違うことを考えていたのだった。

リイラのことをドラゴスは楽しそうに話す。ベラはそれを見て思つたのだ。

こいつがチビだつた頃とはもう違つんだ。いつまでも可愛いがつて手元に置いておくような小さな弟じやない。生まれだつて育ちだつて家だつて関係ない。……一人の男なんだ。

ベラは決めた。

「私ね、店をたたもうと思つたんだ」

「えつ？」

ベラの突然の申し出にドラゴスは驚いた。

「そ、それじやあ生活が」

「店をなくす訳じやないわよ。ただ不定期にして、行商一本にしほるの。その方が稼ぎもいいし」

「じゃあ店番は……」

「あなたはもう用なしつてこと。私も滅多に帰らないと思つし、悪いけどあなたはあんたでなんとかしてちょうどいい」

急に突き放され、ドラゴスはまだベラの言葉の真意をつかめずに

いた。

「でも俺はここで」

「やめなさい！」

ベラの剣幕が静寂を呼んだ。

「……いい加減にしなさいよ。まだ恩義とか言いつもり？　ふざけないで！　父さんが今の状況を望んだと思ってるの？」

「だつて大事な家だろ！」

ドラゴスも熱くなつた。

「馬鹿野郎っ！」

「なんだよ！　何がいけないっていうんだよ…」

「確かに家は大事だけど、でも、あんたが家に縛られてどうする…大事なのはあんたなんだよ…」

「でも姉ちゃんが」

「自分の問題も片付けられない奴が人のことを言うな…」

ドラゴスは何も言えなかつた。

何も変えられない。

その悔しさが込み上げる。

「あんたは姉に全部押し付けるように感じてるのかもしれないけど、私は望んでやるのよ。私からすれば行商のほうが楽なの。それくらいあんたもわかってるでしょ」

ドラゴスは野に放り出されたような感覚になり、困惑した。

「じゃあどうすれば……」

「馬鹿野郎っ！」

ドラゴスの頬をベラが思い切り引つ叩いた。

「そんなこと人に聞いてどうする！　答えなんかとつぶに出でるでしょう！」

ドラゴスの胸の中には明確な答えが、ずっと前からあつたのだ。固く、搖ぎないはずだった。しかし、まだこの場でもその答えを出すことを躊躇した。

「馬鹿野郎っ！」

再びベラが手を上げた。

「あんたの人生の主人公は誰？　あんたの人生の主人公は……あんたしかいないのよ！」

生きなさい！　自分の人生を！」

ドラゴスがうまく言葉を返せないでいると、ベラはさらに背中を押した。

「悩む暇があつたら進め！　我が弟よ！」

涙が込み上げるのを感じたドラゴスはぐつとこらえて立ち上がり、小さな声でありがとう、と言つてその場を離れた。

ドラゴスは外へ出ていった。

暗闇の中を歩き始め、つぶやいた。

「……俺の人生の主人公は……俺だ」

もう一度つぶやいた。

「……主人公は、俺だ」

心に小さく火が灯るのを感じた。

やがてそれは炎となり、我が身を焼かんとばかりに燃え盛る。射抜くような目で、暗闇を見据えた。

闇の向こうも見える気がした。

ドラゴスは叫んだ。

「俺は決めた！　俺の人生の主人公は、俺だ！」

そして走りだした。

ドラゴスは村は宿屋へ向かい飛びながら走つていたが、トルガの部屋にはもう泊まれないことに気が付いた。

じゃアリイラの部屋で……

そう考えたが、リイラの部屋にだつてベッドは一つしかない。思えばリイラの宿屋に泊まつたこともリイラを自宅に泊めたことも数え切れないくらいあるが、一つのベッドで寝たことはない。そ

んな経験はテナとしたことがあるだけだつた。

床で寝かせてもらうことも考えたが、テナを抱いて寝るのは心地良かつたのだから、リイラでそれをやつたらもっと心地良いかもしれないと思つた。

そんなことを考えていると、この三年間でいくつ普通に感じてきたリイラの温もりが特別なもののように思えた。

触れたい。なでたい。……抱きしめたい！

それも一つの答えとして、ドラゴスの心が出したものだった。

「……リイラ！」

ドラゴスは大きく飛んだ。

宿屋までもうじぱらぐといつといひで、不意に視界に入ったのはトルガだった。

「ドラゴス！」

差し迫つた様子だった。

「ちょうどよかつた。たつた今リイラが連れて行かれた！ 他の宿泊客はドスドルマの従者だつたんだ！」

一体何が起こつたんだ！？ 連れて行かれた？ ドスドルマ？ くそつ！ 何ということだ。ちゃんと警告しておけば良かった。まだ状況が掴めないが、ドラゴスはまず悔いた。

「それで急にいなくなつてマルクさんに宛てた手紙だけが置いてあつたんだ」

「そこには何て書いてあつたんだ」

「ドスドルマの城で雇つてもうつことになつたから、毎月金を送る」と書いてあつたんだ。あの野郎、事情を調べてリイラの弱みに付け込んで説得しやがつた

「くそつ！」

リイラを養つた三年分の金額となれば相当だつ。マルクに請求するつもりなんかなくとも、リイラにとつては負い目だつたのは確

かだ。

「ドスドルマの噂は昔から聞いていたが、城に雇い入れるなんて聞いたことがない。もしかすると強引に娶るつもりかもしれない」リイラはドスドルマの理想に近いだけに、それも十分にあり得る。「ど、どうすればいいんだ!?」

「いま宿屋では従者たちがマルクさんを説得している。ドスドルマはリイラを連れて馬車でさっさと帰りやがった。もう俺が走っても間に合わない。ドラゴス、リイラを連れ戻せるのはお前だけだ!」「わかった!」

「最後に一つ、マルクさんから伝言だ。

『娘』を、救つてくれ!

「そのクエスト、乗るぜ!」

「奴は街道を東に向かつてゐる。急げ! 僕もすぐに行く!」「おう!」

ドラゴスは全速力で走り、夜を切り裂くように飛んだ。

ゴトゴトゴトゴト……

単調な音の連續。暗闇の中。

リイラは一人乗りの馬車に揺られていた。それは個室になつていて、窓の外を見ても暗闇しか見えない。

「うふう……いいねいいね、たまらないね……その顔。こっち向いて……目線は下に……今度は顎上げて……はい横向いて……俯いて……首を振つて……」

リイラは言われるがままに動いた。

「あっ、ああ……もうじちやいそうだよぼくは……んん……んん……じゅうじゅん。従順! ね? ね? ね!」「は、はい……」

リイラは困惑していた。隣に座る男はドスドルマだった。

背が低く小太りの中年だ。三十と言つていたが、それ以上に見える。伸びっぱなしの長髪をたっぷりの油で後ろに撫でつけ、きつい香りを漂わせる。眼鏡は指紋で汚れている。

「りつちゃん不安そうな顔だねえ……ぼくは悪によつにしないから……ぎひ」

ドスドルマは顎を首に埋め、非対称に笑つた。

「大丈夫……お金もちゃんと払つよ……毎月金貨百枚……銀貨のほうがいいかい？ なら一万枚……。

でも不安なんだろ？ でやは！ 銅貨百万枚に崩して支払われるんじゃないかって！ でやは！ でやは！ ぎひ、ぎひ……びゅんつ！」

そう言つて痺れたように跳ね上がるドスドルマを見てリイラはいつそう不安になるのだった。

だが、毎月金貨百枚は大金だ。仮にどこかで一生懸命に働いても給料はせいぜい金貨二十枚程度だ。毎月百枚ももらえば、マルクが今まで負担した分のお金は返せるし、ドラゴスが冒険に出るための資金を自分が援助することも出来る。もし自分だけの力で元の世界へ戻らなくちゃならなくなつても、数年で十分な資金を得られるだろ？ そう考えるとリイラは自分が稼ぐ他にないと思つた。

「まだ心配してるのかい？ 約束したでしょ……りつちゃんにはお掃除とかお洗濯とかお料理とかをやつてもらうんだよ……それだけ。簡単なお仕事だよ……ぎひ……そういうの得意でしょ？」

「ええ、まあ……」

「ぎひ……ぎひひ……お掃除が得意なりつちゃんにねえ……ぼくの大切なチツチチツチてるんてるんしてきらうんだ……てるんてるんしてもらうんだ……あびゅんつ！」

ドスドルマは再び跳ね上がる。

本当に家事の手伝いで金貨百枚の待遇だとしても、リイラはこの男の屋敷で生活しなければならないのだ。それを想像すると、怖かつた。

「りつちゃん……りつちゃん……やや、りつたん……りつたん？」

「りつたん！ ね！ ね！ ん！」

「はい……『りつたん』でいいです……」

ドスドルマは座っていた位置を大きくずらしてリイラに寄った。リイラも横にすれたが、壁があり、逃げ場はない。ドスドルマは自分の体と壁でリイラを挟み、髪の毛を嗅いだ。

「りつたん……りつたん……りつたん……ああ、うああ……いい匂い、いい匂い……もれる、もれちゃう……うつ……びゅんっ！ あうああ……ああ……肌……やわらかい……指がとけるよ……じゅわあ……じゅわあ……胸、胸……おっぱい……りつぱい？ りつぱい、りつぱい！ へにゅうつて、へにゅうつて……あ、あ、あびゅんっつ！」

ドスドルマは不可思議な挙動を繰り返す。リイラは怯えていた。怖い。田の前の男が怖い。我慢していたがやはり、つらかった。逃げたい。

でも自分はもう選んでしまったから、逃げられない。でもどうしようもなく、つらい。

ああ、三年前と一緒に。今度こそ、「物」になろう。こんな耐えられない……

リイラは人であることを諦めた。

「うう……りつたん……笑って……笑って？ 笑って？」

もうどうにでもなればいい。言われる通りに笑ってみようと思つた。

私はただの人形……

しかし、笑顔の作り方がわからない。

自分はこの村で、たくさん笑つた気がするのに。

そうだ、自然に笑つてたんだ。そしてほとんどの笑顔はあの人人がくれた。

笑おうとしているのに、涙が溢れた。止めようと思えば思つほど、

あの人顔が思い浮かんだ。

なのに、なのに私は、あの人があれくれた笑顔をなくしてしまった！

探してももう見当たらぬ。出でるのはひたすら涙だった。

「……とめてください！」「めんなさい……私やつぱり、行きたくないんです！」

「物」になつたつもりだつたのに、気がつけば叫んでいた。抑えられなかつた。自分の気持ちが涙とともに溢れるのだ。

「……会いたい！ ドラゴスさんに会いたい！」

笑顔をくれるあの人があ、好きで好きでたまらないのだ。また笑顔をもらいたいのだ。

「ここで降ろしてください！」

「ほうお？ だめだよ……約束したもんね」

ドスドルマはリイラの涙を指ですくい、舐めた。

扉を開けようとするが、外から鍵がかかっていて開かない。

「ぎひ……そのための馬車だから、ね」

ドスドルマは非対称に笑う。

「……会いたいんです！ 大好きな人に会いたいんです！」

泣き叫んでもドスドルマは意に介さない。こんな状況には慣れているのだろう。

しかし、馬車は止まつた。

「ね、ねえ！ なんで今日は止めちゃうの！」

ドスドルマが小窓から御者に怒鳴るが、その直後に御者の姿が消えた。そして馬車の上半分が吹き飛んだ。

咄嗟に顔を伏せ目をつぶつた。恐る恐る目を開けて前を見ると、粉々になつた馬車の破片が舞つていた。そして、その中から手が差し出された。

「あつ。

よく知る手だつた。迷わず握り締めた。

「リイラ！」

「ドラゴスさん！」

リイラが飛びつくと、ドラゴスは抱きかかえて馬車の外に連れ出した。

「た」

「助ける。当然だろ？」

ドラゴスはリイラをきつく抱きしめた。リイラには抱きしめるドラゴスの腕が、体の芯まで届きそうに感じた。

暖かい。

「リイラ、大丈夫か？」

「はい」

今度はさつきとは違つ、暖かい涙がこぼれた。

「ならよかつた……」

ドラゴスはリイラの頭をすつとなで、微笑んだ。自然とリイラも笑顔をもらつていた。

「これで一件落着……とすれば丸く収まるかもしれないんだけどなあ……」

ドラゴスは腕を組み、眉間に皺を寄せ目をつぶり、悩んでいる様子だった。

「んん～あ～、駄目だ！ やつぱ我慢出来ない！」

そう言つて壊れた馬車の中に隠れているドスドルマに向かつた。

「ドスドルマ！ 死なねえ程度にぶっ殺す！」

「……ぼく知らないぼく知らないぼく知らない……」

ドラゴスはドスドルマを引きずり出すなり、すぐさま顔を殴つた。

「びゅんこ！」

奇声を上げながらドスドルマは転がつた。

「だ、大丈夫なんですか？」

「大丈夫。ちゃんと手加減してるよ」

ドラゴスは心配するリイラをなだめる。

「もう一発！」

「てぶるつ！」

今度は蹴り飛ばした。

「これはテナの分！」

胸倉を掴み持ち上げ、みぞおちを殴った。

卷之三

ヒストリヤは大きく笛に浮いた

そしてこれは……！」口を濁かせた分だ！」

「…………はそん時ふと 猛烈な二

おらおらおらおらおらおらおらおら

卷之三

卷之三

卷之三

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ଓ ମାନ୍ୟମାନ୍ୟ

「さうだよ！」

アーヴィングの「街頭の女」が、アーヴィングの「街頭の女」

ひ  
て  
い  
た。

「大丈夫……なんですよね？」

「ああ大丈夫。命に別状はない。ちよつと懲らしめただけさ」

ドラゴスはそうは言ふが、リイテにはどう見てもやりすぎている  
ように思えた。ドラゴスもちょっと不安そうにしているが、後で魔  
力かなんかで治すのかもしない。

ドラゴスはリイラを気遣つた。

確かに夜風は肌寒いのでリイラがこくりと頷くと、肩に手を添え、壁壊れた馬車の中に座らせた。立派な椅子なので座り心地は良く、壁

下半分は残してるのでそれなりに風は防げた。ドラゴスはそこで改まつた真剣な表情になつた。

射抜くような目。

リイラは思つた。

「あの時の『権利』、覚えてるか？」

「……はい」

リイラは思い出す。三年前のある日の約束。

「」の身一つしかない自分はドラゴスのためなら何でも働いてみせる。」の体一つで、恩を返す約束。それを実行させる権利。

リイラはあの日から生きるのが楽しくなったのだ。元の世界にいた時でも「生きる喜び」なんていうのは感じたことがなかったのに、それをドラゴスは毎日『えてくれた。なのに何の見返りも求めない。ただもらつてばかりだつた。

だから今でも恩を返したいと思つている。ドラゴスの持つ権利は消えではない。

「今使つてもいいか？」

「ええ、何なりと」

「じゃあ……」

少し間を置き、ドラゴスは意を決したように言つた。

「この我のものとなれ！」

「え？」

ドラゴスは少し恥ずかしそうになつてすぐに言い直した。

「その……つまり……お前が欲しい！　お前が必要なんだ！」

よくわからないが、リイラはこれほど言われて嬉しい言葉は初めてだつた。

「……体で払わせる権利つて言つただろ？」

「ん？」

「だから……や、今から体で払つてくれよ……お前の体が欲しいんだ」

「そんな、直接的な！」

「い、今ですかっ！？」

「ああ今すぐ」

リイラは体が急激に熱くなり、胸が高鳴るのを感じた。三年も一緒にいたが、ドラゴスがこんなに大胆に迫つてくることはなかつたのだ。頼れる年上だがそういうことに関して、ドラゴスはまだ「恋」

なんてちつとも理解していない、ちつと脳の苦しみを「毒」だなんて思うよつな子供だと思っていた。

「い、いりで……？」

「いり？ ……まあそういうことになるな。そんでこれからもこつも何度も！」

ドリゴスの眼差しにも熱がこもっていた。

「やつぱりだめか？」

少し残念そうな顔を見せた。

「だ、だ、駄目じゃないですっ！ ど、ビツすればいいかよくわかんないですけど、ズビズビドーラゴスやんとなら本望ですし……わわわわわ私も頑張つてみますっ！」

「や、そつか！」

ドリゴスは子供のように喜び、リイラを抱きしめた。体の奥に火がつくのを感じた。

「おーい！」

トルガの声だった。

「おー、ちゅうどいことになりました！」

「ちゅ、ちゅうどいい！？」

ドリゴスは馬で駆けつけたトルガにズンドルマを治すよつこいつた。

「お、あいドリゴス、お前……」

「これ一応生きてる……よな？」

「死にはしないだらうが、こんな大怪我は止血だけじゃどうりかしきつもないぜ」

「……てことは？」

「治ののに大分かかるだらうし、腕のいい奴に治してもらわないと歩けるようになるかもわからないぜ？」

「うわあ……」

やはりやりすぎであった。

「それよりお前、これがどういうことになるかわかつてゐのか？」

「ああ。その点は問題ない。俺、もう決めたんだ  
ドラゴスは自信を持つて答えていた。

「やつとか……リイラは？」

「リイラも承諾した」

「そうか、なら急げ。じつかあてはあるんだろ？　ここは俺が何と  
かしとく」

「悪いな」

「貸しだぜ？」

ドラゴスはリイラのもとに駆け寄った。

「急ぐぞ！」

「急ぐんですか！？」

「とにかく早いほうがいいんだ！」

ドラゴスはリイラを抱いた。

「トルガ、マルクさんに伝言頼む！」

『娘』を救つた報酬として『娘』はもうつた…

「わかった！　じゃあ近いうち ザッザル で会おう！」

「おう！」

トルガと急ぎの会話を交わしたのち、ドラゴスはリイラを抱きか  
かえたまま走り出して一步ごとに飛んだ。

リイラは話についていけなかつた。いま何をしているのかもわから  
らない。

飛びながら走るドラゴスに抱えられながら、リイラは質問を投げ  
かけた。

「む、村に戻らなくていいんですか？」

「ああ。むしろもつ戻れないよ。領主の息子を思いつきりぶん殴つ  
たんだから」

「じゃあどうしてわざわざそんなことしたんですかー？」

「お前、泣いてたろ？　理由はそれで十分だよ」

ドラゴスのしてしまつたことは馬鹿なことであるのに、やつは言わ  
れてしまつと嬉しさが込み上げる。

「……」「めんなさい。私のせいで村に帰れなくなっちゃうなんて…でもこれからどうするんですか？」

「冒険だよ。冒険が始まるんだ！」

ドラゴスの顔は晴れやかだった。

「いつかは出るつもりだった。お前に託されたクエストもある」

「覚えてくれてたんですねか？」

「当たり前だろ。必ずお前を元の世界に戻してやるさー。その冒険に出るのが今なんだよ！俺はもう決めたんだー！」

ふと、一つの疑問が浮かんだ。

「私は……これからどうなるんですか？」

「ん？ 何言つてんだ一緒に来るんだろう」

「えっ」

「おじもつ忘れたのかよ。リイラ、お前は俺のものになったんだ。お前の体も俺のものだ。だからいま持ち歩いてるんだな」

そ、そういう意味だったのか！ まあ、そうだよね、ドラゴスさんだもの。

……でも、私の体がドラゴスさんのものなら、これからそういう機会もひょっとしたら……

「あれ？ なんか体が熱くなってるぞ？ 嫌なのか？」

「い、嫌じゃないですっ！ ただ……」

「確かに冒険は危険だよ。でも、俺が守つてやるから安心しな。まあ、それに嫌つて言つてももう離さないぜ？ いっぱい料理作ってくれよ。そんで一人でいろいろなところに行けりゃー」

「……は、はいっ」

冒険の始まりがあまりに唐突で、リイラは驚いた。しかし、いずれは旅立たねばならないと思っていたのですぐに心は決まった。村のみんなやマルクに別れを告げられないのが残念だが仕方ない。今しかないのだ。今こそ旅立ちの時なのだ。

「覚えてますか？ 出会った日のこと」

「覚えてる。何度も思い出してる」

「あの時もこうしてもらつて……」

「あの時より重いけどな」

「『』ごめんなさい！」

「謝ることないよ。あの時より今の体のほうが、なんていうかその大人っぽくて……魅力があるよ」

「そ、そうですか？」

「え、ああ間違いない……きっと……たぶん」

「ふふ、ありがとうございます。……あ、あの、これからもまたこうしてくれますか？」

「もちろん。きっとそれもあの日から決まってたんだ。こうやって冒険に出ることも全て。なのに俺は、何も出来ずにいた」

「そんなことないです。私が何も出来ないせいです……」

「じゃあ一人とも駄目だつたってことだ」

ドラゴスの闇を見据える眼差しに力がこもる。

「でもこれからは違う。俺はここで俺の人生の主人公になつた！これから俺は自分の決断で、自分の人生を生きる！ それはリイラも同じだ」

「……はい」

リイラも自分の人生の主人公になろうと、決めた。

「そんで二人で！ 僕とお前の物語を生きるんだ！ 一緒に生きよう！ 二人の人生を！」

「はいっ！」

リイラを抱きかかえ、ドラゴスは暗闇の中を進んでゆく。前もろくに見えず危険だ。

吹き付ける風も冷たい。

この先のこともわからない。

しかし、それでも突き進んでゆくのだ。

彼は、自らの人生の主人公となつたのだから。



第一章 旅立ち 2（後書き）

ドラゴスクエスト 第一章 完  
第三章へ続く……

## 第三章 山麓の村 1（前書き）

ヒロインの名前を「リイラ」、主人公の姉の名前を「ベラ」に変えました。

第三章 山麓の村

1

朝の白い光が窓から射し込み、ドラゴスの顔を照らしていた。

「うーん……」

小さく唸つてベッドから起き上ると、そこは広い部屋だった。他に誰もいない。隣にもう一つベッドがあり、ドラゴスが寝ていたベッドとともに、真っ白なシーツが日差しを照り返している。ベッドの上から眺める光景は見慣れぬものだが、見覚えがある。そこは、テナの家であった。

着ているのも昨晩着ていた紺色のシャツではなく、真っ白なシャツだった。新品のようだがよく体に馴染んでいる感じがした。恐らくこの前ドラゴスの体のサイズを測つてからテナが縫い上げたシャツなのだろう。

昨晩、トルガにあてはあると言つたが、それがここである。あの後リイラを抱えたまま一時間以上かけて飛びながら走ったドラゴスは、テナの家に着くとすぐに倒れこんだ。昨日は家を出て、ドスマルマを追いかけ、そしてテナの家に着くまでひたすら「飛び走る」ことを続けていたのだ。疲労は限界だった。

着いたのは夜遅くだっただろつか。記憶は家の前あたりから薄れている。恐らくテナとは顔を合わせていない。きっとその後リイラが戸を叩いてテナたちを起こし、運んでくれたのだろう。

もう少し体力が持てばリイラにそこまでさせることはなかつたはずだ。しかしどうしても「飛び走る」と止まる時に大量の魔力を必要としてしまう。もっと改良しなければならない。簡単に魔力を使

い切つて倒れてしまつようでは、ござとこいつ時にリイラを守れない。そうドラゴスが思つていて、扉の向こうからいい匂いがしてきた。リイラの料理だ。ドラゴスにはすぐにわかつた。だし詳しく述べないが、ギャムジャンベースの味に、何かの出汁をえたスープである。味はあつさりとしているが深みがあり、いかにも西部風といった感じだが、魔界にはない料理だ。リイラがいた世界の料理で、味噌汁といつらしい。ただ、魔界には「味噌」というものがないのでギャムジャンで代用した魔界風で、リイラは魔の味噌汁と命名していた。

ギャムジャンはリイラの故郷で最も重要な調味料である「味噌」と「醤油」の中間のようであるとリイラは言い、西部料理はリイラの故郷である「日本」の料理に近いらしい。中でも味噌汁はドラゴスのお気に入りで、しおつちゅう作つてもらつていた。特に自宅にリイラを泊めた次の日、リイラにやさしく起こされてから食べる朝の味噌汁はまさに別格の美味しさであった。いつだつたか、あまりの美味しさに、

「これから毎朝俺に味噌汁作ってくれよー」

と言つたらリイラは顔を真つ赤にして俯いてしまつた。リイラのいた世界でもやはり味噌汁は別格の扱いで、きっと特別な意味を持つのだな、とドラゴスは直感した。恐らく、神聖であるとか、家の誇りがかかつてゐるとかで、それを毎朝作るフレッシュチャーにののいたに違ひない。だから軽々しく言つべきではなかつたのだ。どうやつて作つてゐるかわからないが、あの味の深みにはそれくらいの重圧がかかつていてもおかしくない。

ドラゴスが味噌汁へ思いを巡らせてゐると、今度はジュウツといふ音がした。テナだ。きっとテナが油をひいて熱したフライパンに厚切りベーコンを投じたのだ。これは以前食べたことがある。味噌汁と合うかわからないが、これは無い。スマートクは弱めで肉の水分もやや多く柔らかい。その代わり肉の風味と旨味が強いのだ。味付けはなんだらうか。味噌汁に合わせて岩塩と胡椒のシンプルな味付

けかもしれない。ただの塩とはいって、テナの家にあった岩塩は侮れない。ツンとした感じがなく、まろやかであり、素材の味を殺さない。それでいて塩 자체の味もさりげなく料理に添える。まさに理想の塩だ。

今思えば数日前にテナの家で食べた食事も全てが相当良いものだった。台所の環境も良すぎるほどに良く、恐らく今も一人が同時に料理することの出来る余裕があるはずだ。あの晩は酒も飲んでいて深く考えなかつたが、テナの生活水準はそれなりに高そうだった。といつより、裕福としか思えない。後で聞いてみよ。それにしても……

いい匂い。いい音。

これはまさに夢のようであつた。リイラとテナが料理を作つてくれているのだ。ドラゴスはもうこの時点で幸福を感じ始めた。

そういうれば寝室にはベッドは一つしかない。だが人は四人いる。どういう組み合わせだつたのだろうか。ドラゴスは気になった。体は軽く、こんなにぐつすり眠れたのだから、テナを抱き、なでながら寝たのかもしれない。いや、もしかするとリイラを抱いて寝たからこんなに心地良い朝なのかもしれない。うーん。どちらにしてもなぜか幸福感を禁じえない。ま、まさか一人ともか！ そ、それならば納得出来るぞ！ この素晴らしい朝が！

するとそこへチトクが入つてきた。そのちびっ子は短く刈つた金髪をしていて、くりくりとした碧眼を輝かせて立つていた。

「あ、ドラゴスさんおはようございます。朝のはんですよ。えへへ……昨日はあんなになでなでしてくれてどうも……」

「お前かよ！」

チトクの顔が嬉しそうなほど、ガツカリ感と悔しさが込み上げる。ああそそせ、そりや普通は男女で分けるだろうね！

「今行くよ」

ドラゴスの声は酷く不機嫌だった。

「疲れてるんならもう少し寝てからでも……」

チトクは心配そうに言った。

「いやすぐ行く。早く顔が見たい人がいるし」  
リイラの無事をちゃんと確かめたかったし、何より会いたかった。

「じゃ、どうぞどうぞ」

満面の笑みを浮かべるチトクに促され、寝室を出た。すると居間の奥にリイラが立っていた。

「リ

「ドラゴースス！」

胸部に衝撃を感じたので下を見ると、テナが頭から突っ込んで抱きついていた。ショートヘアの金髪が朝日輝いた。そして新品の木綿のような匂いがした。テナの匂いだ。

「体は大丈夫？ 怪我とかしてない？ お姉さん心配したんだよ？」  
そう言つてドラゴスの体中をべたべたと触り、くまなく調べ始めた。テナの小さな手が触れるところすぐついた。

「お、おい、やめろつて！」

股間さえも躊躇せずチェックしてるあたり、もう身内として見られているのかもしねれない。

「大丈夫だつて」

「本当？」

テナは真上を見上げるよつこにして、大きく丸い碧眼を潤ませる。

「ほらこの通り」

ドラゴスは両手を広げてアピールするが、テナの表情に納得の様子はない。

「どの通りなの？ ねえ。お姉さん不安で仕方ないよ！」

「昨日は疲れて倒れただけだから。眠ればなんともないさ」

そう言つてぽんぽん、とテナの頭をなでた。そこでテナは納得してくれたようだった。

「リ

「ドスドルマぶん殴つたつて本当？」

再び遮られる。今度は目を輝かせていた。テナの勢いに押されて

「つあえず答えた。

「ああ、まあ。お前の分も込めて思いつきりな」

「やつぱり本当なんだ！ 昨日の夜に一人のこと全部リイラちゃんから聞いたんだよ！ ドラゴス、きみ最高だよ！ 超かっこいいよ！ もう大好きだ！ お姉さんと結婚してくれい！」

「え、ええ！？」

ドラゴスより先にリイラが声を上げて驚いた。興奮していたテナも意表を突かれ、きょとんとした様子でリイラのほうを振り向いた。

「あれ？ リイラちゃんってドラゴスの恋人なの？」

テナはドラゴスとリイラを交互に見た。

「いえ、そんなんじゃないんですけど……」

「そんなんじゃないけど……リ、リイラは……俺のものだ」

ドラゴスが答えるとテナは両手を頬に押し付けて驚いた。

「わーお。お姉さんうつかり失恋しちゃったよ」

「だ、だからそんなんじゃないですっ！」

リイラが真っ赤な顔で言った。

「じゃあ一人はどんな関係？」

テナにそう言われると一人とも答えられなかつた。自分たちがどんな関係かなんか考えたこともなかつたのだ。

「むむ、一人とも黙つてしまつた……といふことは、いやらしい関係だね？ 一人ともうぶな感じなのに意外と

「ち、違いますっ！」

「うーん、よくわからないなあ……とつあえずドラゴス！」

「お、おひ……」

「今夜は抱いてくれるの？ 」の前みたいに……」

テナは見上げてるくせに見下ろすような挑発的な目で問いかけた。

「や、やつぱりドラゴスさんとテナさんはそういう関係なんですか

……」

リイラは涙目になつていた。

「ち、違う！ 誤解だ！ お、俺は誰とも……そ、そういう関係に

なつた」とはないつ！

リイラもテナも少し驚いた様子だった。

「おや？ おやおや？ やつぱりつぶだつたんだねえドリちゃん」

「へ、変な呼び方するな！」

テナはドラゴスの胸元をついつと指でなぞりながら吐息混じりに囁いた。

「リイラちゃんの前に……私で練習してもいいんだよ？」

「だ、ダメですっ！」

リイラが珍しく怒った。が、すぐに頬を染めて俯いた。

「い、いえ、ダメじゃないです……ドラゴスさんの自由ですし……私は口出しする権利なんか……」

リイラは再び涙目になっていた。リイラのそういう姿はドラゴスにとって毒であるため、ドラゴスも冷静さを失っていた。

「いや、ダメだテナ！ 僕はリイラを選んだんだ！」

「ほほう、ようやく恋人宣言ですか？」

「あ？」

どうやら嵌められていたようだつた。

「そんなんじや」

ドラゴスとリイラで声を合わせて否定しようとしたが、テナは強引に話を切り替える。

「それより朝、はんだせい！」

そうしてこの問題は朝食によってやむやにされた。

ドラゴスとリイラはなんだか恥ずかしくなって会話も少なくなってしまったが、互いの距離を今までより近く感じていた。

一方その脇で心配そうな顔をしたチトクがテナの手を強く握ったのを、一人は知らなかつた。

「ええつ！？ 何を言つてるんだ！」

「だから言つてゐじゃない。お姉さんたちが全部面倒見てやるって！」

朝食を食べ終わったころ、テナとチトクはドラゴスの旅についていくと言つ出したのだ。それどころか全て面倒を見てやると主張する。

「それに、旅費もないんでしょう？」

「そ、それは……」

ドラゴスはベラとの夕食時に出て行つたきりなので、完全に手ぶらだった。短剣すら持つていない。

「で、でもお前たちだつてそんな余裕は」

「あるね！ はつ！ 私たちを舐めるんじゃないよ！ この町で荒稼ぎする 裁縫師テナ とは私のことさ！」

なるほど、道理で暮らしあるいし店主が寝泊り用の別邸まで持つているのか。ドラゴスは納得した。

「さらにチトクはこの町一番の使い走り！ 人呼んで パシリのチトク！ その卓越した記憶力と地形把握能力は他の追随を許さないのぞ！」

「いんだかよくわからないが、とにかくチトクも稼いでいるらしい。

「で、でもそんなの悪いですしつ……」

「リイラは黙つて！」

「は、はいっ」

そしてなぜカリイラに厳しいテナ。

腰に手を当て、テナはドラゴスに詰め寄つた。

「だいたいドラゴス！ 状況をわかつてるのかい？ きみは賞金稼ぎどじろかまづ賞金首になるかもしれないんだよ？」

「た、確かに……」

やはり領主の息子を半殺しにしたのはまずかつた。

「そんな極悪人を匿つた私たちも……しくしく」

凄まじくわざとらしい演技だが、その点に関しては謝るしかない。

「す、すまない……」「

「責任、取つてくれる?」

「ど、どんな……」

リイラも不安げな顔をした。

「連れてつて!」

「結局そこか!」

詰め寄つてくるテナにどうすれば勝てるのか、ドラゴスは考えた。しかし、いい案は思い浮かばない。思えばテナの押しに勝つことなどない。

「ねえ」

「ん?」

テナは口の端を吊り上げ、ドラゴスの胸を指で突付く。

「ザツザルへの行き方は知つてゐるの?」

「そ、それは地図を見て……」

「地図、持つてるの?」

「それはどこかで買つて……」

「お金、あるの?」

「な、ない……です」

テナには勝てない。それがドラゴスの出した結論であつた。

「どうせ移動手段も考えてないんでしょ。全部私らに任せなさいな！」

ドラゴスは悩んだが、今はテナの力を借りるしかないと判断せざるを得なかつた。

「よろしく頼む……」

「よしきた!」

テナは天高く拳を突き上げたのち、チトクとハイタッチした。

「いんですか!? ドラゴスさん!」

ドラゴスの決断にリイラは戸惑つていた。するとテナがリイラの前に詰め寄つた。

「リイラは自費で別行動ね」

テナはあざ笑うように言い放った。

「ええ！？ …… で、でもそうですね。テナさんには私なんかを助ける義理もないですし……」

「おいテナ！ それは酷いんじゃないか  
涙目のリイラを見てドラゴスも思わず熱くなつた。

「へへ、『冗談だいつ！ りっちゃんとドラちゃんも全部私が面倒見  
ちやうよ… 一人とも大好きだからね…』」

テナはそう言つてリイラに抱きつき、胸に顔をうずめた。

「うひーやわらかー」

リイラが「どうすればいいのかわからない」とこの間でドラゴス  
に助けを求めていた。

「リイラ、あきらめろ。テナはずっとこんな感じだ」

「そだよー」

テナは顔を上げてリイラを見つめた。

リイラは何と言つていいかわからないので、とりあえずお礼を  
言つた。

「あの、ありがとうござります。お礼はいつか必ず……」

「ああそうだ。借りは絶対に返すよ」

そう言つても断るだろうと思つたが、テナは目を輝かせた。  
「絶対に？」

「ああ絶対」

「じゃあ行き先を テグサンドル に変えてもいい？」

「で、でも ザッザル でトルガと」

「すぐじゃないんでしょ？」

「まあ……」

「お姉さん一回行つてみたいんだ。西部首都、テグサンドル。大都  
会、テグサンドル。グルメの街、テグサンドル！」

「グ、グルメの街……」

確かにトルガと合流するのは今すぐではないし、いすれザッザル  
で会えればいい。

「テナがそこまで言つなら……」

「い、いいんですか！？」

「リイラは黙つて！」

「は、はいっ」

やはりなぜカリイラに厳しいテナ。

「じゃあ出発は今晚こつそりね。そんじゃ私たちは準備するから一人は出歩いたりしないでこそこそしてな！」

テナとチトクはなにやら身支度を整え始めた。そして家を出る時にも念を押した。

「ここは領主の城にも近いし賞金首候補の一人は用心するんだよ？」

「おひ……」

「はい……」

さすがのテナも真面目な顔だったのだが、そこで急にいたずらっぽく笑つた。

「そうだ。日中はもう寝室に入らないよつしておへから、ドリヤやんとりつちゃんはイチャイチャして暇潰してもいいんだよ？」

「ば、ばか！」

からかうテナを追い払つたものの、そんなことを言われて二人つきりにされたら気まずくならざるを得ない。

一人は赤くなつて俯いたまま、お互にのことをぽつりぽつり語り合つた。

「皆の衆、よく聞きたまえ」

テナがそう言つて切り出したのは深夜だった。

特に夜遅くに出発する予定ではなかつたのだが、夕食が宴のように盛り上がりてしまったのだ。特にテナとリイラが楽しそうにしていた。

ドリヤはテナの態度が時々厳しいのでリイラのことを嫌つてい

たのかと思つていたが、ただ単にからかうと可愛いからいじめていただけのようで、安心した。

テナは酒を少し飲むとリイラにも甘え始めた。もちろん最初はドラゴスにばかり甘えていたが、横でリイラが「私なんか気にせずになどと言つて目を潤ませてしまつ。だからなるべくテナをリイラに押し付けておいた。するとテナはリイラのほうが抱きつきやすいのか、段々リイラとだけべたべたしていた。

チトクはチトクで「姉ちゃんもやつぱり優しいお姉さん抱きしめて欲しかつたんですよ」とどつかで聞いたことのあるよつなフレーズで素面の癖になぜかしんみりと語り始めた。

そうして晩餐は長引き、テナの酔いが醒めるのを待つていたら深夜になつたという訳だ。

「皆の衆、心して聞けい」

暗い室内でテナは小さな声で言つた。

「今夜は……」

緊張が走る。

「夜逃げじゃー！」

勝利者の如く両手を突き上げたテナは楽しそうだった。

「静かにしなくていいのかよ！」

ドラゴスが問うと同じく楽しそうなチトクが答えた。

「昼間調べたんですけど、まだドスドルマの一件は知られてないんで全然警戒する必要ないんです」

「なんだ……」

からかわれたことへの怒りより、安堵のほうが大きかつた。

リイラもほつとしているだろつと思つて振り向くと、リイラも勝利者の如く両手を突き上げていた。

「やつほーい」

リイラはまだ酔いが醒めていなかつたのだ。そしてキャラがおかしい。

「どうしたのそんな顔して、私が慰めてあげる……よしよし

そう言つてリイラはドラゴスの頭を胸に抱き、赤ん坊のよつこなでた。

「あは！ ドラちゃん顔あかーい！」

悪くない心地だったのでつゝされるがままにしていたが、からかわれて慌ててリイラを突き放した。

「あれ？ そのまachaつちゅしてもいいんだよ？」

「ば、ばか！」

突き放されたリイラはそのままふらふらとあたりを千鳥足で歩いた。すると倒れそうになつたので、ドラゴスはすかさず抱きかかえた。

「私がだつこしてあげる……」

「抱かれてるのはお前だよ」

リイラはそのまま眠つてしまつた。リイラも酒は飲めるのだが、弱かつたのだ。普段ならあまり酩酊することはないが、今日はテナのせいで飲みすぎていた。酔つた時の甘えたテナと母性的なリイラがあまりにも相性が良く、酒が進んでしまつたのだ。結果、酒に弱いリイラだけがぐでんぐでんになつてゐるに至る。

「じゃあリイラはドラゴスが運んでくれい。荷物はもう荷馬車に積んであるよつ！」

「荷馬車なんかわざわざ用意したのか

「いつも使つてるやつですよ」

「いつも？」

「使い走りつて言つてもチトクくらゐの受注量になると移動は荷馬車が基本なのさつ！」

テナは胸を張り、チトクの頭をなでた。

「えへへ、そうなんです

外に出ると、チトクは隣の一軒家に入つて行つた。

「お、おい、いいのかよ人の家に勝手に入つて

「あれチトクの事務所だよー」

「……事務所？」

「そ。チトクが率いる使い走り集団の拠点を」

もはや使い走りのレベルを超えてるじゃないか……

「でも大丈夫なのか？ 急にいなくなつて」

「うん。ちゃんと下の者に話をつけておいたつて言つてたよ」

しばらくしてチトクは建物の裏から幌付き一頭立ての荷馬車を引いて現れた。

「お待たせしました」

質素な作りだが頑丈そうで、長旅にも十分耐えられそうな荷馬車だった。馬も立派である。

とんだ金持ちじゃないか……

ドリゴスは感心とも呆れともつかない、妙な気持ちになった。

全員乗り込むと、チトクは慣れた手つきで馬を扱い、ゆっくりと歩かせた。逃亡劇の割には随分とのんびりした出発であった。

荷馬車の中には椅子もないが、毛布が何枚も用意してあり、十分にくつろげそうだった。

テナはてきぱきと毛布を敷き、寝るためのスペースを作った。

「さ、今日はもう寝ちゃいな」

「いいのか？」

「いいっていいって」

テナはドリゴスの背中を押して促した。

「悪いな……」

ドリゴスは抱きかかえたリイラをまず寝かせると、その横に自分も寝転がった。

ドリゴスは無意識のうちにリイラの頭をなでていた。リイラは実際に気持ち良さそうな顔で寝ている。

「ねえドリゴス……」

テナには珍しく、細く弱弱しい声だった。

「ん、どうした？」

リイラを起こさないよう、ドリゴスも小さな声で答えた。手はリイラをなで続けていた。

「私も寝ていいかな……」

月が出ているものの、少し下を向いたテナの顔は暗くてよく見えなかつた。

「チトクがいって言えばいいんじゃないかな?」

「そうじゃなくて……」

それ以上は特に何も言わなかつた。テナは小窓から一言一言チャ

クとやり取りしたのち、ドラゴスの脇に寝た。

ドラゴスはリイラの頭をなでていたので、テナには背中を向けた状態だつた。テナがドラゴスの服を掴むのを感じた。ドラゴスは仰向けになつてテナのほうを向こうとしたが、「このままいいの」とテナは制した。テナの手はより一層強く服を掴んでいた。だがドラゴスは動けず、何も言えなかつた。

そのうちにゆっくりと進む荷馬車の揺れが眠気を誘い、意識は夜に消えていった。

&gt; 1 1 1 6 4 6 — 1 6 3 6 &lt;

## 2

西部首都テグサンドルは出発したテナの町 リーゼ の北東に位置し、西部地方最大の都市である。トルガと合流する予定のザッザルはその西にしばらく行つたところにあるので、先にテグサンドルへ寄ること自体は問題なかつた。

しかし、厄介なのはテグサンドルに着くまでの道のりである。ドラゴスの端村やテナのリーゼは西部地方の中でも南西部にあり、テグサンドルやザッザルのある中心部と完全に分断されている。といふのも、間に「ラグレー山脈の小枝」と呼ばれる ラリー山脈が通つているのだ。ラリー山脈は南西部の北側からラグレー山脈と枝分かれし、南東へ伸びる。それによつて西部地区の中心部と南西部は分断されていて、両者を結ぶ道はかなり限られてしまつてゐる。

ただ、ザッザルへ向かう西側ルートは比較的楽である。道は平坦ではないが、山脈を越える必要がない。そこには大トンネルがあり、簡単に通過することが出来るのだ。

逆にテグサンドルの方面へ向かう東側ルートは困難な道のりとなる。山脈に突き当たるまでは平坦なので楽であるが、山脈は自力で越えなければならないのだ。

「ラグレー山脈の小枝」と呼ばれる通り、あまり高い山脈ではないので、荷馬車のままで山間部の街道を通過することが出来る。問題はラグレー山脈とラリー山脈の尾根が繋がつてゐることなのである。

つまり、竜との遭遇率が高いのだ。

そのため、商隊などはリスクを恐れて大抵西側ルートを通り、そ

ちらばかりが整備される。また、東側ルートを通りるのは個人旅行者が多く、竜討伐のクエストを出す資本家もなかなか現れない。

チトクはこういった事情もよくわかつていたが、ドラゴスの強さなら問題ないと楽観視していた。ドラゴスもチトクがこれらのことを見説する雰囲気から自分が竜に負けることはないのだろうと思つた。

だが横で聞いていたリイラは魔界での「強さ」に関してよくわからなかつた。

「ドラゴスさんって竜より強いんですか？」

「あたほつよ！ お姉さんもドラゴスほどの『魔力使い』は見たことがないね！」

「そうなんですか。やつぱりドラゴスさんは強いんですねっ！」

リイラが目を輝かせるのでドラゴスは少し照れた。

だがリイラはそこで「魔力使い」という言葉について気になつた。魔界でよく聞く言葉だが、実はなんとなくしか意味を理解していかつたのだ。

「あの……『魔力使い』とそうでない人の違つて何なんですか？ 魔界の人はみんな魔力を使えるようですし……」

「そ、それはお姉さんもわからないや」

「俺も知らないな」

「その境界は曖昧ですね……たぶん、戦いに使えるほどの魔力を持つているかどうかじゃないでしょうか」

魔界の人間でも理解はあやふやで、明確な定義はないようだ。

「お姉さんは火を付けたり水を出したり氷を出したり料理に使うようなことしか出来ないし『魔力使い』とは言えないと思うよ。チトクは火花が一瞬出るくらいしか出来ないからもつと『魔力使い』とは言えないね。リイラは……ごめん」

「なんで謝るんですか！」

「だつて魔力のない人間なんて……あつ、でもリイラは胸があるからそんなこと気にしてないんだよね……くつ、どうせ私は胸なしだよ……もう十九だし希望はないよ……」

「「」、「めんなさい……」

「あ、謝るつてことはリイラもやつぱりそう思つてるんだ！　ああそうさ、世の中魔力よりおっぱいのほうが大切だよー。こんちくしょーつ！」

「そ、そんなことないですよつ。テナさんだつてそれはそれで」

「じゃあドラゴスに触つて確かめて」

「だ、ダメですっ！」

「どうして？」

「そ、それは……」

リイラは赤くなつてもじもじし始めた。テナはこれが見たかつたのだ。

「もおー！　冗談だよつー！　りつちゃんかわいいね！」

そう言つてリイラに抱き付き、胸に顔をうずめた。

「あひゃー、たまらん」

リイラもそうされると母性本能がくすぐられるのか、無性になでてあげたくなる。なんだかんだでこの二人は仲がいいのだ。

そんなやり取りももはや日常だつた。今日で出発してから一週間が経つ。

胸に抱いたテナは、うとうとしていた。チトクがゆつくりと進める荷馬車の心地良い揺れに加え、よく晴れた午後だったので眠くなつてしまつたのだろう。リイラはテナの体勢を優しく変えてやり、膝の上に頭を乗せた。さつくよだれを垂らして寝始めたので思わず苦笑し、隣に座るドラゴスと顔を見合わせた。

天氣もいいのでその日は幌を外していた。そのおかげで街道沿いの景色がよく見える。

このあたりはそろそろラリー山脈も近くなり、気候区分も変わり始めていた。端村やリーザあたりは乾燥地帯だが、西部地方の大半

が湿潤な気候区分に属する。ラリー山脈によつて南西部だけ気候が変わつてしまつてゐるのだ。

したがつてラリー山脈に近づくにつれ湿度が増し、緑も多くなる。まだ山脈の手前なので湿潤地帯と言えるほどではないが、それでも砂地や岩山はあまり見られなくなつた。農地も畠だけだつたのが、水田も見られ始めた。

だがリイラが一番変化を感じたのは匂いである。南西部と違い、風に混じるのは砂埃の匂いではなく、周囲の森の湿氣を含んだ柔らかな匂いなのだ。それは故郷日本で慣れ親しんだ匂いでもあり、心地良かつた。

「村にいた時は風が吹けば戸を開めたけど、ここいらの風は気持ちいいな」

ドラゴスもリイラと同じように感じていた。風がドラゴスの前髪を揺らすと、ドラゴスは気持ち良むやうに目を細めた。

「ええ……」

お互に同じように感じていることは不思議とわかつていたので、返事はそれだけで十分だった。ドラゴスはリイラが眠くなつているのも察したようで、頭をすつとなでてから肩を抱き、寄りかかるよう促した。リイラは少し躊躇したが、甘えることにした。そうして心地良い風と温もりに包まれ、午後の眠りに落ちていった。

それからさらに向日かすると、もうラリー山脈のすぐふもとまで来た。周囲の景色はより一層緑の深さが増していく、平らな土地も減つてきてるので農地も少なかつた。

目の前には当然ラリー山脈が立ちはだかる。高くはないとは言え、十分な圧迫感を持つてそこに存在していた。

「今日はあの向こうに見える ジュク という村に泊まります。今まで必ず泊まる場所を確保出来ましたが、ジュク を最後にあ

とは野営ですので、しつかりと体を休めてください」

チトクが指差す方向には小さな集落があつた。そこは街道からは随分と離れていて、今まで立ち寄つたような宿場町とは雰囲気が違つていた。チトクはそこで何日か過ごしたのち、ラリー山脈入りをすると説明した。

晴れやかな空の下、集落を取り囲むようにして水田が広がり、日差しをきらきらとはね返す。水田の一つ一つは小さいが、斜面を工夫して切り拓き、様々な形の田んぼがパズルのピースのように連なる。その曲がりくねつた畦道あぜみちには、駆けずり回る子供たちや農作業に勤しむ者がちらほらと目に入った。

リイラは大きく息を吸い込んでみた。すると木々の香りと土の香りが周囲の風景と相まって、郷愁の念を抱かせた。田んぼに引かれた山の清水も、水の豊富な日本を連想させる。

集落に入る少し手前には一本の柱が立つており、村の門のような印象を受けた。柱はトルガの腕でも回らないであろうほどの立派な丸太で、くまなく装飾が彫り込まれている。恐らくこの集落は街道が出来てから開拓されたのでなく、古の時代からそこにあった土着の集落なのだ。

幌を外した荷馬車がのんびりとその門を通過しようとした時、一人の少年が飛び出してきた。少年は十一、三歳に見える。切羽詰つた表情で、ドラゴス一行を氣にも留めず、黒髪をなびかせながら横を走り抜けた。

「捕まえてくれ！」

そう叫びながら小柄な男も飛び出してきた。髪には白髪が混じり、五十過ぎの初老に見えた。

「こいつか？」

ドラゴスが少年を指差して確かめると、初老の男は「そ、そうだ！」と息を切らしながら答えた。

「なら……」

と言つてドラゴスが踏ん張つたかと思つと、次の瞬間には少年の

前に立ちはだかった。

「うわあー！」

「いひ、逃げんな！」

慌ててきびすを返す少年を腕をドーラゴスは掴んだが、少年は激しく抵抗した。

「やなこつたー。」

「暴れるな馬鹿野郎ー！」

ドーラゴスが思い切りげん骨を食らわすと、少年は瞬く間に昏倒した。

「つたぐ、盗みでも働いたのか？　この悪ガキめ」

少年の首根っこを掴んでドーラゴスがそう言つと、リライラはくすくすと笑つた。まるで二年前に初めて見かけた時のドーラゴスを今のドーラゴスが捕まえているようで、とても滑稽に見えたのだ。

「ん？　どうしたんだ？」

「ちょっと面を思い出しだけです」

リライラは楽しそうに笑つた。ドーラゴスは訳がわからず、ちょっと

むすつとした。

「おお助かった……ありがとーー。」

初老の男が遅れて駆け寄つてきたので、ドーラゴスは少年を引き渡した。

「旅の方かい？」

「ああ。ちょっとこの村に泊めさせてもいいみたいと聞いてな」

「そうか！　なら案内しよう。」

そう言つて男はてきぱきとドーラゴス一行を村の奥へと導いた。

「泊まるのは別の場所を用意するが、とりあえずひで茶でも飲みな」

男はドーラゴスたちを自宅に招いた。荷馬車を引くチトクは男が呼

んだ他の者に連れられ、別の場所へ向かつた。

小さな集落の割に、その男の家は大きかつた。男はこの村の村長であつた。

「なに、村長だから家が大きいつて訳じやないわ。暮らす人間が多いから改築の度に広くしたんだ」

お茶を運んで来た村長がそう話す間も、広い家中を小さな子供が何人も走っているのが見えた。

「見かけによらず絶倫なんだねつ！」

「こらテナ！」

無遠慮な言葉だがテナは無邪氣だった。

「いやいや、違うんだ。私は見かけ通りに精力が弱くて夜はいつも

「あんたも答えなくていいよ…」

夜はいつも何なのか少し気になつたがここは制した。この場にはリイラだつているのだ。

「まあとにかく、この家で暮らしている子供たちはみんな私の子供じゃないんだよ。ここからは山での……『事故』が多く、からうじて生き残つた子供だけが発見されることがたまにあるんだ。そういう孤児みなしこが自立出来るまでここで育てているのさ

「見かけによらず優しいんだねつ！」

「こら！」

「ははっ。でも育てる時はもちろん頑固親父だがな」

この面倒見のいい村長は責任感も強そうで、確かに厳しく育てていそつだつた。

「あの悪ガキはクフイーといつてな、あいつもそんな孤児の一人だ」  
村長は目をやつた先には、さつき捕まえた少年が気を失つたまま寝かされている。

「あいつ……クフイーは何をやつたんだ？」

村長は急に深刻な表情となつた。苦しみを耐えている顔にも見えた。

「死に行こうとしたのさ……」

予想外の重い言葉に、ドラゴスたちは何も言葉を出せずにいた。

「わかに緊張が張り詰めていく。

「実はこの村に竜が来てな……」の家で暮らす少女の一人をそらつていつてしまつたんだ……」

ドラゴスは部屋の温度が、ぐつと下がつたように感じた。

「ここにはそういうことの起る土地なんだ……それでクフイーは少女を助けに行こうとしたのさ……」

「止めて……よかつたのか？」

「ああ。村に来た竜は『銀竜』という希少種でな、人間が勝てるような竜じゃない。それにその少女も助かりはしないだろ?……失うのは一つでいいんだ……」

村長はあまり具体的なことは言いたくなさそうだった。ここで生活をともにしていた者が一人犠牲になつたのだから、それも仕方ないかもしない。だが、ドラゴスはどうも靄のかかつたような、変な感じがしていた。

「いや、すまない。せつかくのお客さんになんな話ををしてしまつて……なに、心配しなさるな。もう竜が来ることはないはずだ……さて、泊まるところを案内しようか」

村長はそう言つて立ち上がると、てきぱきとドラゴスたちを宿泊先へと導いた。

宿泊先は村長の家からやや離れたところにあるちよつとした平屋の一軒で、いつも来客用に使つているという。大きな家ではないが、四人が泊まるには十分な広さだった。小さな集落なのでこうやってもてなして人との繋がりを持つことが重要なんだと村長は言つた。

「じゃあ、ゆつくりしていつてくれたまえ。何かあつたら気兼ねなく村人に言つとい。夜までにはベッドを四つ運び込んでおくよ」

村長は手短に説明をした後、すぐに背を向けて自宅へ戻ろうとした。それをドラゴスが引き止めた。

「クフイーはどうなるんだ?」

「起きたらまた家を飛び出すかもしないな……縛り付けてでも止めるよ」

「そうするしかないか……」

そこで村長とドラゴスたちは別れた。

チトクはどこかへ馬小屋を借りにでも行っているのだろう。外に荷車だけが置いてあった。中に引き入れるには大きすぎるが荷物を野ざらしにする訳にはいかないので、三人で協力してせりと幌を張つておいた。そして家の中へ入つた。

室内はちゃんと掃除が行き届いていて、非常に清潔に保たれていた。戸を閉めると三人だけの空間となり、そこでようやく緊張が解けた。

「ふいー、何か疲れたなー」

「親切ですけど、何だが物騒な村ですね……」

「まあ大丈夫！ ドラゴスがいるからねっ！」

「お、おう……」

ドラゴスは心に引っかかりを感じていた。それが何なのかはわからない。だが間違いなく、この村をほの暗い靄のようなものが覆っている。そう思った。

「おかしいですね……」

ドラゴスは遅れてやってきたチトクに村長から聞いたことを話した。するとチトクも不審に思つたらしかつた。

「村に『銀竜』が来て少女が一人さらわれただけで済むとは思えません。人は逃げることが出来ますからそれだけの被害で済むかもしれませんが、家畜や建物や農作物は竜が来たからといって逃げられません。なのに村に荒らされた感じも全然ないです……」

チトクはそこまで言うと、少し暗い顔をした。何か気付いたのかもしれなかった。だがドラゴスはまず『銀竜』について気になつた。

「銀竜ってのはそんなに強いのか？」

「ええ。希少種なんですよくわからない部分が多いんですけど、竜の中でも屈指の強さです。魔力はほとんどありませんが、力が強く、その鋼より固い鱗はどんな剣でも貫けないと言われています。人が勝てるような竜ではないでしょ？」

「へえー。それだけ聞くと俺より強そうだな」「

ドラゴスは感心しながらも少し悔しく思った。

「たぶん……ドラゴスさんでも勝つことは難しいでしょうね……」

チトクが言いづらそうに告げると、横からテナが飛び込んできた。

「じゃあこにも危ないじゃん！ ドラちゃん使えなーー！」

テナはドラゴスを見下すような目付きで言い放った。

「う、ひるせいいちびっ子！ やつてみなきやわかんないだろー！ このひーー！」

ドラゴスはテナのわき腹をくすぐって押し倒した。

「あひやひやひやひや！」

思つた以上にテナはくすぐりに弱いようで、顔が真っ赤になるほど大笑いした。ちょっとだけ懲らしめるつもりだったのにやりすぎたように感じたので、ドラゴスは手を止めた。

「うう……」

すると笑いを止めたテナは頬を染めたまま、笑い涙で潤んだ碧眼を向けた。ドラゴスは仰向けのテナに覆いかぶさるような体勢でそんな顔をされたので少し照れてしまった。テナはそれをすかさず茶化す。

「リイラが見ているのに……大胆！」

「ばかっ！」

ドラゴスは再びくすぐり始めた。

「リイラも来い！ いつもの仕返しをしてやれ！」

さすがに最初はリイラも遠慮がちだったが、次第に本気でくすぐり始めた。しかもリイラのほうが女の体を知っているせいか、くすぐりが上手かった。テナの笑いはもはや悶絶と言つていいほどに激

しくなる。

「うひやひやひやひや！ リイラはダメだ！ リイラだけはダメだ  
！ 死ぬ！ 死ぬ！ あつ」

なんだか本当に死んでしまったのでそこでやめておいた。  
テナは汗だくなつて息を切らし、力なく倒れていた。

「りつちゃん許さない……」

天真爛漫なテナの性格に似合わない怨嗟の声が漏れた。

「あーすつきりした。いつも人をからかってばっかりのテナが悪い  
んだ。……あれ？ 何の話でこうなったんだっけ？」

「銀竜が強いって話です」

「そうだそうだ。俺でも勝てなさそなうならテナが言つたよう二二  
も危険だな」

「大丈夫だと思いますよ」

チトクは確信のありそな顔だつた。

「銀竜は恐ろしく強いのですが、飛べないんです。それに走るのも  
得意じゃないと言われています。だからドラゴスさんの移動能力で  
ささつと僕らを避難させてくれれば簡単に逃げられますよ」

「そうなのか。……それにしてお前は物知りで本当に役に立つな  
あ」

ドラゴスが褒めるとチトクは照れたが、すぐに真面目な顔になつ  
て続けた。

「あと……村長さんはもう竜は来ないって言つたんですね？」

「ああ。でもそれって俺たちを安心させるためにとりあえず言つて  
おいただけなんぢゃないか？」

「ええもちろん、そう捉えることも出来ます。でも……本当に竜が  
来ないことを知つていたとしたら……」

ドライバースは固唾を呑んで聞き入つた。

「考えられる可能性は二つあります。一つは少女がいなくなつたこ  
とを竜のせいにしたという可能性です。だとすると村で何か事故が  
あつたのかもしれません」

「なるほど。でっち上げで隠さなければならぬ何か、つてことか……」

少女に起じたった凄惨な事故……もしくは事件と言つべきものか……やはりドラゴスにはこの村が何か暗いものを隠してゐると思えなかつた。

「ええ。でも、そうなると『銀竜』と言つたのが引っかかります。でつち上げにしては具体的ですし、銀竜なんて希少種の情報だとかえつて噂が広まつてしまします。たぶん都会では今だつて銀竜捕獲のクエストが出されているでしょうし。何せ希少種ですからね……」「なんにせよ事情はかなり複雑そうだな」

ドラゴスが言い終わると、屋内の静けさも不気味に思えてきた。

「もう一つの可能性はなんですか？」

ドラゴスと一緒にチトクの話をじつと聞いていたリイラが尋ねた。「もう一つのほうはシンプルです。少女をさらつた竜が『もう来ない』と言つた可能性です」

その一言で一気に場の緊張が高まつた。

「それって……」

「そうです。『自我竜』が来たといふことです」

「自我竜」とは自我を持ち言葉を話す竜である。種にもよるが、野生の生き物もおよそ百年生きると自我を持ち、言葉を話すと言われてゐる。それらの総称を「自我獣」と言い、その中でも竜は「自我竜」と呼ばれる。

大抵の自我獣は少なくとも百年もの間、老いることなく育ち続けるため、同種の平均的な大きさを遥かに超える巨体である。もし仮に自我獣化している銀竜ならば、その強さは計り知れない。

「でも銀竜でおかつ自我竜なら村が荒れていないので余計不自然じゃないか？」

「ええ確かに……とにかく今は情報が少なすぎますし何も断定は出来ません。やたらと心配しても仕方ないです、今はゆっくりしましちう」

「ああ……」

「そつは言つたものの、誰も緊張を解くことが出来ずについた。ドラゴスは念のため他の者に言つた。

「みんな……今日はなるべく個人行動はしないでくれ。むやみに村人に情報を聞いたりもするなよ」

一同無言で頷いた。

「でも、村の人々がベッドを運んでくる時に何か聞いておいたほうが……」

チトクが提案した。

「せうだな……そしう」「うう

ドラゴスが答えると、そこで家の沈黙支配された。テナはチトクの手を握り、リイラも怯えた様子であった。ドラゴスはそんなリイラの頭をすつとなでやり、手を握った。しかし、誰も不安拭い去ることは出来なかつた。

それからしばらくすると、しんと静まり返つた室内に突然戸を強く叩く音が響いた。一同思わず身をすくめた。

ドラゴスはリイラを抱き寄せ、リイラもドラゴスにしがみ付いた。もう一度戸が叩かれたのち、女性の声が聞こえた。

「あれ、いないのかい？」

そう言って乱暴に戸が開けられた。そこにはいたのは太つた中年女性だった。

「マリールさん！」

チトクがその女性の名を呼んだようだつた。

「なんだい、ちゃんとこるじやないか」「す、すみません」

チトクは先ほど馬小屋を貸してくれたのがこのマコールといつあばさんだと説明した。

「君がドラゴスくんか。はつは！　いい体してるじゃないのー。」  
マリールはドラゴスの体をバシバシと叩いた。じつやらマリール  
はがさつな性格のようだった。

「ほら、ベッド持ってきたよ」

外には若い男たちがベッドを運んできていた。すぐに中に引き入  
れ、一同でお礼を言つた。

「チトク、中にいたのに一体どうして返事もろくにしなかつたんだ  
い？」

「いや、それは……」

チトクが言いにくそうにしていると、ドラゴスはこじで思い切つ  
て聞いてみようと決めた。

「それは竜が来たって聞いたからみんな怯えてたんだ

ドラゴスはあえて暢気な調子で言つた。

「やだねあんた、案外臆病じゃないの。まつたく、男はもつと堂々  
としてなきや。そんなんじやそこの彼女も愛想つかしうつよ？」  
無意識のうちにドラゴスに寄り添つていたリイラが顔を赤くして  
うつむいた。

「え、あ、いや彼女というより

「とにかく、竜なんか来やしないんだからドンと構えてな。あと、  
その様子じや話を聞いてるんだろうけど、村長の前でそんな話をし  
ちゃだめだからね。あんたらも不安かもしれないけど、クドウナの  
ことは村長だつてつらいんだよ」

「『クドウナ』？」

知らない名が出てきたので思わずドラゴスは聞き返した。

「名前は聞いてなかつたのかい？　竜に持つてされた村長の一人娘  
だよ

「村長の一人娘！？」

おぼろげながら、村長が多くを語りたがらない理由が見えてきた。  
が、それでもまだ情報が足りない。

「おや、村長も言つてなかつたのかな？　そりやあまあ仕方ないか

……

『ドラゴスはさうに突つ込んだことを聞いてみた。

「どうして竜が来ないってわかるんだ？ そいつは自我竜だったのか？」

ドラゴスが尋ねると、マリールは途端に慌てだした。

「それは……あ、あたしに聞くんじゃないよ！ だ、だけど他の人にも聞いたらダメだからねっ！ いい？ 村のことにはあんまり首突つ込んでいため！ お密なんだからゆづくりしてなさい！」

こちらが相槌を打つ暇もなく矢継ぎ早にしゃべると、マリールは逃げるようにして去つていった。

ベッドが運び込まれて少し狭く感じるようになった室内では、再び重い空気が戻ってきた。日も傾き始め、室内はやや薄暗くなっていた。

「本当はあの家で村長の子供も暮らしてたんだね……」

テナの声には憐憫が込められていた。

「そうみたいだな……でも、『クドウナ』っていう一人娘を竜にさらわれた悲しみがあつてあえて言わなかつたのもあるだろ？ けど、それだけじゃない氣がするんだ」

ドラゴスも村長に同情はするが、どうも腑に落ちないのだ。

「僕もそう思います。マリールさんの反応を見る限り、やっぱり『来ない』というのがわかつていて、なおかつ自我竜だったんだと思います」

「だよな……」

低い位置まで落ちてきた太陽が何かに隠れたのだろう。にわかに射し込む光が少くなり、室内が暗くなつた。

そこでチトクが恐る恐る口を開いた。

「あ、あの……村長にはこんなに良くしてもらつておいで、い、こんなことは言いたくないんですけど……」

「どうした。落ち着いてからでいいぞ」

ドラゴスが背中をそつとさするとチトクはぽろぽろと言葉を紡い

だ。

「……すじべ……恐ろしい考えなんですが……」いつ考へると全部……辻褄が合つんです……」

チトクは意を決したよつに言つた。

「村長は自我竜に一人娘を……」

しかし、そこで場の空氣を一変させる絶叫が響いた。

「助けて！……旅の人！助けて！」

ドラゴスがすぐさま外に出ると、少し離れたところに例の少年、クフィーがうつ伏せに倒れていた。

「大丈夫か！」

クフィーは後ろ手に縛られている状態で転んだため、地面に顔を打ちつけたようだ。ドラゴスに声を掛けられて顔を上げると、額を擦りむいていた。そして前歯が折れていて、おびただしい血が衣服に染みている。だがその血で最も濡れているのは足であり、どうやら転んだせいでの歯が折れたのではない。裸足の足首には繩が擦れた跡があつた。

「お前……歯が折れるほど噛み続けて繩を千切つたのか！」

「……お願い！助けて！」

「ああ今助けてやるよ！」

そう言つてドラゴスは手の繩を解いてやるつとした。

「違う！俺じゃない！クドウナを助けて！」

血を流し続ける口からは悲痛な声が發せられる。

「どうこうことだ！説明しろ！」

ドラゴスも切迫した様子で問いただす。

「早くしないと夜になっちゃうよ！クドウナが！」

「クドウナが何なんだ！」

「クドウナは……生け贋なんだよ！」

生け贋。

つまりクドウナは村長の意思で……

「やつぱつ……」

チトクは顔をゆがめた。

クフイーを追ってきた村長がそこで姿を現した。

「おーい、捕まえてくれ！ セつかく縛つたのに逃げてしまつたんだ」

走つてきた村長はドラゴスとクフイーの前に来ると、膝に手をついて肩を上下させた。

「いやあまた迷惑をかけたね……」

村長は申し訳なさそうに頭を搔いた。

「おーい……一人娘のクドウナが生け贅つてどいつこいつだよ」

ドラゴスは極力静かな調子で言つた。

しかし村長はドラゴスとは向き合はず、クフイーを叱つた。

「おいクフイー話したのか！」

「答えてくれよ」

ドラゴスは自分でも声が怒りに震えているのがわかつた。自分の中の火薬によるものに火が付いてしまいそうに感じた。

「そ、それは……」

村長は言葉に詰つた。

「もしかして……あんたは自分の娘を使って自我竜と取引したのか？」

村長は何も答えない。だが、その沈黙は十分に答えだつた。ドラ

ゴスは怒声をどろかせた。

「どうなんだ！」

燃えるような目していた。

そのドラゴスの目を見ずに、村長は答える。

「…………ああそうだ」

村長は拳を強く握り締め、必死に耐えるような表情を見せる。ドラゴスも殴りたい気持ちを必死に抑えていた。しかし、全身が血が熱くたぎるように感じるとともに、爆発した。

「それが人のすることかよ！」

叩き付けた拳によつて、地面がえぐれた。

「お前は親なんだろ！」

ドラゴスは全ての怒りを声に込めていた。なぜだかわからないが、どうしても許せなかつた。

「どうして村を襲つてきた竜にクドウナを売つたんだ！ 村の安全のためか？ 竜が『もう来ない』つて言つたつてどこにそんな保障があるんだよ！ なんでそんなことで自分の子供を捨てたんだ！」

ドラゴスの目はより一層燃え盛る。しかし、村長は睨み返した。

「私だつてつらいんだ！」

全身に力が入り、震えていた。

「一人娘を竜にやつて平氣な親なんかいる訳ないだろう！ でもこの村に暮らすのは私たちだけじゃない！ 他の村人だつて平等だ。我が子のために他の家の娘を犠牲にする訳にはいかないんだ！ だから私が村長として！ 自分の子供を犠牲にするしかないだろう…」

村長の顔が悲痛にゆがむ。

「ふざけんな！」

やはりドラゴスは我慢できず、村長を殴つた。懸命に力を抑えたつもりだつたが、村長は後ろへ転げた。

「誰を犠牲にだと、そんなことじやないだろ！」

すぐさま起き上がつた村長はドラゴスの胸ぐらを掴んだ。

「他にどうしようもないだろうが…」

村長も憤怒の形相で食らい付いた。ドラゴスもさらに強く睨みつけ、両者の怒号が絡み合つ。

「だからつてあきらめんのか！ 娘を捨てんのか！ 道を探せよ…！ 願えよ… 娘の幸せを…！」

「願つてるさ！ 代われるなら代わつてやりたいよ…！」

「そこまで思うなら他の方法だつてあつただろ！ 逃げるなり何なり出来たはずだろ！」

「村を捨てて逃げる」となんか出来るわけないだろつ！ 私は村長なんだ！」

「馬鹿野郎！」

ドラゴスは再び手を上げた。

「村長である前に、あんたは父親だろ！」

殴り飛ばされて這いつばつた村長が顔を上げた。

「だが――」

「クドウナはあんたを何だと思ってたんだ？　まず村長か？　違うだろ！　たつた一人の父親だろが！」

村長は大きく目を見開き、恐ろしいものを見てしまったような表情になつた。村長は気が付いたのだ。

自分が最後まで、クドウナに村長として接していたことを……  
クドウナを「村長の娘」として扱っていたことを……  
父親としての一言すら、クドウナに『えなかつたことを……  
「自分の娘」に対し、最後に愛してると伝えなかつたことを……

を！

そして顔を伏せた。額を地面に押し付け、泣いていた。

「……クドウナ！　すまない……私は父親失格だ……お前は『村長の娘』じゃないのに！　『私の娘』なのに！　クドウナ……ああ……私は取り返しの付かないことをしてしまった！」

村長は地面を搔きむしりながらとめどなく頬を濡らした。

「馬鹿野郎！　なんであきらめてんだよ！」

ドラゴスはそう叱咤して村長の襟を掴んで引っ張り起こし、叫んだ。

「まだ生きてるんだろ？　ここであきらめたら捨てたのと同じじゃねえか！　抗つてみせろよ！　運命に――」

「……どうすればいいんだ――」

村長はすぐるような目付きで泣き叫んだ。

「俺が……助ける――」

ドラゴスは射抜くような目で、声高に叫びました。

「クフイー、場所はわかるのか？」

「ああ、だから早く――」

クフイーの縄を解くと、ドラゴスは言つた。

「最後に一つだけいいか……村長、あなたの願いは何だ！」

「願い……」

村長にもう迷いはなかつた。

「私の願いは、クドウナが生きて……幸せになることだ！」

涙と土にまみれた顔が、切なる願いを発した。

「だから……助けてくれ！ 私のたつた一人の娘を助けてくれ！ 頼む！」

そこにいたのは「村長」ではなく、一人の父親だった。

「そのクエスト！ 乗つたあ！」

そう叫ぶとドラゴスはすぐにクフィーを抱きかかえ、飛ぶように走り出した。そしてあっという間に、夕闇が覆う山奥に消えていった。

石造りの祭壇は冷たい。およそ十メートル四方の祭壇はちょっとした舞台のようで、周囲より大人一人分くらい高くなっている。クドウナはその中心にぼつんと座っていた。ちょうど日が落ちて夜になつた頃たいまつだった。祭壇の四隅に立てられた松明にも火がつけられ、そこに村の大人が一人ずつ立っている。

舞台の中心にいるクドウナは、これからどんなストーリーを迎えるのか知らない。ただわかっているのは、その結末が悲劇だということだけだ。「どうして自分が」などとは思わない。自分の意思で、悲劇の主役となつたのだ。

そこは村から一時間ほど歩いたところにある祭壇で、山の奥の深い場所にある。いつ作られたのか、何のために作られたのかは不明だ。恐らく祭壇であるうそれは、とにかく昔からそこにあつたのだ。村から遠いのでほとんど使われることもなく、後世には「祭壇」という呼び名も失われてしまうかもしない。クドウナはそんなことをふと思つた。

生け贋のクドウナにはもう残された時間などない。銀竜と約束した夜がもう来てしまつてているのだ。いつこの悲劇の結末が訪れてもおかしくはないだろう。しかし、動搖する訳でもない。クドウナは不思議と何も思わなかつた。むしろ心は空っぽで、今までの人生で泣いたり笑つたりしていたのも虚構の中の出来事であつたような気がしてしまう。祭壇の冷たさすら感じなくなつてきていた。

ぼんやりとしながら闇に浮かぶ松明の炎を見ていると、ますます思考が鈍くなる。しかし不思議なことに記憶が次々とよみがえり、

頭の中を満たしていく。クドウナはそこに手を伸ばしてしまった。  
考える力も失いつつあるクドウナはただ過去を眺めているだけの、  
人でない何かになりかけていた。

母親が死んだ時、クドウナは六歳だった。実感は湧かないものの「死」というものは既に理解していたので、もう一度と母親に会えないということがわかつていた。

だからこそ、泣いた。「死」はそれ 자체が悲しいのではなく、死んで会えなくなるから悲しいのだと学んだ。クドウナは聰明な子だつた。もしかしたらクドウナの生死観はその時に形成され、今に至る決断をさせたのかもしれない。

クドウナは元気な女の子であったが、母親が死んでからはふさぎ込むことが多く、よく泣いた。記憶を失った訳ではないが、言葉はほとんど発しなくなつた。以前は年の割に随分と利発な子供であったのに、急に赤ん坊のように幼くなつてしまつたのだ。村長はそれでも愛情を持つて育てていたが、村人には「クドウナはもう駄目かもしれないから」と真剣な顔で村長に助言する者もあつた。

半年が経つてもクドウナは成長しなかつた。体が大きくなつてよく食べるようになつただけで、意思疎通もままならない。村長の家でなく他の家の子供であつたら、間違いなく食い扶持を減らすために間引かれていただろう。

そんなある日、山で「事故」があつた。恐らく竜の仕業だらうが、山間部を通る街道で商隊が壊滅していた。食料品、特に肉類をふんだんに積んだ商隊であつた。普段ならそんなものを積んで竜が縄張りにしている可能性が高い場所を抜けようとする者などいない。だがそのぶん高く売れるので、その商隊は悪い商会にでもそそのかされたのか、賭けに出てしまつたのだろう。あるいは破産寸前の商人一家だつたのかもしれない。詳しいことはわからない。何しろ商隊

は護衛も含めて全員消えていたのだ。そこにあつたのは血と壊れた荷車、そして肉類の買い取り証書だけである。だから経緯はわからないのだ。だがその商隊の結末は明らかだった。竜かそれに準ずる獣に人も馬も積荷も食われたのだ。

ところが一人だけ生き残った者がいた。五歳前後の子供だつた。

「事故」現場の近くで奇跡的に無傷の状態で発見され、村に連れてこられた。連れてきた村人は親切心から拾つたようだが家計に余裕があるようではなかつたので、村長が引き取ることにした。他人の子供を育てた経験などないが、せめてその子供が自立出来るようになるまでは責任を持つて育てようと決めた。

その子供は「事故」のことを何も覚えていなかつた。それどころか全ての記憶を失つていたようだつた。言葉も話せず、まるで赤ん坊のようだつた。その様子からも、村長は自分の家しか受け入れられる場所はないと思つた。

子供は男の子で、村長は「クフイー」と名付けた。クドウナの弟として育てるにした。一人とも黒髪で肌の色もほとんど変わらないので本当の姉弟のようにも見えた。

村長はたつた一人で問題を抱えた二人を育てなければならぬので、相当骨が折れるのを覚悟した。

ところが、予想とは違つたことが起つた。赤ん坊のようであつたはずのクドウナが、同じく赤ん坊のようなクフイーに対し、母親の如く振舞いだしたのだ。クフイーに出ない乳を吸わせ、あやし、寝かしつけていた。恐らくそれは失つた母を求めるせいで発現した一種の病的なものであろうが、クドウナはそれによつて言葉も思考も取り戻していつた。だが以前のクドウナに戻つたというより、別の人間として成長したという感じであつた。

クドウナが年相応の知能を獲得すると、クフイーの知能も飛躍的に向上した。記憶が戻つたわけではないしクドウナほどの急変ではなかつたが、驚くべき速さの成長を見せた。

数年が経つと、二人の関係はまさに姉と弟であつた。クドウナは

もう病的な母親ではなくなり、クフイーも赤ん坊ではなくなった。知能はむしろ同年代の子供たちより上回るほどで、クドウナに至つては知性と言うべきものすら時折垣間見える。

二人はいつも寄り添つて生きてきた。村長には一人が人格を共有しているかのようにも見えた。事実、一人は互いの存在によつて失われた人格を再形成したのだ。そこには「絆」なんていうものを超えた、もっと深いところで繋がつた何かがあつた。たとえクドウナの実父である村長でも、そこには入つていけないようにも思えた。こうして育つた二人だが、その関係はいつしか対等なものとなり、ここところは姉と弟というより恋人のようになつてきた。実際、二人は村長に「いつか絶対に結婚する」とも言つたこともあつた。クドウナとクフイーは十四歳と十二歳である。村長はまだそんなことを考える時期じやないと二人には言つたものの、そうなるのが一番いいと思つた。

だがそんな一人の物語も突然途絶えてしまつこととなつた。例の銀竜がやつてきたせいだ。

それは朝の早い時間だつた。銀竜は村の外れにやつてくるなり、発見した村人を襲うのではなく、話しかけた。銀竜は交渉を求めたのだった。

「村を襲われたくなかったら生娘をよこせ」

銀竜は地を震わすような低い声で、駆けつけた村長に言つた。

「生娘！？ 穀物じやだめか？」

「駄目だ」

「じゃあ肉類は？ 生きた牛や馬を何頭か用意しよう！」

「生娘だ」

「どうしてもか

「ああ」

村を襲われたら何人も死ぬ。家だつて壊される。被害を最小限にするにはやはり条件を飲むしかないだろう。たとえこれから何度もこういうことが起こるとしても、村を襲われたら一度で全てを失う。だから仕方ないのだ。村長はそう考えた。

「……わかった。用意しよう」

苦い顔をしながら村長は承諾した。

「村長！ それは酷いんじやないか！」

村長を責める声がいくつか飛び交った。野次馬が下手に竜を刺激しないようにするため、竜が来たことは秘密にしてあつたが、それでも辺りには村人が集まつて来ていたのだ。

「他に村を守る方法があるのか！」

村長が一喝すると、騒ぎ始めた野次馬も途端に静かになった。

「は、は、は。物分りのいい男だ。では今日の夜までに

「待つてくれ！ せめて三日後に出でないか！？」

「遅い」

「じゃあ明日！ 明日の夜でどうか！？」

「仕方ない……物分りのいいお前に免じて、今日の夜なら生娘は一人だけでいい」

「くつ……なら……今田で頼む。……場所は祭壇でいいか」

「祭壇？」

「ここよりも山の奥にある石造りの舞台だ」

「あそこか……そのほうがここより近くていいな。じゃあ夜までに必ず生娘を連れて來い」

「ああ……」

銀竜はそつして村を全く荒らさずに帰つていった。

皆、無言だった。発言にともなう責任が大きすぎて、誰も口を出せなかつた。しかし、考へていることは皆同じだった。

誰を生け贋にするのか。

沈黙は長かつた。

すると、静寂を破る一聲が凜と響いた。

「私が行く」

集まつた村人をかき分けて村長の前に現れたのは、クドウナだつた。

「クドウナ！　付いてくるなと言つただろう！」

「ごめんなさい……でも私も役に立ちたかったの！」

村長は狼狽しながらもクドウナを諭そうとした。

「お前は家に帰つてなさい。この問題はこれから大人たちで話し合うから……」

「その必要はないわ。私が行く」

クドウナはまっすぐな眼差しをしていた。

「クドウナ！　どうしてだ！？」

村長の顔は悲しみに崩れる。

「誰かが行かなくちやならない。でも誰だつて行きたくない。だからこそ、他の人に押し付ける訳には行かないの。私は村長の娘よ。私が責任を持つて行くわ」

毅然とした態度であつた。

周囲の者は顔を伏せ、目を合わせない。だが村長は無言のうちに、村人たちの期待を感じていた。そして、クドウナが自主的に名乗り出た以上、後には退けないこともわかつていた。

銀竜と交渉したのは村長だ。全滅の可能性より一人の生け贋を選んだのも村長だ。決断には責任が伴う。村長として、ここは腹をくるしかない。そう思った。

「クドウナ……村長の娘として……この村を守るために……行つてくれないか……」

「もちろんよ！　村長の娘として私がこの村を守つてみせるわ」

クドウナは堂々と胸を張った。村人たちは申し訳なさそうな顔をしつつも、尊敬の眼差しをクドウナと村長に向けていた。

クドウナは間を置かずに、祭司に連れられて祭壇へと向かつた。

そうして事情を知らぬ村人には「クドウナが竜にさらわれて食われた」とだけ伝えられ、交渉のことは秘密とされた。

クフィーはそれを聞いて放心状態となつた。クドウナとは体の一部を共有しているかのように思つていたのだ。クドウナの死という情報を受け入れるに従い、心が壊れ始めた。

その様子を見た村長はやはりクフィーには真実を話すべきだと感じ、ありのままを話した。するとクフィーは目に輝きを取り戻したが家を飛び出し、祭壇を田指して駆け出した。だがドラゴスの協力で捉えられてしまい、縄で縛られたのだった。

銀竜が来てから、クドウナはクフィーと会つていない。会おうともしなかつた。会つてしまつたら、別れがつらくなるのだ。だから既に別れてしまつている状態を維持しようとした。それに、決意が揺らぐことも恐れていた。

そうして一日中、クドウナは祭壇に座らされていた。ずっとぼんやりしていたのだが、夜になる頃には心が虚ろになつっていた。

自分という泉の奥底に沈んでいくような感じであった。風に揺れる木々の音も、松明の灯りも、水の外から中へ伝わってくるようだ。その中でただ、過去の記憶を眺めていた。「人」というにはあまりにも、感情のない存在となつていた。

しかし、何かが聞こえた。水の外から誰かが呼ぶのだ。次第にその声は鮮明となる。

ああ、ばかだなあ……  
まずは呆れた。

どうして来ちゃったの……

でも、溢れ出る愛しさが止まらない。

会いたかった……

クドウナを水没させていた水が引き、田の前に世界がひらけ  
る！

「クフイー！」

「クドウナ！」

たつた一度の視線で、千の愛しさが交わる。

クフイーはクドウナの知らない青年に抱かれていた。

「こら！ 来ては行けないはずだぞ！」

祭壇の周りにいた大人四人が詰め寄った。

青年はクフイーを下ろすと言った。

「悪いな」

すると瞬く間に四人を氣絶させた。

「お前がクドウナか？」

青年が問うと、クドウナはこくりと頷いた。

「あ、あなたは誰？」

クドウナは警戒しているようだった。

「俺か？ 俺はドラゴス。お前たちの願いを叶えに来た男だ」「願い……」

ドラゴスとクフイーは祭壇に上った。クドウナはクフイーのほうも見やると、唇を噛み締めた。それを見てクフイーが聞いた。

「どうした？」

「……帰つて」

「え？」

「帰つてって言つてるの！」

ドラゴスとクフイーは顔を見合せた。そこにクドウナの怒声が割つて入る。

「私が生け贋にならないと村がどうなるかわかつてゐるの？ それとも私じやだめで他の子が生け贋になるのはいいつていうの？」  
「でも…」

クフイーとドラゴスが近づくと、クドウナは逃げ、距離をとつた。

「私は村を救うのよ！ どうしてそれを台無しにしようとするの…」

すると地鳴りのような音が響き始めた。しかしそれは声だった。

「は、は、は。お前も物分りがいいなあ」

ドラゴスたちが声のしたほうを向くと、そこには十メートル以上はある、巨大な龍がいた。暗闇を松明が照らしているので、ずんぐりとして全身をくすんだ銀色の鱗が覆っている姿がよく見えた。まさしく銀竜であった。

「いつの間に！」

ドラゴスは驚いた。銀竜はあの巨体にして音も立てずにこへやつてきたのだ。一般的な銀竜は走るのが苦手だというが、この自我竜にそんな常識は通用しなさそうだとドラゴスは思った。

ドラゴスとクフィーが銀竜にたじろいでいる隙にクドウナは祭壇から飛び降り、銀竜のほうへ駆け出した。慌ててドラゴスが連れ戻そうとすると、クドウナは「駄目！」と強く言い放った。そうしてドラゴスとクフィーが戸惑つていろいろうちにクドウナは銀竜の横へたどり着いてしまった。

「どうして！」「

クフィーはクドウナに悲しみと嘆きの入り混じった声を投げかける。しかし、クドウナは睨み返す。

「『どうして』はこっちの台詞よ！ どうして追つてきたの？ 私は村を救うの！ 無駄にしないで！」

「俺だつてそれはわかつてるよ！ でもクドウナを失いたくないんだ！」

「私だつてクフィーと別れたくない！ だけどそれは他の人だつて一緒に！ 自分たちだけの幸せのために他人を犠牲にするなんて私には出来ない！」

クドウナは泣き叫ぶ。胸の痛みはクフィーと同じだった。だが痛みがわかるぶん、それを他人に押し付けることが出来ないのだ。傍らでは銀竜がそのやり取りを悠然と眺めていた。楽しげな様子さえ見せる。

「他の方法は考えなかつたのかよ」

ドリゴスが問う。

「他の方法なんかあるわけないでしょー！」

クドウナの声は鋭く響く。

「なんであきらめてんだよー。」

ドリゴスは声を荒らげて言つた。クドウナも両手をこいつぱいに拡げて叫ぶ。

「あきらめた訳じやない！ ちゃんと考えた結果これしかないの！」

「それはそん時の話だろ！ 今は状況が違うかもしれない、変えら

れるかもしない。そんな風には思わないのかよ！」

「そんなこと言つたつてどうしようもないでしょー！」

「馬鹿野郎！ それをあきらめてるつて言つんだよー。」

クドウナの顔が悲痛にゆがんだ。拳を握つたクドウナは上田に睨みながら声を上げる。

「じゃあどうすればいいのよー。」

「馬鹿野郎！ 田の前に道を作るのは、『どつすればいいか』じゃない。『どつしたいか』だ！ 叫べ！ お前の願いを！」「

「願い……村を救う……村を救うの！ だから私が犠牲になるの！..」

「ふざけんな！ それじゃ全然救えないだろ？ が！ お前がいなくなつたらクフイーはどうなる！ 村長はどうなる！ 何よりお前が、救われねえじゃねえか！」

クドウナは歯を食いしばった。

「願いつていうのもっと大きくて、もっと先にあるもんなんだよ。」

クドウナ、過去のお前は何を願つた。村を救うなんて言つてるけど、過去の自分にもそう言い訳するのか？ 未来に期待していたその日を、ちゃんと見る」ことが出来るか？ お前は過去のお前に期待されて今を生きているはずだろ！ なのにあきらめて、もつともらしこ言い訳をすんじゃねえよー 最初は上手くいかないかも知れない。でもそれで終わりじゃないんだ。あきらめなきやまだ先があるんだ！ だから、最後まであがき続けてみせりよー。」

クドウナはうつむき、悔しそうに頬を濡らす。

「でも、私には……変える力がないの！」

「馬鹿野郎！ 一人で抱え込むんじゃねえ！ たとえ力がなくても、誰かに願いを託したり、協力したりすれば変えられるかもしれないとは思わないのかよ！ どうして願いのために道を模索し続けないんだ！ 力なら俺が持つてるし、俺は村長やクフイーの願いによつてここに来た。後はお前さえ願えば、俺は全力でお前を助ける。絶対に死なせない！ どんな悲劇だらうと必ず変えてみせる！ だから叫べ！ お前の願いは何だ！ 一番の願いは何だ！」

一番の願い。

その言葉はクドウナに届くと、胸の奥へと潜つていった。それはとても明るくて、クドウナの薄暗い泉を照らしながら下へ下へと進んでいく。そうして泉の底に落ちると、燐然さんぜんと輝きだした。すると絵のように断片的に散らばるクドウナの記憶の一つ一つを、鮮明に浮かび上がらせた。

クフイー……

そこにはクフイーの顔ばかりだった。最初から最後まで、クフイーとの思い出なのだ。クドウナの人生は、クフイーとの人生であった。

クフイー！

クドウナは地面に膝をついた。ぽろぽろと涙がこぼれ、息が上手く出来なくて苦しい。でも、それでも 願つた。嗚咽を打ち破つて叫んだ。

「私は……私は……生きたい！ あの村で！ クフイーと一緒に生きたい！」

ドラゴスは大きく息を吸つた。

「そのクエスト！ 乗つたあ！」

空気を震わせ、宣言した。そして踏ん張つたかと思うとあつという間にクドウナの元へ移動し、抱きかかえた。すると銀竜もそうはさせじとすかさず鋭い爪でドラゴスたちを引き裂こうとした。だが

突き出されたドラゴスの左手の前で爪はぴたりと止まつた。

「あいつらの願いは邪魔させねえよ！」

銀竜は止められたことに驚いたようだつた。その隙にドラゴスはクドウナを抱えたまま身を翻し、再び祭壇へ一瞬にして戻つた。

「クドウナ！」

クフイーはすぐさまクドウナに抱きついた。

「ごめんね……ごめんね……」

クドウナはそればかり繰り返し、クフイーに顔をうずめてとめどなく涙した。

「お前ら、ちゃんとさがつてろよ」

ドラゴスはそう言つて祭壇を降り、銀竜の前に立つた。

「おい……何をしてるんだ……」「

銀竜の低い声は怒りを含み、より一層地鳴りのような響きとなつた。

しかしドーナスは答えない。銀龍に向けるのはただの射抜くよ。

銀竜も対話が通用する状況ではなしと察したのか、押し黙る。途端に静寂が染み渡る。

松明が、銀竜とドラゴスを照らす。

風により、木々がざわめく。潮音にも似たその音は、エリースの鼓動を徐々に高めていく。そしてより強く、銀竜を睨む。

両者の間には張り詰めた空気が流れていだ。それは強く張りれたピアノ線のようで、それでいて脆く纖細なガラス細工のように、危うい均衡を保つてゐる。しかし世界が止まつてしまつたかのように、

風が止まつた。そして動き出す世界

銀竜が爪を立てて襲い掛かる。だがドラゴスは即座に前へ出て回避するとともに飛び上がり、銀竜の懷に入る。そこで強化した拳による渾身の一撃を銀竜の首元に叩き込む。

- なに! ?

しかし痛みはドラゴスにあつた。銀竜の鱗は予想以上に硬く、鋼より硬いはずのドラゴスの拳を砕く。

く飛びのいた。

ところが銀竜はそれを読んでいたのか、ドラゴスが着地するタイミングに合わせた一撃を繰り出す。

避けられそうになかった。ドラゴスは左腕を突き出して得意の防御姿勢をとった。

くつ！ サっき俺が止めた時よりも本気なはずだ。

ドラゴスは目一杯の魔力を纏つた。

衝撃はなく、ドラゴスは銀竜の鋭い爪が目の前を掠めていくのを見た。そして振りぬかれる銀竜の腕。宙を舞い、夜の森に消えていったのはドラゴスの 左腕。血しづきがドラゴスの左頬を赤くする。

ドラゴスは起こったことすぐには理解出来なかつた。速すぎる脈拍がドラゴスに異常を伝え、そこで状況に気付く。

銀竜に防御を破られたのだ。しかもドラゴスは銀竜の鱗を打ち破ることが出来なかつた。

力の差。眼前に立ちはだかるのは圧倒的な力の差。

ドラゴスは振り返り、祭壇の陰に隠れるクフィーとクドウナに叫ぶ。

「逃げろ！ 今すぐ走れ！」

もし銀竜が一人を狙い始めたら、ドラゴスには守る術がない。

そしてドラゴスは銀竜と向き直り、左腕のことを考える。肩から先がなくなり、大量の血が溢れ続けていた。

くそつ！ どうすればいいんだ！ 治すか？ いや、こんなの治せる訳がない！ 魔力を込めて止血くらいは出来るかもしれない… 驄目だ、時間がない！ くそつ！ くそつ！ くそつ！ 早く血を止めないと 死ぬ！

対照的に銀竜は余裕もつて追撃する。大きく振り上げた腕を叩き潰すように振り下ろす。

ドラゴスは右手で傷口を押さえながらなんとかかわし、銀竜となるべく距離をとつた。

とりあえず今はこれしか！

銀竜のさらなる追撃が来る前に、ドラゴスは傷口を凍らせた。応急処置にしからないうが、とにかく血を止めなければならなかつたの

だ。

銀竜は次々と攻撃を繰り出した。銀竜の移動自体は速くないが、その腕の振りは速く、たとえドラゴスでも全く余裕はない。かといって止められる攻撃ではない。必死の回避を繰り返すことにドラゴスは体力を消耗していった。

それでもドラゴスはなるべく祭壇に銀竜を近づけないよう注意を払っていた。確認は出来ないが、祭壇の陰には気を失ったままの四人の大人がいるからだ。もしかしたらクフイーとクドウナが彼らを起こし、一緒に逃げていったかもしれないが、クフイーたちが逃げずにいる可能性だつてある。銀竜の攻撃から逃れるので精一杯で確かめられない以上、祭壇にはやはり銀竜を近づけるべきではない。ドラゴスは劣勢に立ち、なおかつ疲労により刻一刻と敗北へと向かっているが、懸命に打開策を探していた。

敗北は即ち死。

たとえ力の差があるとしても、負けるわけにはいかないのだ。

しかし不思議と逃げようとは思わなかつた。単なる格闘ではない、命を賭けた勝負。死を意識せざるを得ない戦い。それがドラゴスの心と体に、生命の躍動を与える。

そんな経験は初めてであつた。左腕を失つてから時間が経ち、自らの絶望的な立場を客観的に理解するほど、心が燃え盛る。

ドラゴスは実感していた。いま自分は命を燃やして生きている！

決して楽しくはない。つらい状況にも変わりない。自分が銀竜よりも弱いという事実も叫び出したいほどに悔しい。

しかし、生きている。ここで生きている。むしろ自分という存在が生きるにはこうあるべきだったのではないか。そう感じた。

「しつくつくる……」

ドラゴスは呟いていた。そして銀竜の懷に飛び込んだ。しばらく時間を稼いだので、痛めた右の拳もほぼ治癒出来了た。

ドラゴスはその拳に再度魔力を纏い、銀竜の腹を殴つた。

だが結果は依然として変わらない。敗れるのはドラゴスの方であつた。鋼より硬い魔力は銀竜の鱗に砕かれ、拳も鱗に傷一つ与えられない。

すぐさま注意深く距離をとり、再び回避し続ける状態へと戻った。

銀竜の攻撃を避けることを第一優先としながらも、ドラゴスは痛めた拳に魔力を込め、患部の治癒力を強化する。今度は全力で殴つた訳ではなかつたので、すぐに治すことが出来るはずであった。

ところが拳に意識を集中させると、銀竜の鱗に触れた感覚が脳裏によみがえり、気が散つた。あのいぶし銀のような色をした鱗殴つただけでもわかる、その極めて硬い質感は初めての経験だつた。金属よりもさらに硬質なのだ。

木と金属の質感は誰でもわかるくらいに違うが、金属と銀竜の鱗の質感にもそれほどの差があつた。鋼より硬いという程度であつたドラゴスの魔力が通用しない訳である。銀竜の鱗はまるで別次元の硬度であつたのだ。

やや時間がかかつて右の拳の治癒を終えた時にはもう、ドラゴスの体力は限界に近づいていた。意識も朦朧とし始めている。しかしドラゴスの思考を支配するのは銀竜の鱗ばかりであつた。

「なあ」

ドラゴスは銀竜に問いかけた。

「お前の爪と鱗、どつちが硬いんだ」

突然の問いかけに意表を突かれたのか、銀竜は攻撃の手をぴたりと止めた。そして少し考えたのち、大きく笑つた。

「残念だつたな！ どうにかして俺の爪で鱗を割ろうと思つたんだろ？ だが爪よりも鱗の方が遥かに硬い！」

銀竜は愉快そうに言い放つた。

「俺の鱗より硬いものなどないのだ！」

「そうか……」

「なんだ、諦めたのか……は。は。物分りのいい奴め」

ドラゴスは銀竜の方を見ず、自分の右手をじつと見つめていた。

そして手のひらの感触を確かめるよつて指を開じてみる。

「やつぱりお前の鱗が一番かもな」

「だがな……」

銀竜はその隙に渾身の一撃を食らわせるため、腕を振り上げていた。

「これでとどめだ！」

かなり大振りだが、銀竜の爪は凄まじい速度でドラゴスへ向かう。ドラゴスもそれにすぐ気付いたが、避けられそうになかった。ドラゴスは右手を突き出し、銀竜の爪を受ける。

すると左腕を失った時と同じように、銀竜の腕は止まることがなく振りぬかれた。そして再び宙に舞うものがあった。

「ばかめ！」

銀竜は高らかに言づ。しかしドラゴスは落ち着いていた。

「バカはお前だ」

宙を舞っていたものが地面に突き刺さる。

銀竜の爪。

「なぜだ！」

ドラゴスの右手を覆うのは 銀竜の鱗。

「見て触って、忘れられねえんだ。そりやイメージ出来るさ。悪いがそういう能力なんだ。お前にはいい物をもらつたよ」

とは言うものの、肌に纏う魔力を銀竜の鱗として発現させるには相当の魔力を必要とした。

ドラゴスは立っているのも精一杯で、わずかによろめいてしまった。

しかしその脱力を余裕の表れだと受け取ったのか、銀竜はその隙に追撃をせず、たじろいだ。

「どうした……来いよ！」

射抜くような目。

ドラゴスは今にも倒れこみそうな自分の体に鞭を打ち、全身全霊を込めて叫んだ。

ここで決する。それは覚悟であり賭けであった。すべての魔力を右の拳に集中させ、一切の防御を捨てる。

ドラゴスはすぐさま動きだした。まっすぐに走り、飛び込むようにして銀竜の首元へ拳を叩き込む。ぶつかり合ひ鱗と鱗が激しい衝突音とともに火花を散らし、互いに砕ける。

するとそこへ銀竜の腕が襲い掛かる。銀竜は後ろにのけぞりつつも払いのけるようにしてドラゴスを高く跳ね飛ばす。防御のための魔力を纏つていないと、ドラゴスは全身が軋むほど衝撃を受けた。猛烈な勢いで意識が飛びそうになるが、歯を食いしばり必死に踏みとどまる。

宙高く投げ出されたドラゴスは、祭壇の上に落下しようとしていた。しかし意識を保つことだけで精一杯で、空中で姿勢を整える余裕などなかった。そしてもう残っているかもわからない魔力を、着地に使ってしまう訳にはいかなかつた。ドラゴスは再び歯を食いしばり、落下による一度目の衝撃を耐えた。

石造りの祭壇に倒れた体をなんとか起こし、力を振り絞つて立ち上がる。もはや凍らせた左肩も溶け始めていたが、それに対処する魔力も残つていない。徐々に血が染み出してきているのをドラゴスは感じていた。

銀竜の首元を見ると、先ほど拳を叩き込んだ場所の鱗が割れている。次の攻撃もそこだ。

しかし銀竜と同様に、ドラゴスが拳に纏つた鱗も碎け散つてしまい、消えていた。魔力はもう、尽きかけていた。

「まだ……」

ドラゴスは右の拳に意識を集中させる。

「お前の鱗が砕けても、俺はまだ……」

命を燃やし、魂を削るよう、魔力を振りしぶる。

「終わらねえんだよ！」

決死の思いで精神を滾らせる！

ドラゴスは再び拳に銀竜の鱗を纏い、前へ走り出す。そして先ほ

同じ場所に叩き込む！

既に砕けている銀竜の鱗とぶつかり合つ拳。しかし先ほどとは違  
い、ドラゴスの拳は止まらない。硬い鱗を纏つた拳が銀竜の皮膚を、  
突き破る。傷はまだそれほど深くないが、赤い血が飛び散った。

銀竜は唸り声とともにまたもやドラゴスを払いのけようとするが、ドラゴスは飛びのいて回避する。銀竜は首元から血を流しながら、後ろへバランスを崩した。

瞬間、ドラゴスの左肩から血が噴き出す。

び乗る。

拳に纏ついていた鱗も保てずに消えている。しかしもう魔力など残つておらず、生身の拳で殴るしかない。

—あああああ！

殴る！

銀竜の噴血が止まつた。血は傷口からただ溢れるようになってあくのみとなつた。銀竜の心臓が止まつたからであつた。

夜はそこで静寂を取り戻した。風が木々をざわめかせる。まるで潮が引くように、ドラゴスは意識を失つた。

ドラゴスが銀竜の上から力なく転げ落ちると、あとは静寂のみが残つた。

旅の一行が借りた一軒とは別の家に、ベッドが一つあった。そこには男が一人横たわっている。まるで人形のように動かなかつた。片腕がないため、本当に壊れた人形のような有様だつた。ドラゴスであつた。

傍らには椅子が三つ。リイラ、テナ、チトクが座つていた。沈黙の深夜であつた。

「あ……」

最初に気が付いたのはリイラだつた。ともに過ごした時間が長いせいだらう。リイラと同じようにドラゴスを看ていたテナとチトクには、何の変化もないよう見えた。現にドラゴスは目を閉じたまま微動だにせず、横たわつたままだ。

しかし、リイラにはわかつたのだ。ドラゴスが意識を取り戻したこと。

「ん……」

ドラゴスは目を開いた。真っ先に視界へ入つたのは、リイラだつた。喜びか驚きか、それとも安堵なのかわからない、なんとも言えない表情をしている。目には涙を浮かべていた。そして後からリイラの握つている手が自分の手だと、ドラゴスは気が付いた。

「ドラゴスさんっ！」

「大丈夫、大丈夫だよ……」

リイラが呼びかけると、ドラゴスは反射的に弱弱しい声で答えた。リイラの心配そうな顔を見ると、つい大丈夫だと言つてやりたくなりなのだ。

もう一方の手で頭をなでてやろううと思い、そこで気付く。ないのだ、左手が。

「うう……」

ドラゴスはそうして銀竜との戦いを思い出し、自分の今の状況も

おおよそ把握した。

「大丈夫。死なずに済んだし、もう大丈夫」依然として弱弱しい声しか出せなかつたが、今度ははつきりと言つた。

ドライゴスの意識がしつかりとしているのを確認したからか、次にテナとチトクが寄つてきた。

「ドライゴス！」

「どうした……」

「ばかー、どうしたじやないよー、急にどつか行つたと思つたらボロボロで運ばれてきて！ 全然起きないからお姉さん心配したんだよー、ドライゴスに限つてそんなことは絶対ないと信じてたけど……もう起きないんじやないかつて……もしかしたら、死んじやうんじやないかつて思うと……」

そこからはもう言葉にならない声を上げて、テナは泣き出した。それまでよほど思い詰めていたのだろう。目一杯泣いた。チトクも直立したまま、黙つて泣いていた。

「俺が死ぬわけないだろ、ばか……」

安心させてあげたいが、力の入らない声であつたため説得力はなかつた。

目を覚ましてから時間が経つにつれ、体の感覚が鮮明になつてくる。そうして感じるのは、左腕の激痛だつた。

捻りつぶされるような痛みが左腕を襲う。しかし目をやると、肩から先には何もない。幻肢痛というものであつた。

幻肢痛は体の一部を失つたことを脳がちゃんと認識出来ていないことで起つると言われている。だが「ないこと」を認識するのは難しい。

ドライゴスもそうであった。ないはずなのに、目を閉じればそこには痛む左腕があるかのように思えてならなかつた。

ドライゴスは右手で無意識にさすりとした。すると気が付いた。

……これは！

わずかだが、自然と魔力が左腕の位置に発現していたのだ。そこでドラゴスは目をつぶつたまま、より左腕に意識を集中させてみた。すると、ある程度の硬さを持つた見えない左腕が形成されていた。そうか、常に左腕を強くイメージしている状態なのか……それならば……

「テナ……」

「なに？ どうしたの？ お姉さんがなんでもしてあげるよ……」

テナは深刻そうにたずねる。

「そのうち手袋を縫つてくれないか……肩まですっぽり入るやつだ。生地は革がいい……大きさは右手を参考にして……」

「え？ う、うん！ わかった！」

見えない左手も手袋を付ければよりイメージしやすくなり、発現させやすくなるだろうとドラゴスは思った。荷馬車には裁縫用具一式を積んでおり、テナは近いうちに作ってくれるだろう。確かに、なめし革も十分にあつたはずだ。

思い付きをテナに告げると、ドラゴスは再び目を閉じた。まだ体力が回復しておらず、もう少し休む必要があつたからだ。それに起きていると意識しなくても見えない左手が発現してしまい、魔力を消費し続けている。意識すればなおさらで、何もしていなくても疲労が蓄積していく。

「また少し……寝るよ……」

ドラゴスはそう言つて眠り始めた。

それから一時間ほど寝て目を覚ますと、今度は意識も先ほどより幾分か明瞭となつていた。室内は暗く、蠟燭の灯りしかなかつた。ドラゴスはそこでようやく夜であると知つた。

「大丈夫ですか？」

ドラゴスが体を起こすと、リイラが声を掛けた。

「ああ、だいぶ良くなつたよ」

椅子に座つたまま眠っていたチトクも、すぐに目を覚ました。

「今、夜中なのか？」

「はい」

田をこすりながらチトクが説明した。

「ドラゴスさんは銀竜を倒した後すぐにここへ運びこまれて、それから丸一日以上眠つっていましたから」

「そんなに寝ていたのか……」

ドラゴスは銀竜との戦いが過酷なものだったことを改めて思い知る。勝敗は分けたのはわずかな差だった。

ドラゴスの力は明らかに銀竜より劣っていた。ドラゴスは銀竜の力を上手く利用して生き延びたにすぎない。「勝った」と言つには程遠い勝利であった。

くそっ！

悔しさが込み上げる。自分の弱さに腹が立つ。

「ドラゴスさん」

思いつめた顔をしているドラゴスに、チトクが話しかける。

「あの、ごめんなさい……」

「ドラゴスには何のことだかわからなかつた。

「僕、全然役に立てなくて……ドラゴスさんが祭壇へ向かつた時も追いかけたんですが、ドラゴスさんをここへ運んだのも祭壇にいた村の人たちですし……僕はそれを見ることしか出来なくて……」

チトクは沈痛な面持ちであった。

「そんなこと気にするなよ……」

以前のドラゴスならそこで笑つてみせて背中を叩いだらう。しかし、今のドラゴスにはそれが出来なかつた。チトクが自分の力のなさを嘆く気持ちがよくわかつたのだ。

力のない者の気持ちはわからない。今までそう思つていたのは所詮、傲慢であつたのだ。今ドラゴスの中に渦巻く感情はチトクのものと何ら変わらない。ただ力のないことが悔しいのだ。だから何を言つべきかもわからなかつた。

「そういえば、テナは？」

「ドラゴスは逃げるみうみ、話を変えた。

「姉ちゃんはさつさつドリゴスさんの右手を測つてましたし、最初に借りた方の一軒でさつそく革手袋を縫つてると思います」

依然として暗い調子でチトクは話す。

「そんなに急がなくてもいいんだけどな……今日はもう遅いし、寝るようになつといってくれないか？　お前たちも寝ていよい。俺はもう大丈夫だから」

ドラゴスがそう告げると、チトクは「わかりました」と言つてやの場を後にした。残つたリイラは「私はもう少し」とだけ言つて、ドラゴスの傍らに残つた。

それからしばらくすると、チトクが静かに戻つてきた。

「どうした？」

チトクは俯いたまま、唇を噛み締める。そして拳を強く握つてから言つた。

「『めんなさい、出来ませんでした……』

「出来ない？」

「出来なかつたんです、僕には」

チトクの頬を涙が伝つ。

「きつと姉ちゃんにとつてのドラゴスさんは、僕らが思つてゐる以上に特別で……それなのにこんなに傷ついて帰つてきて……心の支えが揺らいで、不安で、どうしたらいいかわからなくなつて……震える手で！　泣きながら！　がむしゃらに縫つてたんですね！……僕には、無力な僕には！　止めることが出来ませんでした！」

チトクが嗚咽混じりに叫ぶ。

「一体僕はどこまで無力なんでしょうか！　どうしてこんなに無力なんでしょうか！」

「そんなに気負つことじやないよ……」

ドラゴスはすべて自分の弱さが招いてしまつた結果だと思つた。

「ドラゴスさんに力があるからそう言えるんです！」

興奮したチトクはそこまで言つてから、我に返つた。

「『めんなさい』……」

沈黙が流れる。

「違うよ」

ドラゴスは静かな声で言つた。

「力があつたら、こんな有様にはなつてないさ」

ドラゴスはしばし考える。これはチトクの問題であるが、ドラゴスの問題でもあった。

「そもそも力は……『あるかないか』で考へていいものなのかな。力のない奴なんていない。誰もが同じ道の上にいるんだ。ただ前に進めばより強くなる。きっとそれだけだ。だからチトク、進もう。これから、俺もお前もたくさん進んで……強くなろう」

それがドラゴスがチトクに向けた、いや、自分自身に向けた答えであつた。進むしかないのだ。

「……はい」

かすれた声だったが、チトクはしっかりと田でドラゴスを見据え、噛み締めるように返事をした。

「今日はもう寝とけ。テナにも休んで欲しいけど……今はテナのしたいようにさせるしかないかな」

ドラゴスに言われ、チトクは今度こそ寝に行つた。

残るリイラと一人だけになつた。傍らにリイラがいるのはいく自然なことなので、ドラゴスはそのままにしていた。しかし、リイラだつてずっとここにいる必要はない。こうして甘えてこる訳にはいかない。

ドラゴスがそう思つた時、リイラが問う。

「もういいんですか？」

体のことだろ？とドラゴスは思つた。

「ああ、もう大丈夫だ」

しかし、リイラは再び問う。

「本当ですか？」

なんだろうか。ドラゴスは不思議に思つた。

「ああ本当だ」

リイラはドラゴスの手を見つめた。その眼差しには力がこもつている。

「嘘はいけませんよ？」

リイラがドラゴスの手を強く握る。

「わかるんですから、ドラゴスさんが全然大丈夫じゃないことくらい。何か強い感情を抑えつけて、無理をして穏やかに振舞つているように見えます。……前を向いているドラゴスさんはかっこいいです。でも、心に蓋をしてたらドラゴスさんじゃないですよ。無理はしないでください」

「そんなこと」

リイラはドラゴスの言葉を遮つて続ける。

「私もドラゴスさんに抱えてもらつてばかりじゃ駄目なんです。このままずつとドラゴスさんのお荷物じゃ駄目なんです。私は『物』じゃない。ドラゴスさんが私を『人』にしてくれたから……」

リイラの声に熱がこまる。

「私は同じ『人』として、ドラゴスさんと対等でありたいと思います。戦いでは同じ場所には立てないかもしれません……せめて心は！ ドラゴスさんとともにありたいんです！ あなたを支える『人』でありたいんです！」

リイラの手は暖かかった。だが伝わつてくるのは熱だけでなく、強い気持ちもドラゴスに届いていた。リイラの心は今、しつかりと自分の足で立ち始めていた。

それに触れて、ドラゴスは気付いた。自分は強がっていたのだ。力だけでなく、自分の心ももつと強いものだと過信していた。だけど、そうじやなかつた。

「リイラの言う通り、やつぱり無理してたかもな。これからもつと強くなるうつていう前向きな気持ちは嘘じやないよ。でも本当は銀竜が自分より強かつたことが、悔しくて……」

ドラゴスはリイラの心を前にしてよつやく、自分の心が傷ついて  
潰れかけているのを知った。

「悔しくて悔しくて……」

ドラゴスは悔しさに歯を食いしばる。気づけば涙を流していた。  
じついう時は、リイラの心に寄りかかってもいいのかもしれないと思つた。

リイラは腰をベッドに移し、ドラゴスの手をぎゅっと握つてみせた。

「悔しくて……くわッ！　くわッ！　くわッ！」

リイラはドラゴスの頭をそっと抱き寄せた。

「くわッ……くわッ……」

ドラゴスは泣いた。リイラの胸の中で思い切り泣いた。

「大丈夫、あなたはきっと強くなる。もっともっと強くなる。だから大丈夫、大丈夫」

リイラはドラゴスを強く抱きしめる。そつするほどに心の蓋が取れ、ドラゴスはむせび泣く。

静かな夜に、心が触れ合ひ。

彼は上を見たから、自分の低さを知ったのだ。見上げた世界では自分という存在はいつだって一番下であり、敗北者となる。

しかしそれでも上を見続ける敗北者こそ、強くなる。

## 第三章 山麓の村 3の3（後書き）

竜の目のかエスト 第三章 完

第四章「西部首都」へ続く……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0021n/>

竜の目のクエスト 【少年漫画的王道ファンタジー小説】

2011年5月5日22時50分発行